

林田池ノ内遺跡

— 都市計画道路総社川崎線建設に伴う発掘調査 —

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第75集

2005

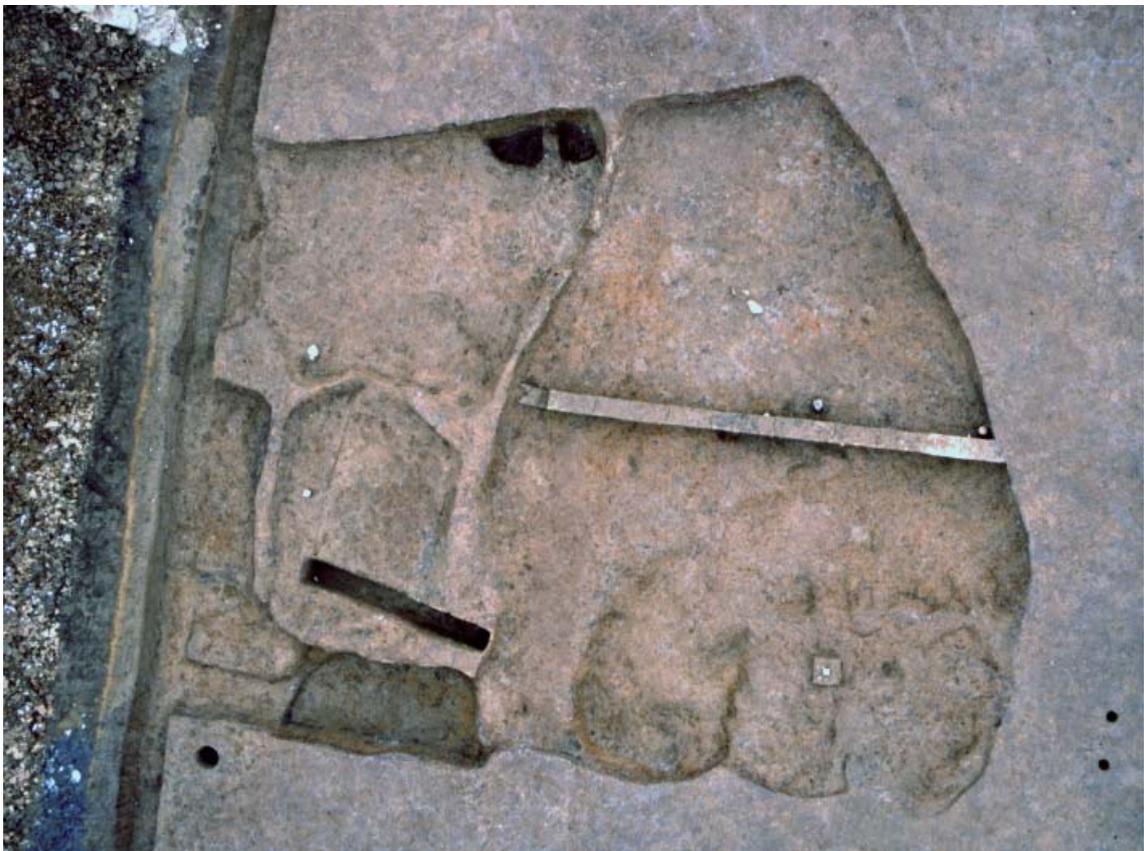
津山市教育委員会



林田池ノ内遺跡遠景（南から）



A地区全景（南側、北から）



G地区S X 5

序

津山市は岡山県の北部に位置し人口は約 11 万人、県北では最大の都市であります。市内には一級河川の吉井川が流れ、これらに流れ込む支流の多くが古代から人々の生活を育み、市内随所には数多くの遺跡が存在します。それらの多くは丘陵に存在する沼弥生住居跡群に代表される集落遺跡や、県北部では最大規模の前方後円墳である美和山 1 号墳などの古墳であります。また古代の美作国分寺跡、中世の院庄館跡、近世の津山城跡など津山の歴史を通史的に概観する遺跡が現存し、それらが保存され、一部では整備されており、生きた教材として広く活用されております。

さて今回の調査は市内中心部の交通緩和のため計画された環状線の一つである、都市計画道路総社川崎線建設に伴う発掘調査であります。今回の計画路線内には周知の遺跡は存在しておりませんでした。確認調査によって新たに遺跡が確認され、今回の発掘調査となりました。発掘調査された林田池ノ内遺跡は、弥生時代と中世から近世を中心にした遺跡と判明しました。特に中世では建物跡などの集落遺構や勝間田焼、備前焼、石鍋などの遺物が発見され、近世では津山城跡などの瓦を焼くためにその粘土を採掘した跡が検出されました。

本書はこれら発掘調査の記録をまとめたものです。小冊子ではありますが、今回の調査成果が美作地方史研究の一助となれば幸いです。

なお最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまでご協力いただきました、関係各位に対し心より厚く御礼申し上げます。

平成 17 年 3 月 31 日

津山市教育委員会

教育長 神崎博彦

例 言

- 1 本書は都市計画道路総社川崎線建設に伴う林田池ノ内遺跡の発掘調査報告書である。
- 1 調査は平成 15 年 5 月 7 日から 5 月 16 日、平成 16 年 7 月 26 日から 7 月 27 日に確認調査をおこない、本調査は平成 15 年 12 月 2 日から平成 16 年 3 月 10 日、同年 4 月 6 日から 6 月 1 日まで 2 年次にわたって実施した。確認調査は、津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター小郷利幸、同豊島雪絵が担当し、本調査は小郷が主として担当し、文化財センター職員の協力を得た。
- 1 調査及び報告書作成に要する経費は、確認調査は国（平成 15 年度国庫補助事業）、及び津山市、その他の本調査経費は国（平成 15・16 年度緊急地方道路整備事業臨時交付金）及び津山市が負担した。
- 1 調査に使用した座標は第 V 直角平面座標系で、X・Y 座標数値はいずれも－で、X 軸は上 3 桁、Y 軸は上 2 桁を一部で省略した。例えば X 軸 450 は－ 103450、Y 軸 470 は－ 28470 を示し、単位は m である。尚方位は座標北を示し、高さは海拔高である。
- 1 本書挿図には遺構の略称を用いている。略称は次のとおりである。
SB：建物跡 SA：柵 SK：土壇 SD：溝 SX：不明遺構 P：柱穴 T：トレンチ
- 1 本書の執筆は小郷が担当し、編集は同文化財センター平岡正宏がおこなった。
- 1 自然科学的分析として、岡山理科大学自然科学研究所白石純氏に「林田池ノ内遺跡出土の瓦および粘土採掘抗採取粘土の胎土分析」の玉稿をいただいた。記して謝意を表します。
- 1 出土遺物及び図面等は津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センターで保管している。
- 1 本書は将来的にはオンラインでの公開も視野に入れ、本書の総てのデータを P D F フォーマット及び Adobe Indesign C S 形式で保管している。

目 次

I 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
1. 遺跡の位置	1
2. 周辺の遺跡	2
II 調査の経過	5
1. 調査に至る経過	5
2. 調査の経過	7
3. 調査体制	12
III 調査の記録	19
1. A地区	19
(1) 弥生時代	19
(2) 中世～近世	19
2. B地区	36
(1) 近世	36
3. C地区	37
(1) 中世～近世	37
4. D地区	40
(1) 中世～近世	40
5. E地区	43
(1) 中世	43
6. F地区	47
(1) 近世	47
(2) その他	51
7. G地区	54
(1) 中世～近世	54
IV 自然科学的分析	65
1. 林田池ノ内遺跡出土の瓦および粘土採掘坑採取粘土の胎土分析	65
V まとめ	71
1. 弥生時代の遺構・遺物について	71
2. 中世の遺構・遺物について	71
3. 近世の遺構・遺物について	74

挿 図 ・ 表 目 次

第1図 林田池の内遺跡位置図 (S=1:10,000) … 1	第30図 D地区出土遺物 (S=1:4) …… 42
第2図 周辺の主要遺跡 (S=1:25,000) …… 2	第31図 E地区平面図、土層図 (S=1:100、1:80) …… 43
第3図 津山市都市計画路線図 (S=1:20,000) … 5	第32図 SX4、SD21平・断面図 (S=1:80) …… 44
第4図 トレンチ配置図及び遺跡推定範囲 (S=1:2,500) …… 6	第33図 E地区出土遺物 (S=1:4) …… 44
第5図 トレンチ平・断面図 (S=1:80) …… 8	第34図 F地区平面図 (S=1:100) …… 45~46
第6図 トレンチ出土遺物 (1~14…S=1:4、15・16…S=1:2) … 9	第35図 F地区土層図 (S=1:80) …… 48
第7図 年度別調査区位置図 (S=1:1,000) …… 10	第36図 SA5・6平・断面図 (S=1:80) …… 49
第8図 調査区位置図 (S=1:1,000) …… 11	第37図 SK35~43平・断面図 (S=1:40) …… 50
第9図 A~E地区全体図 (S=1:200) …… 13~14	第38図 SK44~45平・断面図 (S=1:40) …… 51
第10図 F・G地区全体図 (S=1:200) …… 15~16	第39図 SK35出土遺物(1) (S=1:4) …… 52
第11図 A地区平面図 (S=1:100) …… 17~18	第40図 SK35出土遺物(2) (6~9…S=1:4、10・11…S=1:6) …… 53
第12図 A地区土層図 (S=1:80) …… 20	第41図 F地区出土遺物 (1~2…S=1:4、3…S=1:3) …… 54
第13図 SK1~2、SD1平・断面図 (SK1他…S=1:40、1~3…S=1:4) … 21	第42図 G地区平面図 (S=1:100) …… 55~56
第14図 SB1~4平・断面図 (S=1:80) …… 22	第43図 G地区土層図 (S=1:80) …… 57
第15図 SB5~7平・断面図 (S=1:80) …… 23	第44図 SA7~9平・断面図 (S=1:80) …… 58
第16図 SA1~4平・断面図 (S=1:80) …… 24	第45図 SX5平・断面図 (S=1:80、左下図はS=1:160) …… 59
第17図 SK3~6平・断面図 (S=1:40) …… 25	第46図 G地区出土遺物 (1~19…S=1:4、20~21…S=1:2) … 60
第18図 SK7~12平・断面図 (S=1:40) …… 27	第47図 林田池ノ内遺跡中世主要遺構 (S=1:200) …… 73
第19図 SK13~15、22平・断面図 (S=1:40) … 28	第48図 周辺の小字名と推定道路 …… 75
第20図 SK16~21、23~24平・断面図 (S=1:40) …… 30	
第21図 SK25~29平・断面図 (S=1:40) …… 31	
第22図 SX1~2平・断面図 (SX1…S=1:40、SX2…S=1:80) …… 34	第1表 トレンチ一覧表 …… 8
第23図 A地区出土遺物 (1~35…S=1:4、36~44…S=1:2) 35	第2表 出土遺物一覧表 …… 61~64
第24図 B地区平面図、土層図 (S=1:100、1:80) … 36	
第25図 SX3平・断面図 (S=1:80) …… 37	
第26図 C地区平面図、土層図 (S=1:100、1:80) … 38	
第27図 SK30平・断面図、出土遺物 (S=1:20、1:4) … 39	
第28図 D地区平面図、土層図 (S=1:100、1:80) … 40	
第29図 SK31~34平・断面図 (S=1:40) …… 41	

写真図版目次

巻頭図版 1-1	林田池ノ内遺跡遠景	図版 12-1	C地区調査前
巻頭図版 2-1	A地区全景	2	C地区全景
2	G地区SX 5	3	土壙30
図版 1-1	林田池ノ内遺跡遠景	図版 13-1	土壙30
2	トレンチ1	2	D地区調査前
3	トレンチ1土層	3	D地区全景
図版 2-1	トレンチ2	図版 14-1	D地区全景
2	トレンチ3	2	土壙32
3	トレンチ4	3	土壙33
図版 3-1	トレンチ5	図版 15-1	E地区調査前
2	トレンチ6	2	E地区全景
3	トレンチ6土層	3	溝18~20
図版 4-1	トレンチ7	図版 16-1	F地区調査前
2	A地区全景(南側)	2	F地区全景(南側)
3	A地区全景(北側)	3	F地区全景(北側)
図版 5-1	A地区調査前	図版 17-1	F地区土層(北側)
2	表土除去風景	2	土壙35土層
3	表土除去後	3	土壙35
図版 6-1	A地区全景	図版 18-1	土壙35(瓦除去後)
2	土壙1	2	土壙37
3	土壙1土層	3	土壙43
図版 7-1	建物跡・柵	図版 19-1	柵6
2	建物跡・柵	2	G地区表土除去
3	建物跡6柱穴	3	G地区全景(北側)
図版 8-1	土壙群	図版 20-1	G地区全景(南側)
2	土壙16	2	G地区土層
3	土壙21	3	不明遺構5
図版 9-1	土壙28・29	図版 21-1	不明遺構5
2	溝2	2	不明遺構5土層
3	溝3~10	3	柵7
図版 10-1	溝12	図版 22-1	作業風景(T6)
2	土壙23~26、不明遺構	2	作業風景(A地区)
3	不明遺構2	3	作業風景(G地区)
図版 11-1	B地区調査前	図版 23	出土遺物(1)
2	B地区全景	図版 24	出土遺物(2)
3	不明遺構3		

I 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 遺跡の位置 (第1図)

林田池ノ内 (はいだいけのうち) 遺跡は、岡山県津山市林田816-9番地ほかに所在する。津山市は岡山県の北部、標高1,000～1,200 mの山並みが連なる中国山地の山懐に位置し、人口約9万人、面積185.7 k m²の城下町であったが、平成の大合併で近隣の4町村である久米郡久米町、勝田郡勝北町、苫田郡加茂町、同阿波村と平成17年2月28日に合併し、人口約11万人、面積506.4 k m²となり、人口では県北部最大、県内3番目の都市である。市内の交通網として昭和59年に開通した中国自動車道が東西に走り東西2箇所インターチェンジ (院庄・津山) が置かれた。その後、中国横断自動車道などが開通し、大阪、九州、四国、山陰方面などへの移動が高速化された。一般国道は53号、179号、181号、429号線が、JR線も三線が通り、交通網が交差する重要な地域である。また、市街地の南部には一級河川の吉井川が加茂川、皿川などの支流と合流しながら南流し、瀬戸内海へ流路をとる。この事から盆地ではあるものの水陸とも交通の便はよい立地条件と言える。

本遺跡はこの吉井川を見下ろす緩斜面に位置する。この吉井川の背後には丹後山などの丘陵が連なり、



第1図 林田池ノ内遺跡位置図 (S = 1 : 10,000)

本遺跡の辺りが唯一峠となっている。この峠部分は通称「山根越え」と呼ばれ古来より使用された道である。この峠部分に南北に伸びる舌状の丘陵があり、この突端から南斜面にかけてが遺跡の推定範囲である。標高は88 mから92 mを測り、遺跡の北側は丘陵部、南側は低地部である。遺跡の現状は宅地及び耕作地が大半である。現在の吉井川は0.5 km先を流れているが、これが整備されたのはおそらく江戸時代の城下町形成以降である事から、それ以前では吉井川の流はもう少し流動的で、本遺跡の近くを流れていた時期も存在していたものと考えられ、遺跡の南側はその氾濫源でもある。

2. 周辺の遺跡 (第2図)

本遺跡は吉井川を南面に見下ろす丘陵斜面に立地する。周辺の遺跡についてこの吉井川の支流域を中心に概観してみたい。



- | | | | | |
|-------------|-------------|-----------|-------------|-------------|
| 1. 林田池ノ内遺跡 | 2. 京免遺跡 | 3. 竹ノ下遺跡 | 4. 押入西遺跡 | 5. 川崎六ツ塚古墳 |
| 6. 橋本塚古墳群 | 7. 押入兼田古墳群 | 8. 能満寺古墳群 | 9. 狐塚遺跡 | 10. 日上小深田遺跡 |
| 11. 日上天王山古墳 | 12. 日上畝山古墳群 | 13. 飯塚古墳 | 14. 美作国分尼寺跡 | 15. 美作国分寺跡 |
| 16. 津山城跡 | | | | |

第2図 周辺の主要遺跡 (S = 1 : 25,000)

(弥生時代)

吉井川の支流宮川沿いの低地には中期～後期の京免遺跡（2、註1）、竹ノ下遺跡（3、註2）が存在する。前者は環濠をもつ集落である。加茂川の北岸には中期の押入西遺跡（4、註3）が丘陵上に存在する。

(古墳時代)

加茂川を挟んだ北岸では中期の大形円墳である橋本塚1号墳（6、註4）があり、2段築成で葺石・埴輪を伴う。埋葬施設は木棺で鉄器が出土した。この古墳の東には小規模の円・方墳からなる押入兼田古墳群（7、註5）があり、埋葬施設は箱式石棺、木棺などで副葬品は玉類、鉄器などが少数見られる。後期の円墳群である川崎六ツ塚古墳群（5、註6）は、埋葬施設は木棺などで須恵器や鉄器、玉類など副葬品が豊富である。横穴式石室墳では陶棺を棺桶に使用する能満寺古墳群（8、註7）がある。本地域では中期～後期の古墳群がある程度まとまって見られるが、前期に遡る古墳はやや奥まった地域に単独で存在する。一方南岸では、前期の前方後円墳である日上天王山古墳（11、註8）があり、埋葬施設は竪穴式石槨や箱式石棺で鉄器などが出土した。また同一丘陵には中期から後期の群集墳で、円・方墳や前方後円墳からなるある日上畝山古墳群（12、註9）があり、小規模古墳でありながら埴輪や須恵器、鉄器などを伴う古墳が多い。この古墳群の東には中期の大形円墳である飯塚古墳（13、註10）が単独で存在する。本地域は前期の古い時期に前方後円墳が築かれ、中・後期群集墳が見られる地域であるが、後期後半の横穴式石室墳はやや離れた地域に見られ、群をなさず単独で存在する。

(古代)

美作国は和銅6年（713年）に備前国から分国された。美作国の国分寺跡（14、註11）と国分尼寺跡（15、註12）が加茂川南岸の勝田郡内につくられる。前者は調査などで南門・中門・金堂・講堂が一直線に並ぶ伽藍配置などが判明しているが、後者は明瞭でない。ちなみに国府は北岸の苫田郡内につくられている。国分寺から国府に至る古代の官道について明瞭ではないが、この時期の道の跡とされるものが国分尼寺跡西方の日上小深田遺跡（10、註13）で発見されている。これについては、やや迂回しすぎるルートのため主ルートではなく、官道そのものについては従来から指摘のある国分寺の西側を北上し、加茂川を渡り、今回調査した林田池ノ内遺跡の北東側の峠（山根越え）を超えるルート（註14）が最適であろう。

(中世から近世)

中世の主要な遺跡はあまり知られていないが、近世になると、津山城（16）が鶴山に築かれ城下町が整備される。本遺跡もこの城下町の北東部に位置し、周辺では津山城などの瓦が焼かれている。その際の粘土を周辺で採掘しており、文献からこの粘土の採掘場所は林田村のほかに加茂川南岸の日上村がある。

(註1) 中山俊紀「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第11集』津山市教育委員会1982

(註2) 註1

(註3) 井上弘他「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』岡山県教育委員会1973

(註4) 小郷利幸「橋本塚古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第73集』津山市教育委員会2003

(註5) 安川豊史他「押入兼田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第69集』津山市教育委員会2000

(註6) 河本清「六ツ塚古墳群」『岡山県史第18巻考古資料』岡山県史編纂委員会1986

(註7) 今井堯「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史第1巻原始・古代』津山市史編さん委員会1972

(註8) 近藤義郎他「日上天王山古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集』津山市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会1997

- (註9) 安川豊史「日上畝山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第63集』津山市教育委員会1998
- (註10) 『津山の文化財』津山市教育委員会1998
- (註11) 湊哲夫他『美作国分寺跡発掘調査報告』津山市教育委員会1980
- (註12) 湊哲夫「美作国分尼寺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集』津山市教育委員会1983
平岡正宏他「美作国分寺跡一塔跡発掘調査報告書」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第72集』津山市教育委員会2002
- (註13) 川村雪絵・安川豊史「日上小深田遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第66集』津山市教育委員会2000
- (註14) 中村太一「山陽道美作支路の復元的研究」『歴史地理学 第150号』歴史地理学会1990

II. 調査の経過

1. 調査に至る経過

林田池ノ内遺跡は、都市計画道路総社川崎線（以下総社川崎線に省略）建設に伴い調査されたものである。本市では昭和59年の中国自動車道開通以降、広域交通網の高速化が発達し、これに対応する地域の道路の整備が急務となった。その中で計画されたのが総社川崎線である（第3図）。総社川崎線は、昭和47年に総長2,940mとして都市計画決定された。本路線は津山市街地の南北主要交通軸である都市計画道路大谷一宮線、皿一宮線、そして東西主要交通軸である新錦押入線、安岡町押入線を結ぶ中環状線の一部の役割を担っており、市街地中心部の交通混雑の緩和が目的である。現在までに山北～沼間874.8mが区画整理事業により整備され、供用されている。また残りの内林田～川崎間については、平成11年に都市計画事業許可を受け整備を進める事となった。同年には計画路線内の遺跡の有無について



第3図 津山市都市計画路線図（S = 1 : 20,000、トーン部分が総社川崎線）



第4図 トレンチ配置図及び遺跡推定範囲（トーン部分、S = 1 : 2500）

て工事担当課である市土木課から協議があり、計画路線内には周地の遺跡は存在しないものの、地形的に見て存在する可能性があるため、事前の確認調査の必要な箇所がある旨を回答した。その後平成15年4月18日付けで土木課より確認調査の依頼があり、平成15年度に6箇所、平成16年度に1箇所トレンチを設定し、確認調査を実施した。その結果、平成15年度の調査で遺構・遺物が検出され新たな遺跡が確認された。この遺跡の名称は小字（池ノ内）から林田池ノ内遺跡とし、遺跡の推定範囲を確定した（第4図トーン部分）。あわせて平成15年5月27日付けで遺跡の発見通知を津山市長名で岡山県教育委員会に提出した。路線内の遺跡該当範囲の発掘調査については、土木課と協議をおこない、平成15～16年度にわたって実施した（第7図）。なお平成16年度の確認調査では遺構・遺物の検出はなく、この部分には遺跡は存在しないものと判断した。

2. 調査の経過

（確認調査の結果）

平成15～16年度にわたって確認調査を実施した（第4～6図）。路線予定地内は、宅地や耕作地が大部分であるが、宅地でも建物が残存していたり、耕作地でも田植えが予定されている部分があるなど、調査箇所は休耕田や畑部分に限られた。平成15年度は丘陵から低地にいたる部分にトレンチ（T）1から6を設定し、調査は平成15年5月7日から16日まで実施した。各トレンチは概ね幅2m、長さ4m、調査面積は約8㎡である。なお、調査後各トレンチは埋め戻しをおこなった。

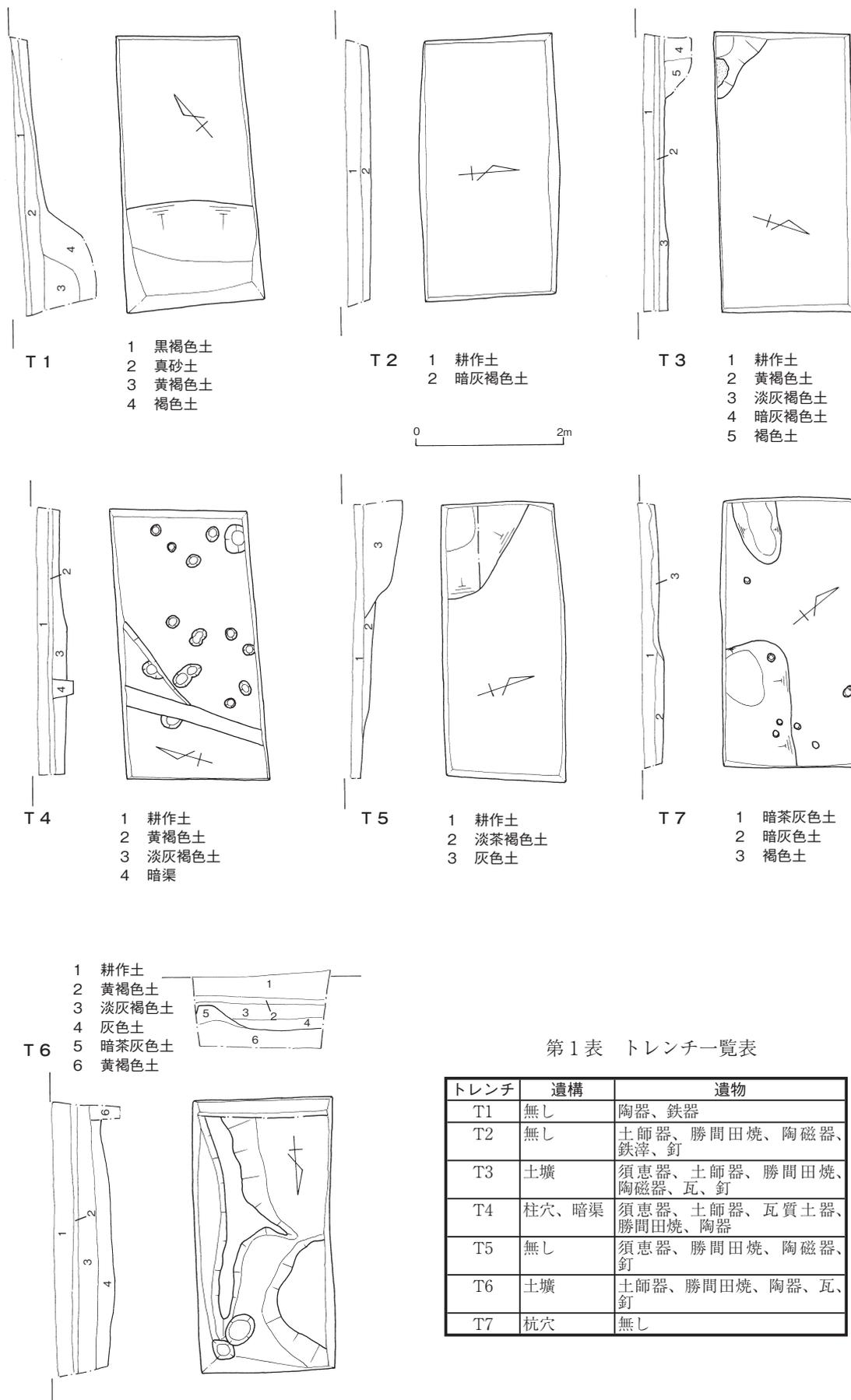
トレンチ1 丘陵突端の斜面部分に設定したトレンチで、現地形は平らで畑となっているが、もともとは急な地形であり、その部分を数度造成して現在の地形になっている。深い掘り込み状のものも旧地形時にあったもので、遺構と呼べるものではない。地山の状況がかなり急であることから、この部分に遺構の存在する可能性は低いと思われる。また、遺物には鉄製品のようなものもあるが、大半は釘や陶器など新しい時期のものである。

トレンチ2 宅地部分の低地に設定したトレンチである。耕作土など（1・2層）の下は地山面で遺構は存在しない。かなり削平されている可能性もある。遺物として土師器や勝間田焼、陶磁器、鉄滓などがある。

トレンチ3 休耕田に設定したトレンチで、耕作土（1～2層）、包含層（3層）の下は地山面である。南西隅で土壌の一部が検出された。内部には石が見られる。出土遺物は細片のみである。その他の遺構らしきものはないが、包含層から須恵器、土師器、勝間田焼、瓦、釘などが出土した。第6図1・2・15・16が出土した遺物である。1は須恵器の高台付き杯身の底部、2は須恵器甕の胴部で外面にタタキ、内面に当て具痕が見られる。15・16は鉄釘で、いずれも先端部分が欠損する。

トレンチ4 トレンチ3の南に設定したトレンチで、耕作土（1～2層）、包含層（3層）の下は地山面で、複数の柱穴を検出した。調査面積が狭いため建物の構造は明瞭でないが、この周辺は遺構の密度が高いものと推測される。その他現代の暗渠（4層）が南北方向に通っている。遺物は柱穴からも少量出土し、その他包含層から須恵器、勝間田焼や土師器、瓦質土器などが出土した。3～11が出土遺物である。3～7は土師器で3・4は杯、5・6は小皿で、いずれも底部の切り離しは回転ヘラ切りである。7は鉢の口縁部、8・9は瓦質の土器で8は羽釜、9は鍋である。9の口縁部は受け口状で内面にはヨコハケが見られる。10・11は備前焼の播鉢で10は口縁部、11は底部でいずれも摺目が見られる。

トレンチ5 宅地の南の畑部分に設定したトレンチである。耕作土（1層）、包含層（2層）の下は地



第1表 トレンチ一覧表

トレンチ	遺構	遺物
T1	無し	陶器、鉄器
T2	無し	土師器、勝間田焼、陶磁器、鉄滓、釘
T3	土壇	須恵器、土師器、勝間田焼、陶磁器、瓦、釘
T4	柱穴、暗渠	須恵器、土師器、瓦質土器、勝間田焼、陶器
T5	無し	須恵器、勝間田焼、陶磁器、釘
T6	土壇	土師器、勝間田焼、陶器、瓦、釘
T7	杭穴	無し

第5図 トレンチ平・断面図 (S = 1 : 80)

山で、さらに西側はこの2層を切る形で大きく落ち込んでおり、その部分が造成され、現在の平らな地形になっている事が判明した。遺構は存在しないが、須恵器、勝間田焼、陶器、釘が出土している。また、このトレンチの南側は宅地となり、かなり削平を受けているようである。12が出土した遺物で勝間田焼碗の口縁部である。

トレンチ6 一番南に設定したトレンチである。耕作土など(1~2層)の下で5層から掘り込む形の複数の掘り込みや柱穴を検出した。当初はこれら掘り込みの間が掘り残こされ、断面が畦状になっている事から、水田の畦と判断したが、全面調査した結果、土を採掘した穴が複数存在することが判明した。遺物は勝間田焼、陶器、瓦、釘などがある。13・14が出土遺物で13は勝間田焼碗の口縁部、14は施釉陶器の底部である。

トレンチ1~6の結果から3・4・6で遺構・遺物が検出されたため、新たに遺跡が確認された。遺跡の推定範囲は第4図のトーン部分で丘陵の先端から斜面にかけての範囲である。トレンチ3~5の辺りが地山のしっかりした高所で主に集落遺跡、それより南の6の辺りが低地で、粘土の採掘関連の遺跡である。遺跡の時期は中世から近世にかけてのものである。

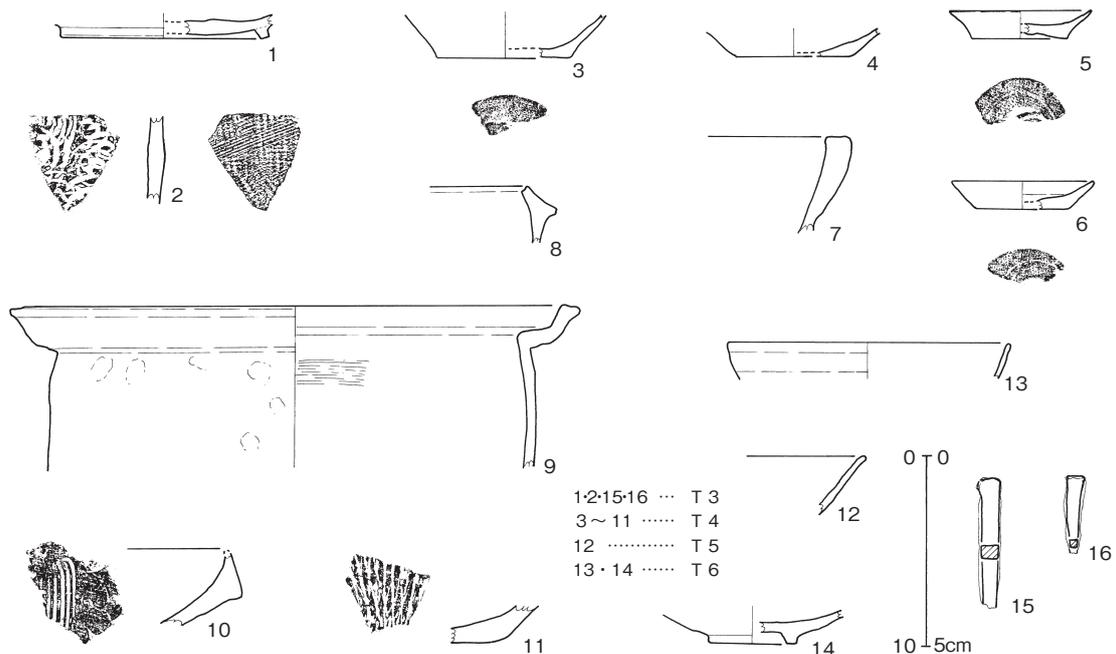
平成16年度は1箇所(トレンチ7)を設定した。調査は平成16年7月26日~27日に実施した。

トレンチ7 「山根越え」と呼ばれる峠部分に設定した。宅地部分で造成土など(1~2層)の下は、地山である。地山面も部分的に削平を受けている箇所があり、3層は地山土の2次堆積である。遺構として杭の穴が複数見られるが、いずれもガラス片などを含み新しいものである。

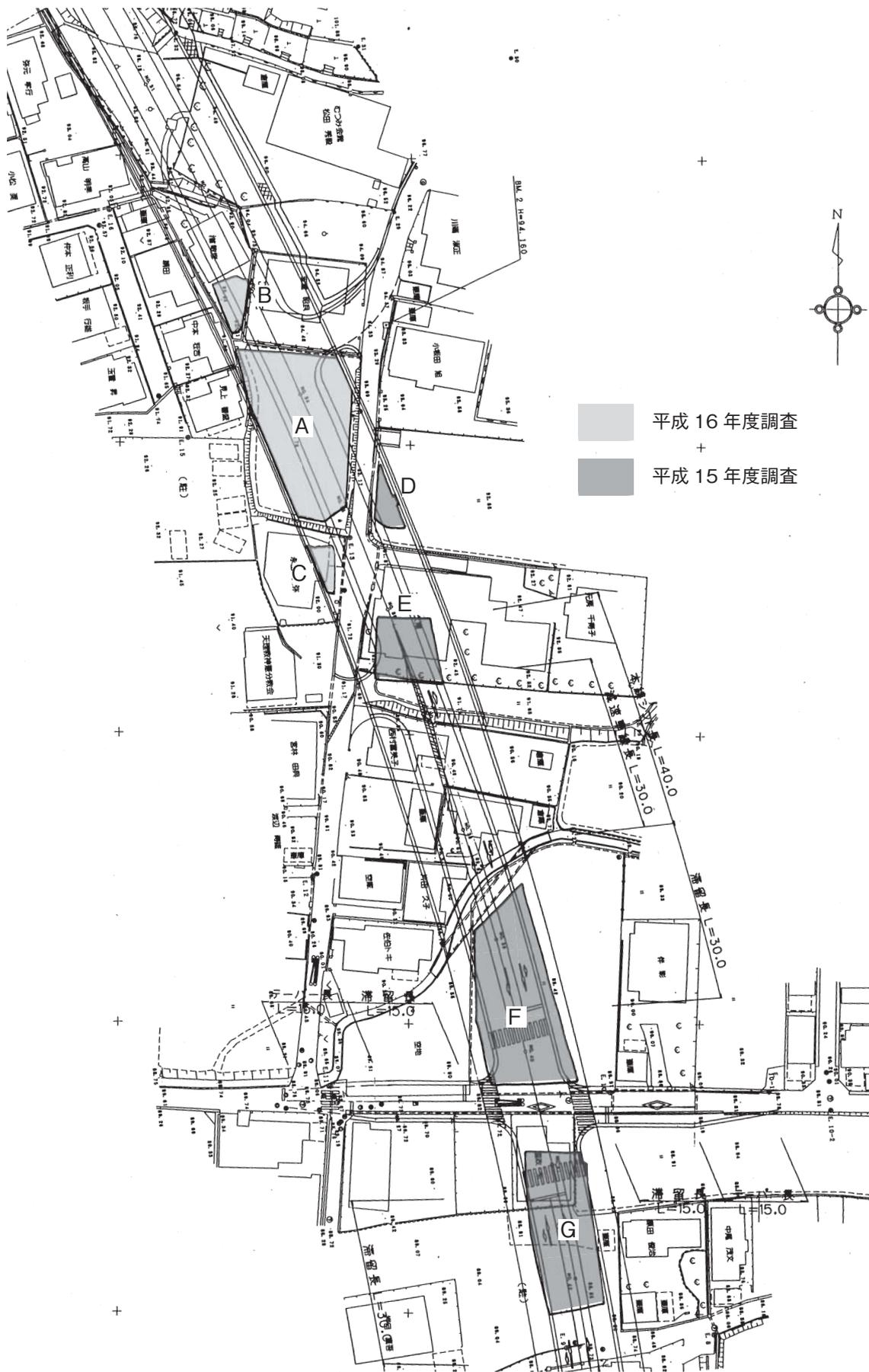
このトレンチでは遺構・遺物は検出されず、地山面もかなり削られている。また、地元の話で周辺部がかなり削られている事も判明した。そのため、この峠部分は地形的に見て削平されている可能性が高く、遺物も見られない事から遺跡は存在しないものと判断される。

(本調査の経過)

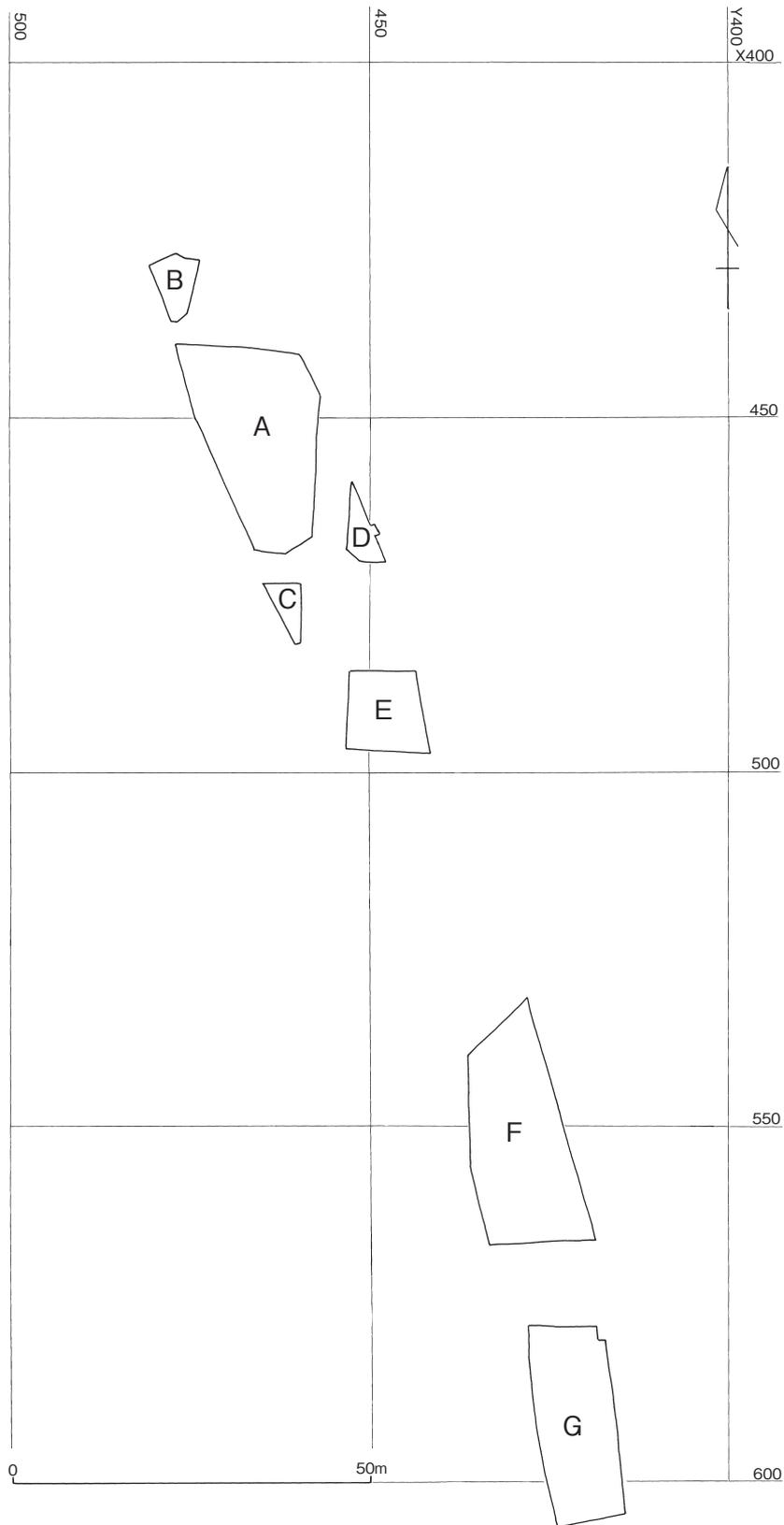
本調査は遺跡推定範囲の道路部分であるが、すでに宅地として大きく改変されている部分を除き、既



第6図 トレンチ出土遺物(1~14…S=1:4、15・16…S=1:2)



第 7 図 年度別調査区位置図 (S = 1 : 1,000)



第8図 調査区位置図 (S = 1 : 1,000)

存の道路、水路などがあるため、大きく7地区（A～G地区）にわかれる（第7・8図）。工事の工程にあわせて、平成15年度にDからG地区、平成16年度にAからC地区を発掘調査した。

平成15年度に最初に発掘調査したのはF・G地区で両地点とも廃土の置場がないため各地区を半分ずつ掘り反転させる事とした。12月2日からF地区の南側、G地区の北側の表土剥ぎを重機（バックホー）を使用しておこなった。F地区で瓦を廃棄した土壌など、G地区で不明遺構などの検出後、ラジコンのヘリコプターで空撮をおこない、測量、写真撮影後埋め戻し両地点の残部分を調査した。1月20日からE地区、2月16日からD地区の調査を開始し、2月25日に再度ラジコンのヘリコプターで空撮をおこなった。その後各調査区を埋め戻し3月10日には平成15年度の調査を終了した。

平成16年度はA地点から調査を開始した。4月6日から重機で表土を除去し、建物跡などの複数の柱穴や土壌、溝などを確認し、ラジコンのヘリコプターで空撮を4月30日に実施した。その後埋め戻し、B・C地区を補足的に調した。B地区では不明遺構、C地区では土壌などを検出し、調査がすべて終了したのは、6月1日である。なお、4月26日～28日には、地元町内会を中心とした現地説明会を開催した。総調査面積は約1,329㎡である。

3. 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下のとおりである。

津山市教育委員会	教育長	松尾康義（～H16. 3. 31） 神崎博彦（H16. 4. 1～）
	教育次長	谷口 智（～H16. 3. 31） 兼田延昭（H16. 4. 1～）
	文化課長	近藤恭介（～H16. 3. 31） 佐野綱由（H16. 4. 1～）
文化財センター	所長	中山俊紀
	次長	安川豊史
	主任	小郷利幸（調査担当）
	主事	豊島雪絵（確認調査、事務担当）

整理作業は文化財センター野上恭子、岩本えり子、家元弘子、木下富子、高橋規子が担当した。

発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。

（敬省略）

（発掘作業員）稲垣精一、加藤文平、木下益穂、末沢敏男、鈴鹿順一、田外敦郎、谷口末男、野口定男、藤沢淳一郎、光岡平八郎、森二三夫、森 幸男、山本 満

なお、発掘調査から報告書作成にいたるまで、文化財センター職員の方々及び下記の方々にはお世話になりました。記して厚く御礼申し上げます。（敬省略）

白石 純、福田正継、宮澤靖彦、宗森英之

Ⅲ 調査の記録

調査区は大きく7地区（A～G地区）に分かれる。

1. A地区（第11～23図）

A地区は調査区の北端高所である。休耕田（水田）であり第12図が土層図である。基本層序は耕作土（1層）の下が床土（2層）、その下が包含層（3・4層）である。この内4層が中世の遺物を含む包含層で調査区の西端側のみに見られる。元々この西側に向かって地形が低く傾斜していたため、これを埋めて平らにしたのがこの4層で、いわゆる整地層である。この整地がされたのは中世遺物を含む事から中世以降と推測される。なお第11図の平面図西側で途切れている溝3・8～11は、少なくとも西側端まで続いていることがこの土層図からわかる。

主な遺構は弥生時代、中世～近世のものである。ちなみに調査区の中央を南北に通っている溝は現代の暗渠排水で北から南に向かって流れる。溝の底には竹などの植物を敷いている。土壌10と7の間の調査区東端壁側に見られる溝も同様に暗渠排水である。また、溝12の東側で切り合う土壌は内部で丸太2本が針金で結ばれており、電柱の支えに使用されたもので、その南の土壌も関連のものである。A地区の調査面積は約409㎡である。

（1）弥生時代

弥生時代の遺構として土壌2基、溝1条がある。これらは中世の柱穴などとは埋土が異なり、区別されるが、出土遺物が少ないため、これら遺構以外に確認できていないものもあるかもしれない。住居跡などの主要遺構は見られない。

土壌1（SK1、第13図）

調査区南端にあり一部調査区外である。隅丸長方形の土壌で、西側で柱穴と切りあう。現状で長さ1.7m、幅1.2m、深さ0.25mを測り、埋土はほぼ1層でその中から弥生土器片が少量出土した。その内3点を図示している。

1・2は長頸壺の口縁部で端部を上下に肥厚させる。外面には3条の沈線が凹線状にめぐり、また図示していないが、頸部と胴部との境にはハの字を横にした列点文がめぐっている。3は底部である。

土壌2（SK2、第13図）

溝8・9により切られている。長さ1.5m、幅0.9m、深さ0.3mを測る楕円形に近い土壌である。埋土はほぼ1層で、出土遺物は少量の土器片があるが図示できない。

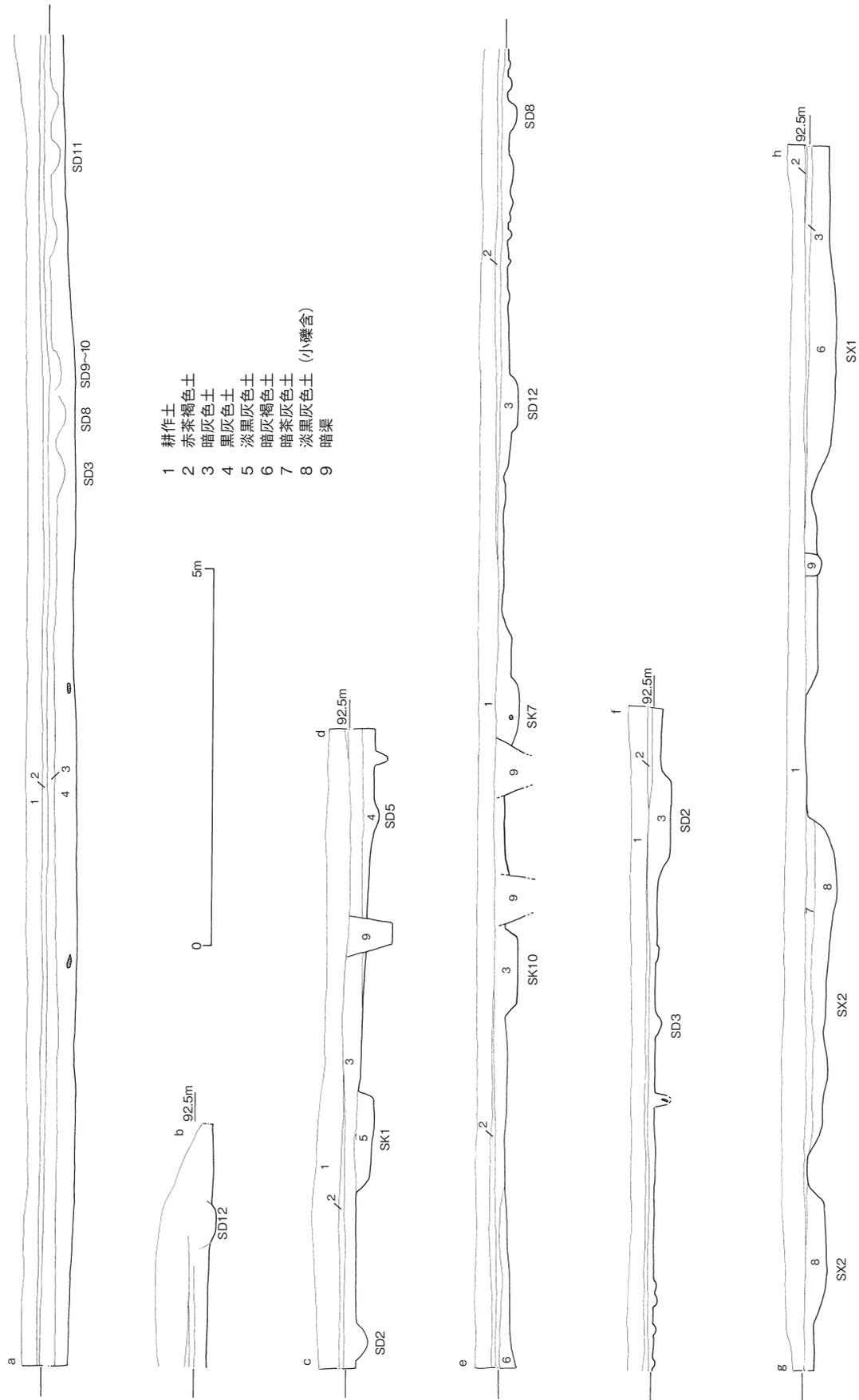
溝1（SD1、第13図）

土壌1の北にある溝であるが、削平を受けているためか、南側は途中切れである。複数の柱穴と切りあう。現状で幅0.8m、長さ2.4m、深さ0.1mを測る。出土遺物は土器片が少量あるが図示できない。

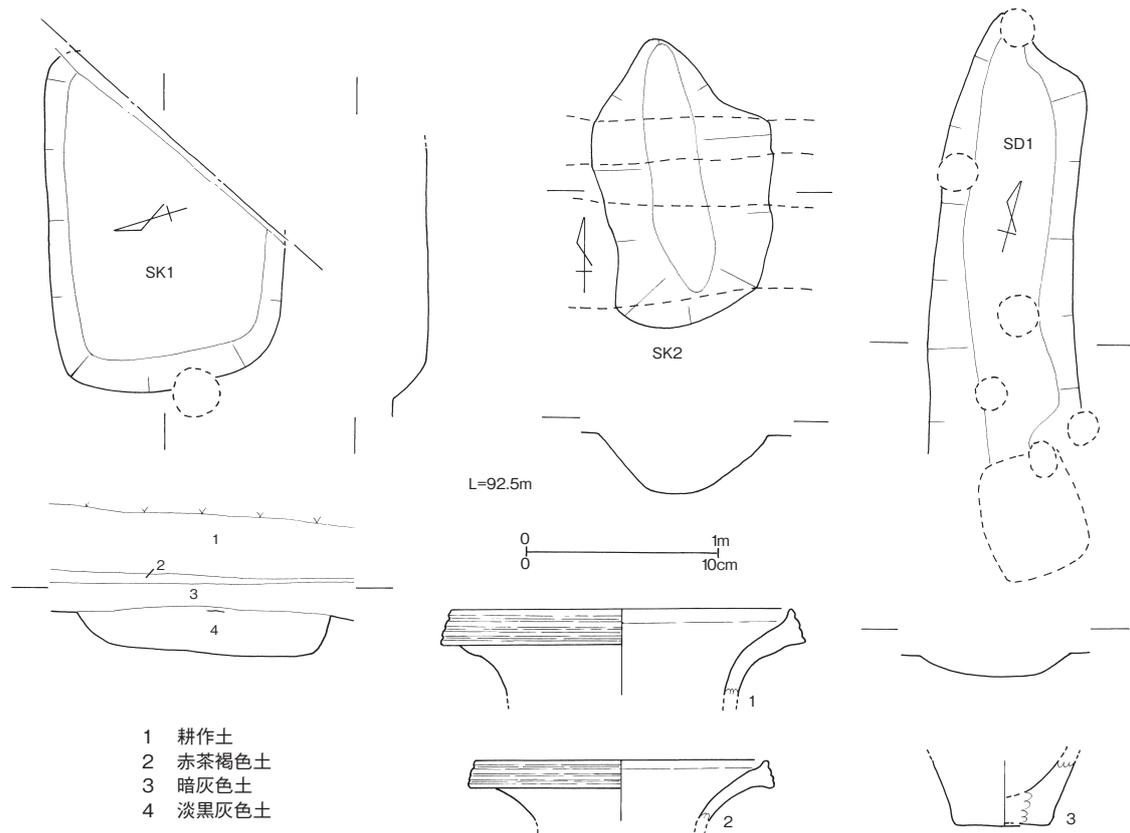
（2）中世～近世

中世の遺構として建物跡、柵、溝、土壌などがあり、この中には近世のものも含まれるが、調査区の大半が中世の遺構である。また溝12を境に南側のみ建物群や柵があり北側には建物はなく、不正形の土壌群である。これは地山の状態がこの北側はやや粘土質で脆弱なため、建物などには不向きであった事が大きく起因しているものと推測される。

建物跡1（SB1、第14・23図）



第 12 图 A地区土层图 (S = 1 : 80)



第13図 SK1～2、SD1平・断面図（S=1:40）及び出土遺物（S=1:4）

調査区の南端、建物跡2と重複する。一部調査区外であるため規模等は正確でないが梁間2間、桁行3間と推測される。棟の方向はN-81°-Eで東西棟の建物であろう。柱穴はすべて円形（径25～30cm）で柱穴（P）1・2から勝間田焼、土師器片が出土している。その内柱穴1の出土遺物を図示している。

1は土師器杯の小片で、全体に摩滅している。出土遺物から中世の所産である。

建物跡2（SB2、第14・23図）

建物跡1と重複し一部が調査区外であるが建物跡1と同様梁間2間、桁行3間と推測される。棟方向はN-80°-Eで東西棟であろう。柱穴はすべて円形（径16～30cm）で、柱穴1から勝間田焼、羽釜、土師器片、2から土師器片が出土している。その内柱穴1の出土遺物を図示している。

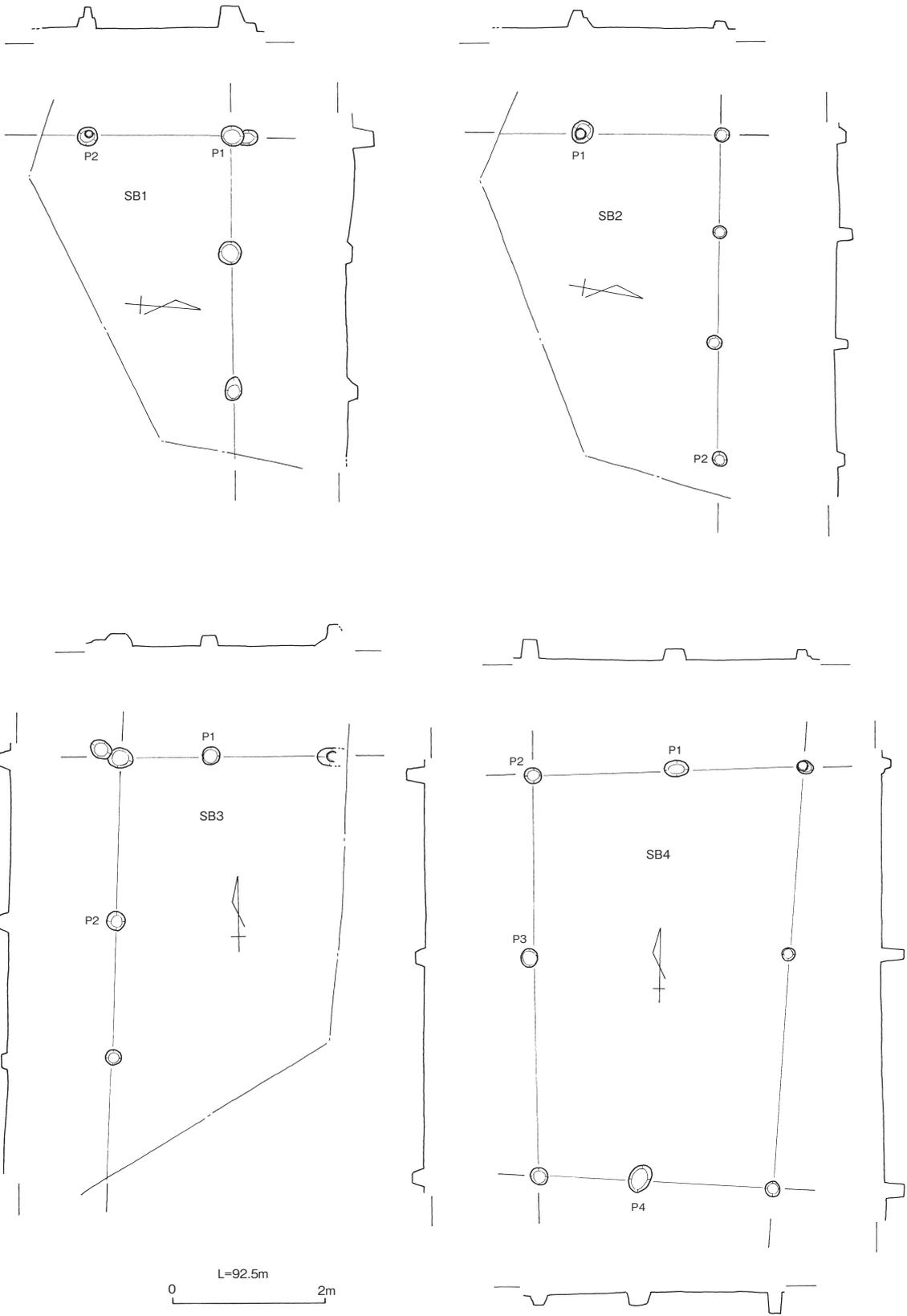
2は勝間田焼椀の底部で、底部の切り離しは回転糸切りである。出土遺物から中世の所産である。

建物跡3（SB3、第14図）

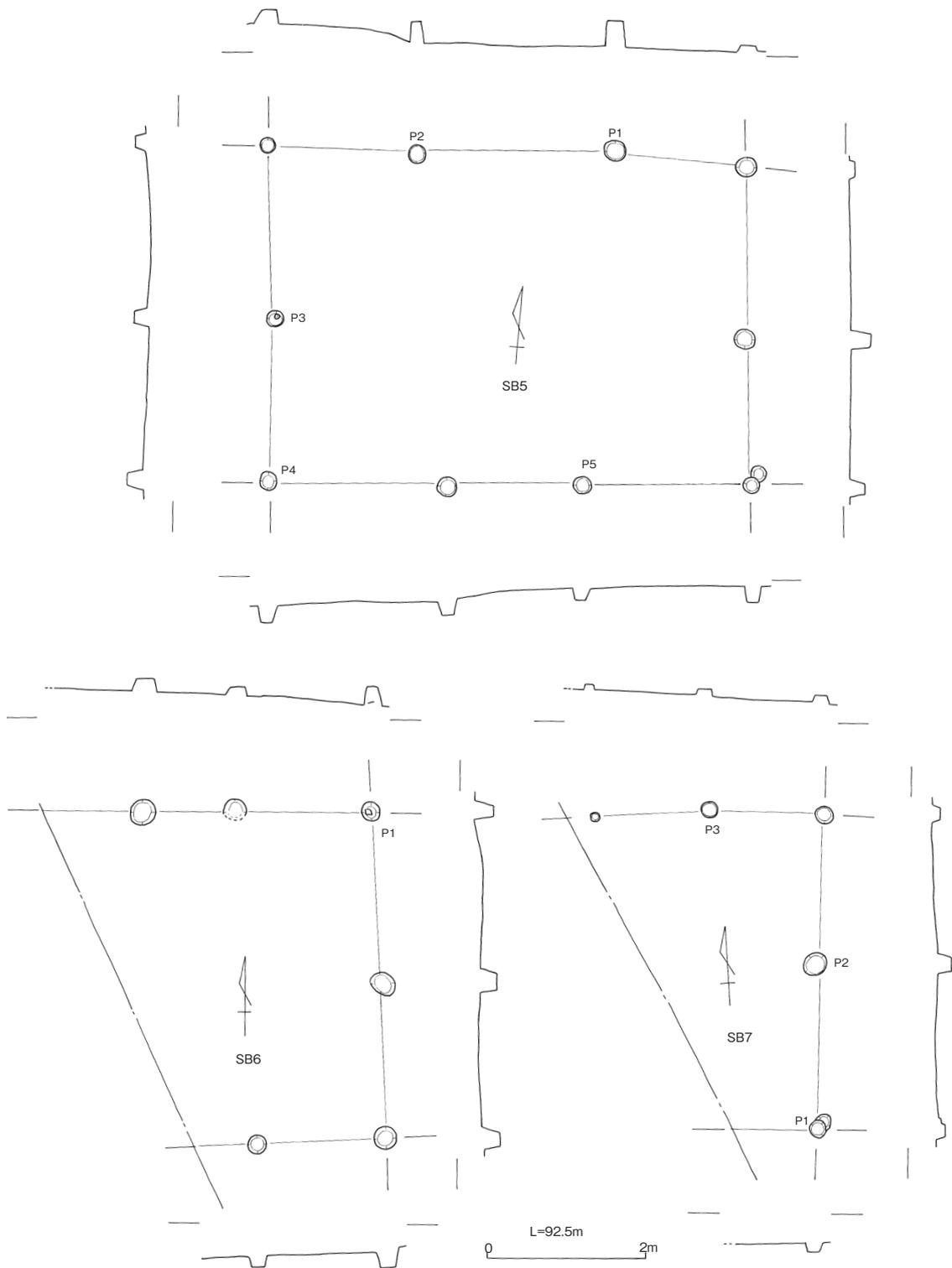
一部調査区外で梁間2間、桁行3間と推測される。棟方向はN-3°-Eでほぼ南北棟であろう。柱穴はすべて円形（径20～32cm）で、柱穴1・2から土師器片が出土する。出土遺物は図示できないが中世の所産である。

建物跡4（SB4、第14図）

建物群の北端に位置し、全形が判明する。梁間2間、桁行2間で、棟方向はN-2°-Eで南北棟である。梁間全長3.1～3.5m、桁行全長5.2～5.5mで、やや台形の平面形で床面積は約18㎡である。柱穴はすべて円形（径16～40cm）で、柱穴1から須恵器片、2から勝間田焼、3から土師器、勝間田焼、4から土師器片などが出土している。出土遺物は図示できないが中世の所産である。



第14图 SB1~4平·断面图(S-1:80)



第15図 SB5~7平・断面図 (S = 1 : 80)

建物跡4の西側にある梁間2間、桁行3間、棟方向はN - 86° - Eで東西棟である。梁間全長4～4.2 m、桁行全長6 mで、床面積は約25 m²である。柱穴はすべて円形（径20～26 cm）で、柱穴1から勝間田焼、土師器片など、2から勝間田焼、石、3から土師器、4から勝間田焼、土師器、5から土師器が出土している。出土遺物は図示できないが中世の所産である。

建物跡6（SB 6、第15・23図）

調査の西端にあり、一部調査区外である。梁間2間、桁行3間と推測される。棟方向はN - 88° - Eで東西棟であろう。柱穴はすべて円形（径23～34 cm）で、柱穴1から羽釜片が出土している。

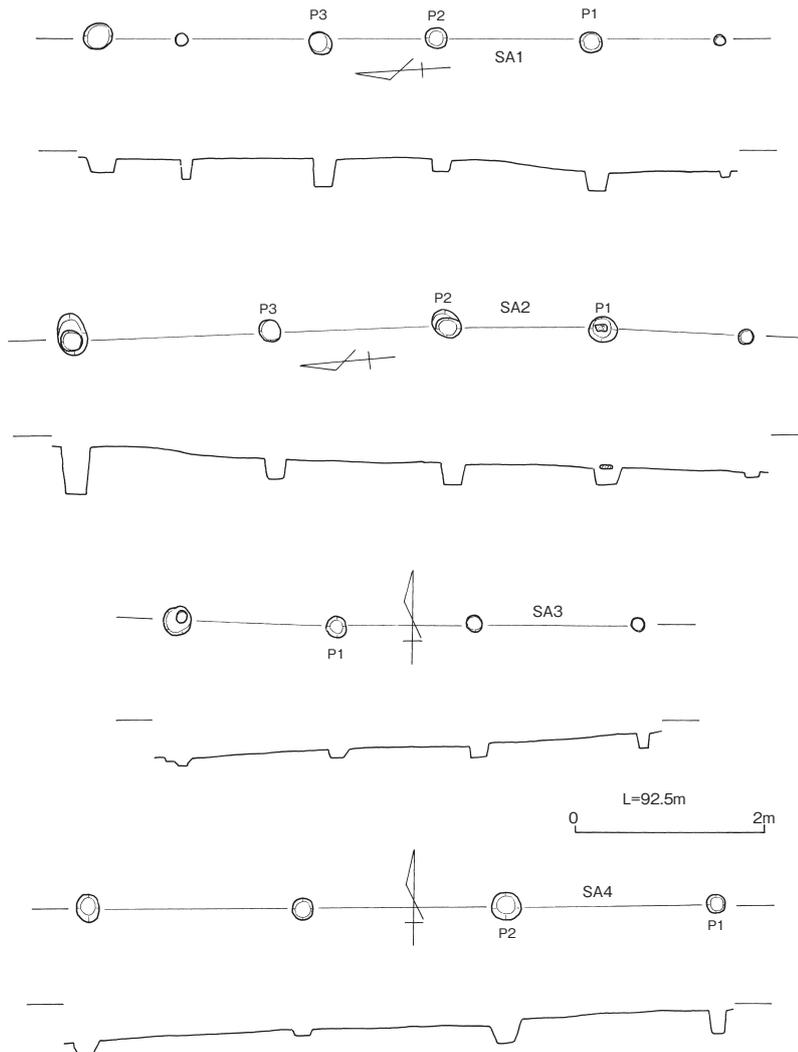
3は瓦質の羽釜である。外面には煤が付着している。出土遺物から中世の所産である。

建物跡7（SB 7、第15図）

建物跡6の南側重複して存在し、一部調査区外であるが梁間2間、桁行3間と推測される。棟方向はN - 93° - Eで東西棟であろう。柱穴（径14～26 cm）はすべて円形で、柱穴1～3から土師器片が出土している。出土遺物は図示できないが中世の所産である。

柵1（SA 1、第16図）

建物跡4などと重複して一直線に並ぶ6個の柱穴を検出した。全長6.5 m、柱間は0.9 m～1.6 mでばらつきがある。方向はN - 4° - Eで南北方向を向き、建物跡3の桁行方向とほぼ平行である。柱



第16図 SA 1～4平・断面図（S = 1 : 80）

穴は円形（径 13～26 cm）で、柱穴 1・2 から土師器片、3 から勝間田焼、瓦質鍋（第 6 図 9）が出土した。出土遺物から中世の所産である。

柵 2（SA 2、第 16 図）

柵 1 の南に存在し、一直線に並ぶ柱穴を 5 個検出し、全長 7 m、柱間は 1.5 m～2 m である。方向は N - 5.5° - E で南北方向を向き、建物跡 7 の梁間方向に近い。柱穴は円形（径 24～44 cm）で柱穴 1 から石、2 から勝間田焼、土師器、3 から土師器が出土した。出土遺物は図示できないが中世の所産である。

柵 3（SA 3、第 16 図）

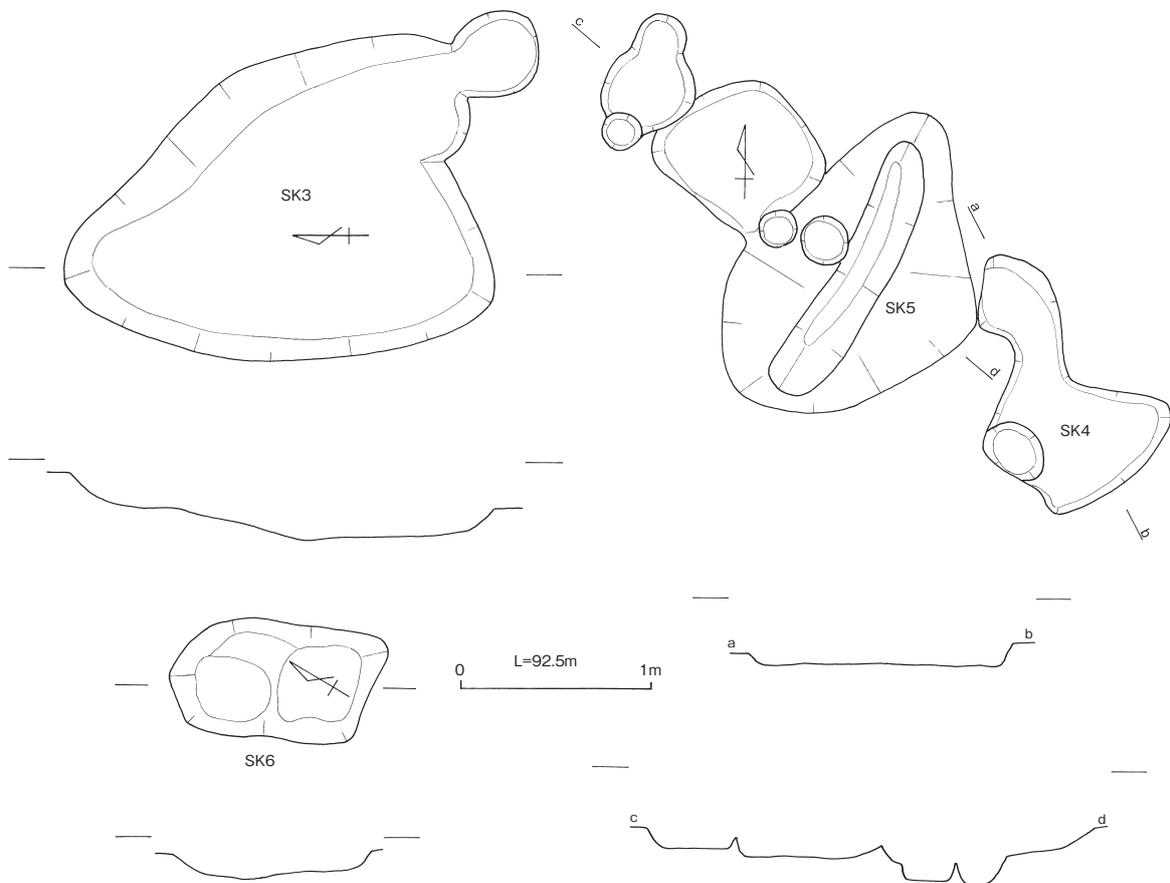
4 個の柱穴が等間隔に一直線に並ぶ。これに対応する柱列がないので柵と判断した。全長 4.8 m、柱間は 1.4～1.7 m、方向は N - 91° - E で東西方向を向き、建物跡 3 の梁間方向に近い。柱穴は円形（径 15～34 cm）で、柱穴 1 から土師器片が出土する。出土遺物は図示できないが中世の所産である。

柵 4（SA 4、第 16 図）

柵 3 の北側に平行に存在する。4 個の柱穴が一直線に並ぶ。全長 6.6 m、柱間は 2.1 m～2.3 m、方向は N - 89° - E で東西方向である。柱穴は円形（径 18～30 cm）で柱穴 1 から土師器、2 から土師器片などが出土した。柱穴 2 の土師器は杯で、トレンチの調査時に出土し第 6 図 4 がそれである。

土塋 3（SK 3、第 17 図）

建物跡 6 の北側に存在する土塋で南側では柱穴 2 個と切り合う。本来の形状は楕円形に近いものと推測される。掘り方は長さ 2.25 m、幅 1.5 m、深さ 0.3 m、断面は南側が一段深くなる形状で、埋土はほ



第 17 図 SK 3～6 平・断面図（S = 1 : 40）

ほぼ1層である。内部から勝間田焼、土師器片が出土した。この土壌の性格は明瞭でない。出土遺物は図示できないが中世の所産である。

土壌4 (SK 4、第17図)

土壌3の南にある不正形の土壌である。一部別の柱穴と切りあうようであるが、底のレベルは同一であるため一連のもの可能性もある。掘り方は長さ1.4 m、最大幅0.8 m、深さ0.13 m、断面底はほぼ平らである。出土遺物として勝間田焼、土師器、瓦質土器片がある。図示はできないが中世の所産である。

土壌5 (SK 5、第17図)

土壌4の北西に接して存在する土壌で柱穴などと切り合い、元々の形状は楕円形である。掘り方は長さ1.8 m、幅1.2 m、深さ0.3 m、断面はすり鉢状である。内部から勝間田焼、土師器片が出土した。出土遺物は図示できないが中世の所産である。

土壌6 (SK 6、第17図)

溝7の北側にある土壌で、形状は長方形に近い。掘り方は全長1.1 m、幅0.6 m、深さ0.15 mを測る。底は平らでなく、掘り込みが2箇所あるようにみえる浅い土壌である。出土遺物は見られないため時期は不明である。

土壌7 (SK 7、第18・23図)

溝12の北側に存在する溝状の土壌である。一部調査区外に伸びるが現状で全長3.5 m、幅1 m、深さ0.1 m、断面は緩やかなU字形である。埋土は1層で勝間田焼、土師器、羽釜、陶磁器、石などが出土した。その内4点を図示している。

4は土師器の椀で底部の切り離しは回転ヘラ切りである。5は瓦質の羽釜である。6・7は勝間田焼で6は椀で底部の切り離しは回転糸切りである。7は甕片で外面は格子目タタキである。これら出土遺物から中世の所産である。

土壌8 (SK 8、第18図)

土壌7の西側に接して存在する溝状の土壌である。一部弧状を呈するが、全長2.4 m、幅0.55 m、深さ0.15 mを測る。断面はU字形で埋土は1層、勝間田焼、土師器、陶磁器が出土した。出土遺物は図示できないが中世の所産である。

土壌9 (SK 9、第18図)

土壌8の北側に存在する方形の土壌である。掘り方は長さ1.5 m、幅1.1 m、深さ0.2 mを測る。断面は緩やかなU字形で埋土は1層である。勝間田焼、土師器、瓦質土器、陶磁器が出土した。出土遺物は図示できないが中世の所産である。

土壌10 (SK10、第18図)

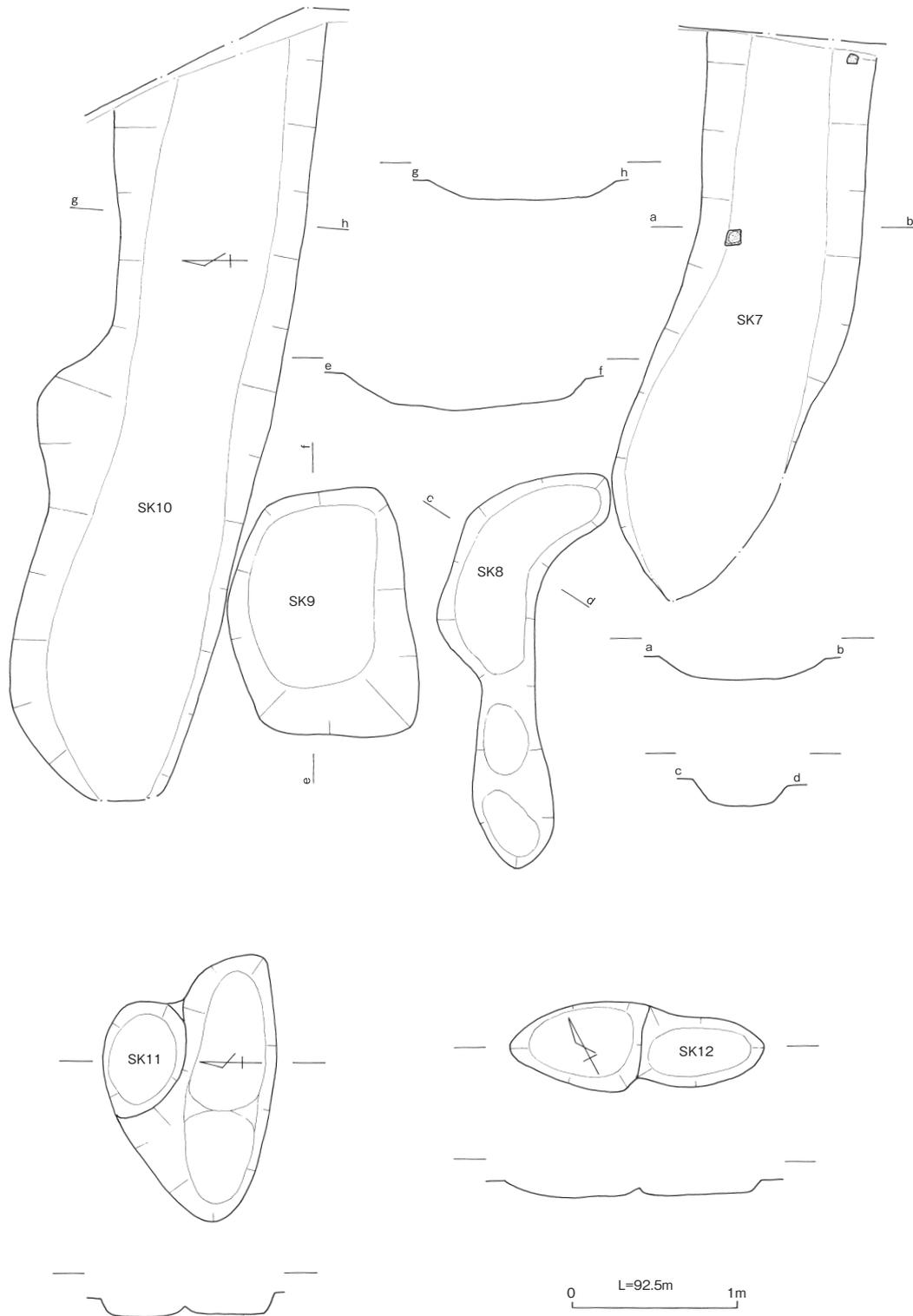
土壌9の北側に接し土壌7とほぼ平行に存在する溝状の土壌である。一部調査区外に伸びるが現状で全長4.8 m、幅1.4 m、深さ0.1 mを測る。断面はU字形で埋土は1層である。勝間田焼、土師器、瓦質土器の羽釜、陶磁器が出土した。出土遺物は図示できないが中世の所産である。

土壌11 (SK11、第18図)

土壌10の北側に位置する三角形に近い形状の土壌である。二つの土壌が切りあっている可能性もあるが、底のレベルがほぼ同一のため一連のものとして推測される。掘り方は長さ1.6 m、幅1 m、深さ0.15 mを測り、出土遺物は見られない。そのため時期は不明である。

土壙 12 (SK12、第 18 図)

土壙 10 の西側に存在する土壙で、二つの土壙が切りあっている形状であるが底レベルがほぼ同一のため一連のものである。掘り方は長さ 1.6 m、幅 0.55 m、深さ 0.13 m を測る。埋土は 1 層で勝間田焼、土師器、陶器片が出土した。出土遺物は図示できないが中世の所産である。



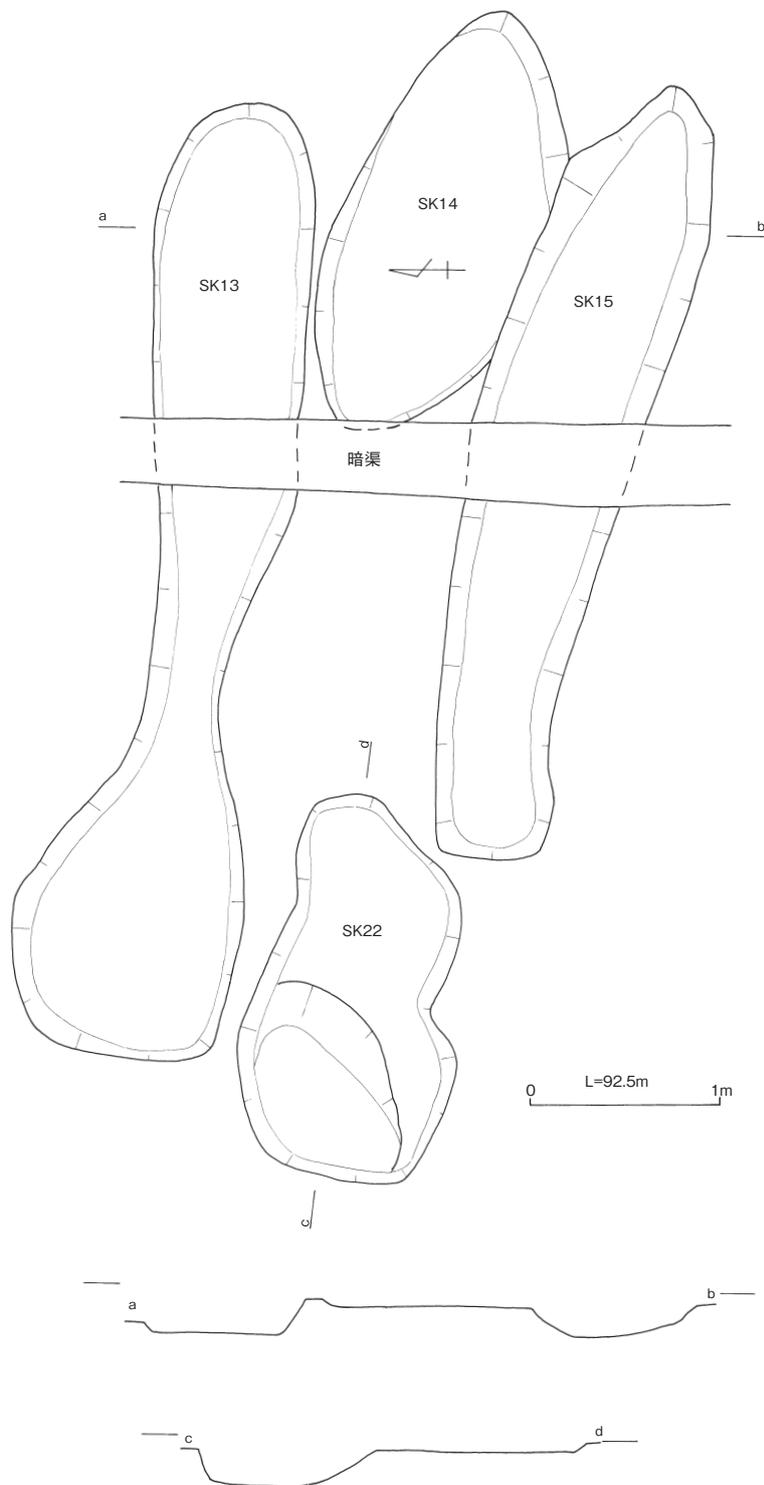
第 18 図 SK 7 ~ 12 平・断面図 (S = 1 : 40)

土壙 13 (SK13、第 19 図)

SK12 の西にある溝状の土壙で、形状は瓢箪状を呈する。中央付近を暗渠が通る。掘り方は長さ 5.1 m、幅 1.2 m、深さ 0.2 m を測る。底は平らで埋土は 1 層である。勝間田焼、土師器、陶器、瓦片などが出土した。出土遺物は図示できないが瓦片が見られる事から近世頃の所産である。

土壙 14 (SK14、第 19・23 図)

土壙 13 と 15 の間に存在する楕円形状の土壙で土壙 15 に切られている。掘り方は長さ 2.4 m、幅 1 m、



第 19 図 SK 13 ~ 15・22 平・断面図 (S = 1 : 40)

深さ 0.03 m を測り、浅い土壙である。底は平らで埋土は 1 層、須恵器、勝間田焼、備前焼、弥生土器片などが出土した。このうち 1 点を図示している。

8 は備前焼の挿鉢で片口部分の破片である。底部は欠損する。内部には 8 ～ 9 条の摺目が見られる。出土遺物から中世の所産である。

土壙 15 (SK15、第 19・23 図)

土壙 14 の南にある溝状の土壙で、土壙 13 とほぼ平行に存在する。中央を暗渠が通る。掘り方は長さ 4.2 m、幅 0.9 m、深さ 0.2 m を測る。断面は U 字形で埋土は 1 層である。須恵器、勝間田焼、土師器片などが出土した。この内 4 点を図示している。

9 は須恵器の甕片で外面は平行タタキの上に横方向のカキメ状のナデを施し、内面には当て具痕が見られる。10 は須恵器甕などの底部片、36・37 は鉄釘で一部欠損する。これら出土遺物から古い時期のものも含まれるが、ほぼ中世の所産である。

土壙 16 (SK16、第 20・23 図)

土壙 15 の南にある楕円形の一边がへこんだ形状の土壙で、さらに北と西側には浅い落ち込みが付随する。掘り方は長 3 m、幅 2 m、深さ 0.4 m を測り、内部から小さな石 4 個がまとまって出土した。底は緩やかな U 字形で埋土はほぼ 1 層である。出土遺物は須恵器、勝間田焼、瓦質土器、陶磁器などがあり、この内 4 点を図示している。

11 は須恵器の高台付き杯身の底部片、12 は陶器の小皿で底部の切り離しは回転糸切り、13 は勝間田焼碗で小片だが全形がほぼ復元できる。14 は備前焼挿鉢の口縁部で内部に摺目が見られる。これら出土遺物から古い時期のものも見られるがほぼ近世頃の所産である。

土壙 17 (SK17、第 20 図)

溝 12 の北側に平行に存在する溝状の土壙で内部を暗渠が通る。掘り方は長さ 3.9 m、幅 1.2 m、深さ 0.2 m を測り、底はほぼ平らで埋土は 1 層である。須恵器、勝間田焼、土師器、瓦質土器、陶磁器などが出土した。出土遺物は図示できないが中世の所産である。

土壙 18 (SK18、第 20 図)

土壙 15 と 17 の間に存在する三角形状の土壙で、内部に柱穴が 3 個見られる。掘り方は長さ 1.3 m、幅 0.9 m、深さ 0.15 m を測る。出土遺物は炭片が少量のみで、時期は不明である。

土壙 19 (SK19、第 20 図)

土壙 18 の西にある溝状の土壙である。掘り方は長さ 2.1 m、幅 1.3 m、深さ 0.2 m を測り、断面は U 字形で埋土は 1 層である。出土遺物は勝間田焼、土師器、陶磁器があり、出土遺物は図示できないが中世の所産である。

土壙 20 (SK20、第 20 図)

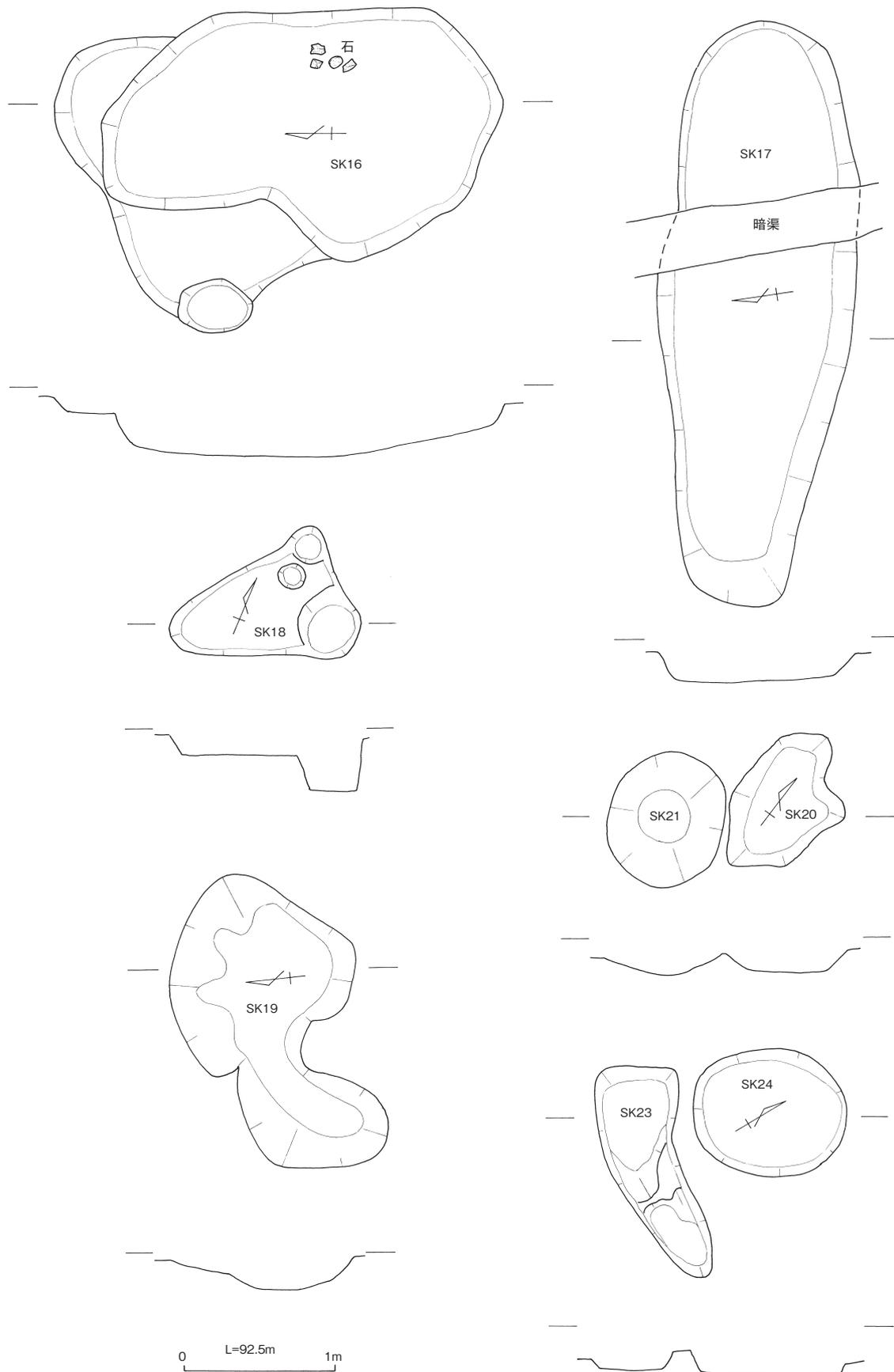
土壙 19 の南にある不正形の土壙で掘り方は長さ 1.1 m、幅 0.65 m、深さ 0.15 m を測る。底は平らで埋土は 1 層である。出土遺物は見られず、時期は不明である。

土壙 21 (SK21、第 20 図)

土壙 20 の南にある円形土壙である。掘り方は径 0.9 × 0.75 m、深さ 0.15 m を測り、断面はすり鉢状で埋土は 1 層である。出土遺物は土器片が少量あるが時期は不明である。

土壙 22 (SK22、第 19 図)

土壙 13 の南ある溝状の土壙で掘り方は長さ 2.05 m、幅 1.15 m、深さ 0.2 m を測る。断面は西側で 1



第 20 图 SK 16 ~ 21 · 23 · 24 平 · 断面图 (S = 1 : 40)

段深くなるが、いずれも底はほぼ平らである。出土遺物は勝間田焼、土師器、陶器があるが図示できない。これら出土遺物から中世の所産である。

土壙 23 (SK23、第 20 図)

土壙 13 の北側にある溝状の土壙である。掘り方は長さ 1.3 m、幅 0.55 m、深さ 0.15 m を測る。底は平らで埋土は 1 層である。出土遺物は須恵器片が 1 点あり図示している。

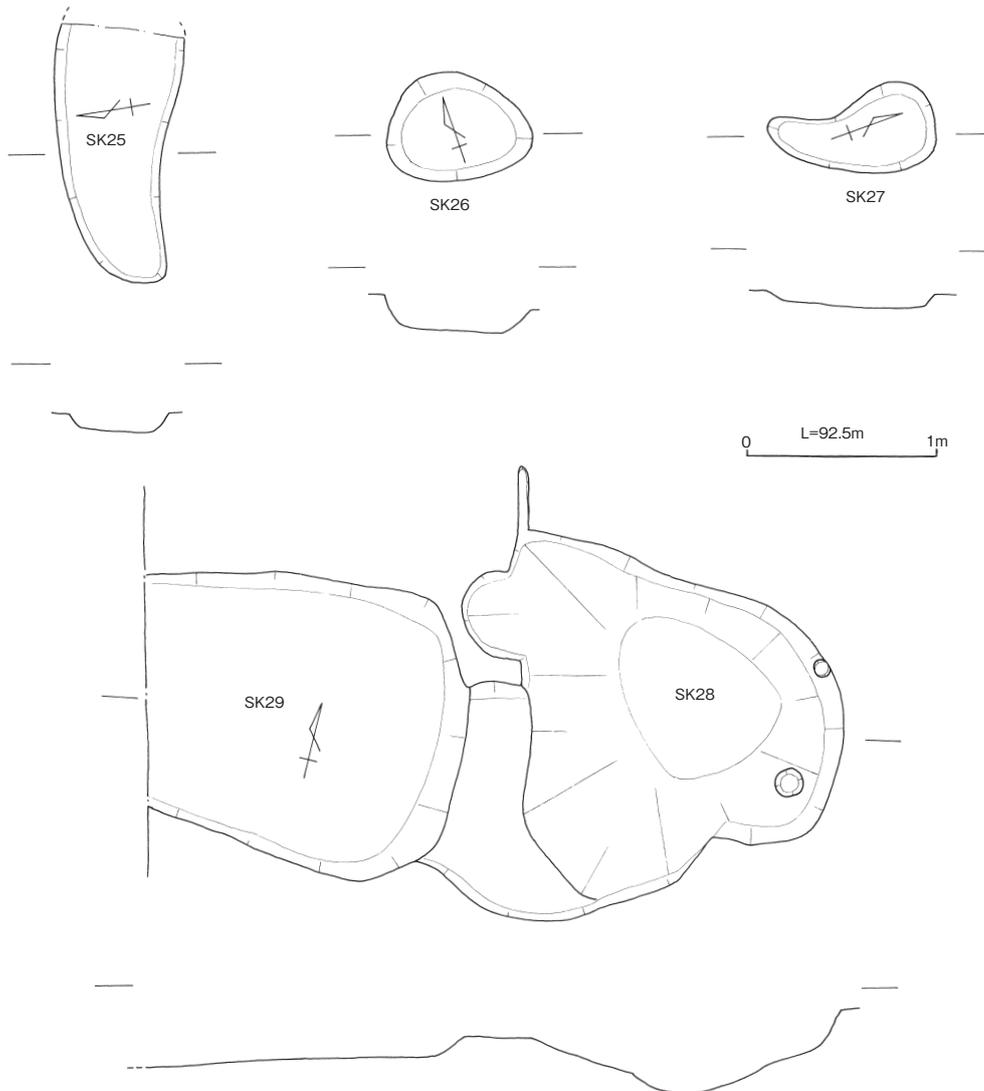
15 は須恵器の高台付き杯身の底部小片である。この出土遺物から本土壙は古代の可能性はあるが他に古代の遺構が無く、古代以前の須恵器が出土する遺構はあるが、いずれも中世の土器が同時に出土するため、本遺構も中世の可能性が十分考えられる。

土壙 24 (SK24、第 20 図)

土壙 23 の北にある円形土壙である。掘り方は径 1 × 0.85 m、深さ 0.15 m を測る。底は平らで埋土は 1 層である。出土遺物は見られないため、時期は不明である。

土壙 25 (SK25、第 21 図)

調査区中央北端にある溝状土壙である。東側は排水用の溝を掘ったため不明瞭である。現状で掘り方は長さ 1.35 m、幅 0.65 m、深さ 0.1 m を測る。底は平らで埋土は 1 層である。少量の土器片が出土し



第 21 図 SK 25 ~ 29 平・断面図 (S = 1 : 40)

たが時期は明瞭でない。

土壙 26 (SK26、第 21 図)

土壙 13 の北側にある円形の土壙である。掘り方は径 0.75 × 0.6 m、深さ 0.2 m を測り、底はほぼ平らで埋土は 1 層である。土師器片が出土するが、出土遺物は図示できない。中世の所産である。

土壙 27 (SK27、第 21 図)

土壙 13 の西側にある楕円形の一辺がへこんだ形状の土壙である。掘り方は長さ 0.85 m、幅 0.45 m、深さ 0.09 m を測る。底は平らで埋土は 1 層である。出土遺物は土師器片がある。図示できないが中世の所産である。

土壙 28 (SK28、第 21・23 図)

土壙 29 と接続し一連のものである。やや不正形に近い土壙で掘り方は長さ 2 m、幅 1.65 m、深さ 0.45 m を測る。確認調査時に一部確認しており（第 5 図 T 3）、井戸状の遺構の可能性を考えたが、深さがさほど無く明瞭でない。断面は U 字形に近く内部から少量の石と須恵器、勝間田焼、土師器、弥生土器、陶器などが出土した。この内 2 点を図示している。

16・17 は勝間田焼で 16 は椀の口縁部、17 は底部で底部の切り離しは回転糸切りである。これら出土遺物から中世の所産である。

土壙 29 (SK29、第 21 図)

土壙 28 と接続し一部調査区外であるが長方形の土壙と考えられ、現状で全長 1.7 m、幅 1.6 m、深さ 0.15 m を測る。底は平らで埋土はほぼ 1 層である。出土遺物は須恵器、勝間田焼、土師器、弥生土器などがあり、図示できないが中世の所産である。

溝 2 (SD2、第 11 図)

調査区東南隅で検出した南北方向の溝で、一部分のみである。現状で長さ 2.6 m、幅 0.45 m、深さ 0.15 m を測り、断面は U 字形である。埋土は 1 層で出土遺物は無い。そのため時期は不明であるが、土層関係から中世頃の所産である。

溝 3 (SD3、第 11 図)

東西方向の溝で東は調査区外に続き、西側は中央の暗渠部分で消えているが、元もとの地形が西側に向かって傾斜しており、その部分を整地（中世の包含層）して溝は造られている。この包含層を先に掘り下げたため溝の続きが無くなっているようになっているが、本来は西側に延びている事が西側土層から確認できている。ちなみに溝 8～11 も同様である。溝 3 の全長は現状で 6.6 m、幅 0.5 m、深さ 0.12 m を測り、途中で溝 4 に分岐する。出土遺物は勝間田焼、瓦質土器などがある。これらは図示できないが中世の所産である。

溝 4 (SD4、第 11 図)

溝 3 の途中から南に分岐する。これも暗渠部分でなくなっているが、本来はさらに南に延びていたものと推測される。ただ、南壁の土層では確認できないためこの間で消えているようである。なお、溝 5 はさらに深い位置にあり時期の違うものである。現状で全長 2.3 m、幅 0.55 m、深さ 0.11 m を測り、幅、深さとも溝 3 と同一のため一連のものである。出土遺物として瓦、鉄滓がある。これらは図示できないが瓦が見られるため中世から近世にかけての所産である。

溝 5 (SD5、第 11 図)

西側の中世包含層を除去した段階で検出した溝である。現状で暗渠より北には延びておらず溝 4 とは

異なるものである。全長 4.6 m、幅 0.3 m、深さ 0.05 m を測り南側は調査区外に続く。出土遺物は見られないが中世の包含層の下から検出されたため中世頃の所産である。

溝 6・7 (SD6. 7、第 11・23 図)

溝 6 と 7 は合体して一連のものとなっており、切り合い関係から 7 が 6 を切っている。さらに暗渠や土壇 3 によって切られている。また、本来はこの土壇 3 の西にさらに延びている可能性もあるが、西壁土層では確認できていない。そのため西壁までに終わっていた可能性が推測される。溝 6 の全長 5.5 m、7 の全長は 6.2 m、幅 0.8 m、両者合わせた幅 1.2 m、深さ 0.17 m を測る。溝 6 の出土遺物は勝間田焼、土師器、溝 7 は弥生土器、須恵器、勝間田焼、土師器、瓦質土器がある。この内溝 7 の 2 点を図示している。

18・19 は勝間田焼碗で 18 は口縁部、19 は底部で底部の切り離しは回転糸切りである。これら出土遺物から溝の時期は中世である。

溝 8～10 (SD8～10、第 11・23 図)

溝 8～10 は平行に存在し、いずれも東西方向の溝である。溝 9・10 は東側で途切れているが、これは耕作により削平を受けたもので、本来は溝 8 同様東壁まで続いていたものである。またこれら 3 条の溝は西壁へ続いていたことはすでに述べている。現状で溝 8 は全長 10.2 m、幅 0.5 m、深さ 0.14 m、溝 9 は全長 7.6 m、幅 0.4 m、深さ 0.09 m、溝 10 は全長 6.5 m、幅 0.2 m、深さ 0.05 m を測る。出土遺物は溝 8 で勝間田焼、備前焼、鉄釘、溝 9 で勝間田焼、陶器片、溝 10 で勝間田焼、土師器、陶器片がある。その内溝 8 の鉄釘のみ図示している

38～41 は鉄釘である。これら出土遺物から溝の時期は中世頃である。

溝 11 (SD11、第 11 図)

溝 10 の北 2 m にある東西方向の溝で、現状で全長 7 m、幅 0.3 m、深さ 0.08 m を測る。この溝も本来は西側に伸びていた。浅い溝で出土遺物は土師器、陶磁器があり、図示できないが時期は中世頃である。

溝 12 (SD12、第 11・23 図)

調査区の中央に東西方向に存在する比較的しっかりした溝である。長さ 17.3 m、幅 1 m、深さ 0.2 m を測り調査区外に続く。断面は底の平らな形状で埋土は 1 層である。出土遺物は勝間田焼、土師器、陶磁器、羽口、キセル、鉄釘などがあり、その内 3 点を図示している。

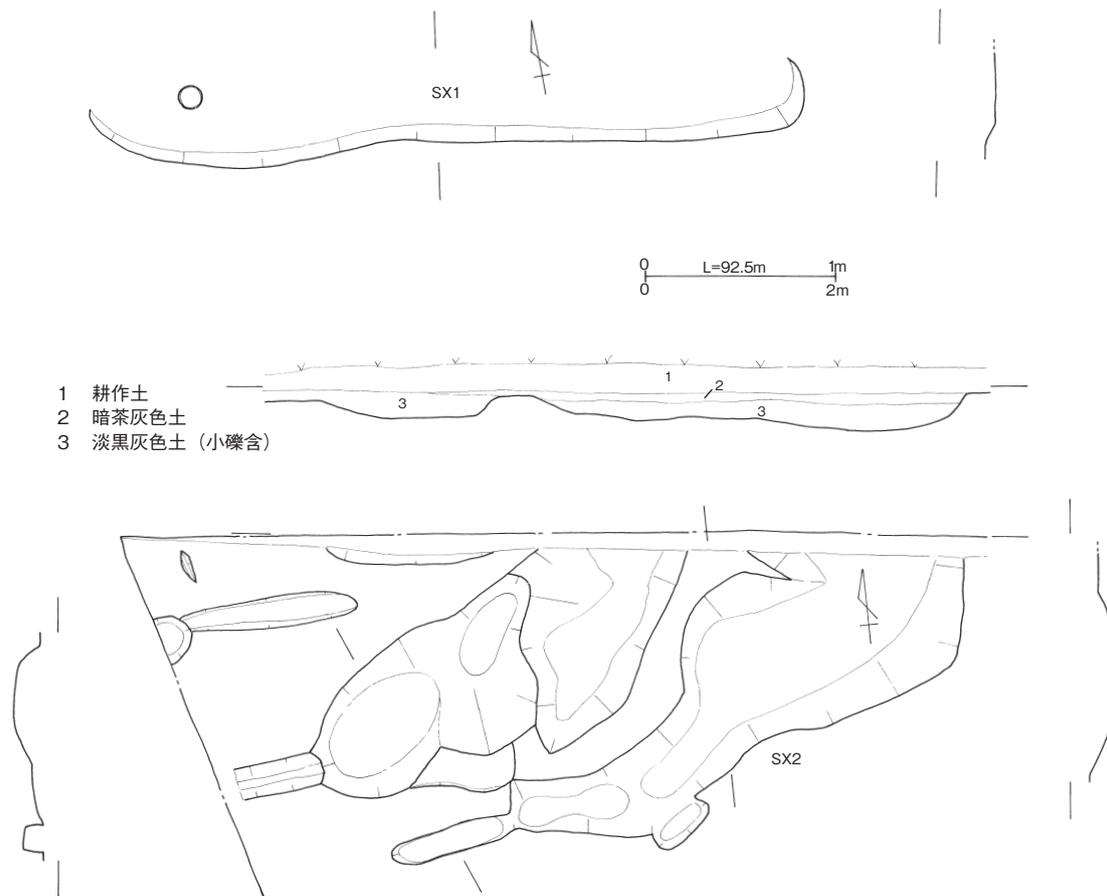
20 は勝間田焼の碗の底部で切り離しは回転糸切りである。42・43 は鉄釘である。これら出土遺物から近世頃の所産である。

不明遺構 1 (SX1、第 22 図)

調査区の溝 12 の北側は地山が粘土質で溝状を呈する土壇が数多く存在し、さらにその北端側はかなり大規模に掘り込まれている箇所がある。この東側を不明遺構 1 とした。現状では長さ 4 m 程が段状に掘り込まれているようになっているが、実際北側の土層（第 12 図 g - h）を見る限りでは 2 段に掘り込まれている事がわかる。そのためかなり広範囲で不正形な地形となっている。埋土は 1 層である。出土遺物は勝間田焼、土師器、陶磁器、瓦などがある。これら出土遺物は図示できないが近世頃の所産である。

不明遺構 2 (SX2、第 22・23 図)

不明遺構 1 の南側で 1 よりはさらに不正形に複雑に掘り込まれている箇所があり、これらをまとめて



第 22 図 SX 1・2 平・断面図 (SX 1…S = 1 : 40、SX 2…S = 1 : 80)

不明遺構 2 としている。溝状のものや土壇状のものが重なっており、調査区外の北側に続くようである。北壁の土層を見ると大きく 2 箇所掘り込まれた事がわかる。埋土は 1 層である。出土遺物は須恵器、勝間田焼、土師器、陶磁器、瓦片などがある。この内 6 点を図示している。

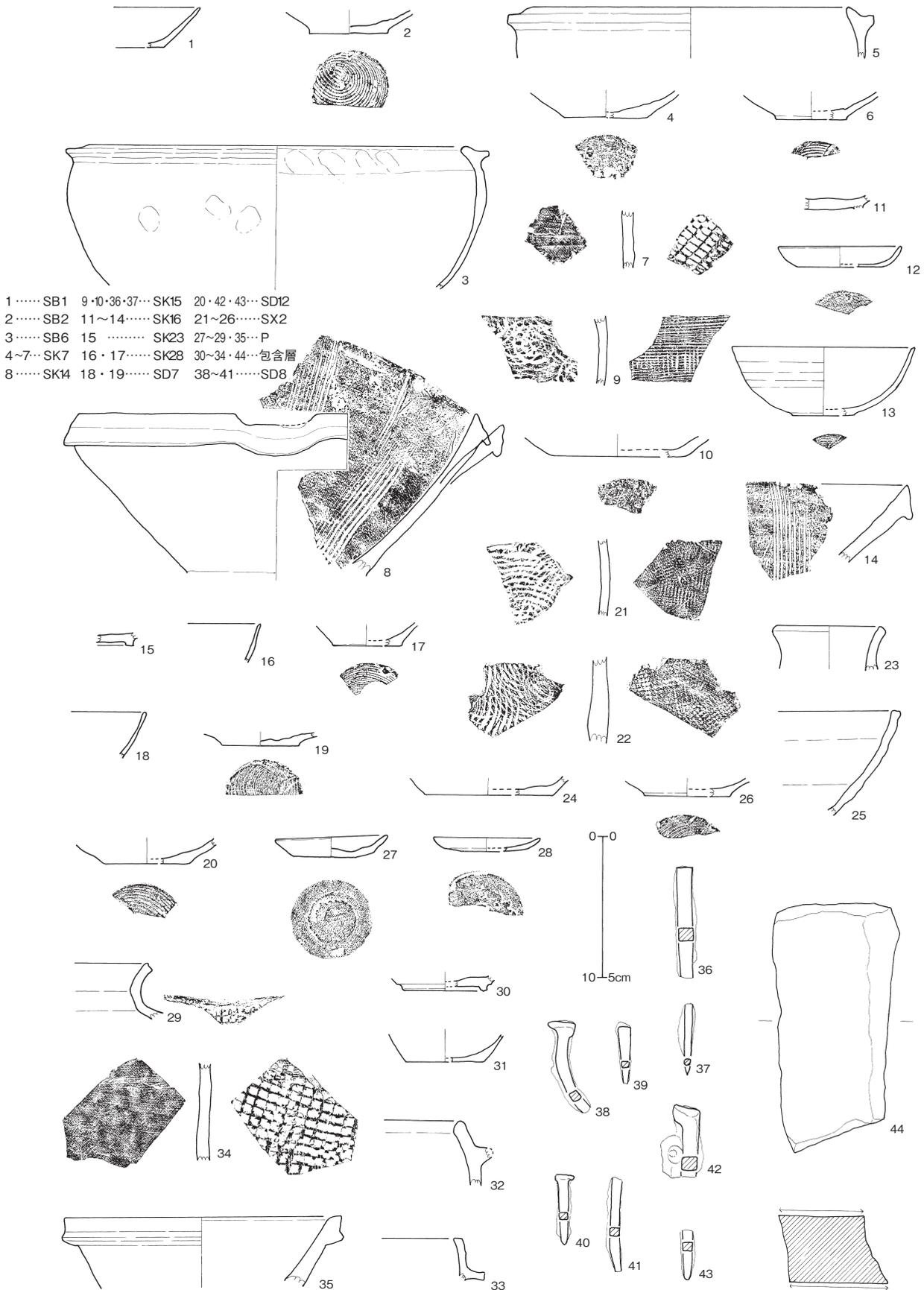
21・22 は須恵器甕の胴部で外面にはタタキ、内面には当て具痕が見られる。23 は須恵器壺などの口縁部、24 は須恵器ないしは勝間田焼壺の底部、25 は瓦質の鉢で図示はしていないが片口部分の破片もある。26 は勝間田焼碗の底部である。これら出土遺物の内瓦が見られるため近世頃の所産である。

その他遺構 (第 11・23 図)

その他として建物にならない柱穴が多数あり、内部から土器や石、杭などが出土しているものがある。これらの出土遺物を 4 点図示している。

27 は P 2 から出土した土師器小皿で底部の切り離しは回転ヘラ切りである。28 は P 3 から出土した土師器小皿で、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。29 は P 4 出土の勝間田焼甕の口縁部で胴部外面には格子目タタキが見られる。35 は P 1 出土の石鍋である。外面には断面台形の鏝を作り付けている。滑石製と思われ、外面に煤が付着している。

その他遺構に伴わない遺物として 30 は須恵器の高台付き杯身の底部、31 は弥生土器の底部、32・33 は瓦質の羽釜、34 は勝間田焼甕の胴部で外面に格子目タタキ、内面はナデである。44 は砥石で、2 面に使用痕があり砂岩製と思われる。その他、不明鉄器や鉄滓などがある。



第23図 A地区出土遺物 (1~35...S=1:4、36~44...S=1:2)

2. B地区 (第24図)

B地区はA調査区の北側に補足的に設定した調査区である。元々A地区の北側には確認調査時のトレンチ2 (第5図T2) で遺構が発見されなかったため、遺跡の範囲もA地区までとしたが、A地区の調査で同地区北側に不明遺構2が存在するため、可能な限りトレンチ2までの間を調査した。B地区の調査面積は約40㎡である。

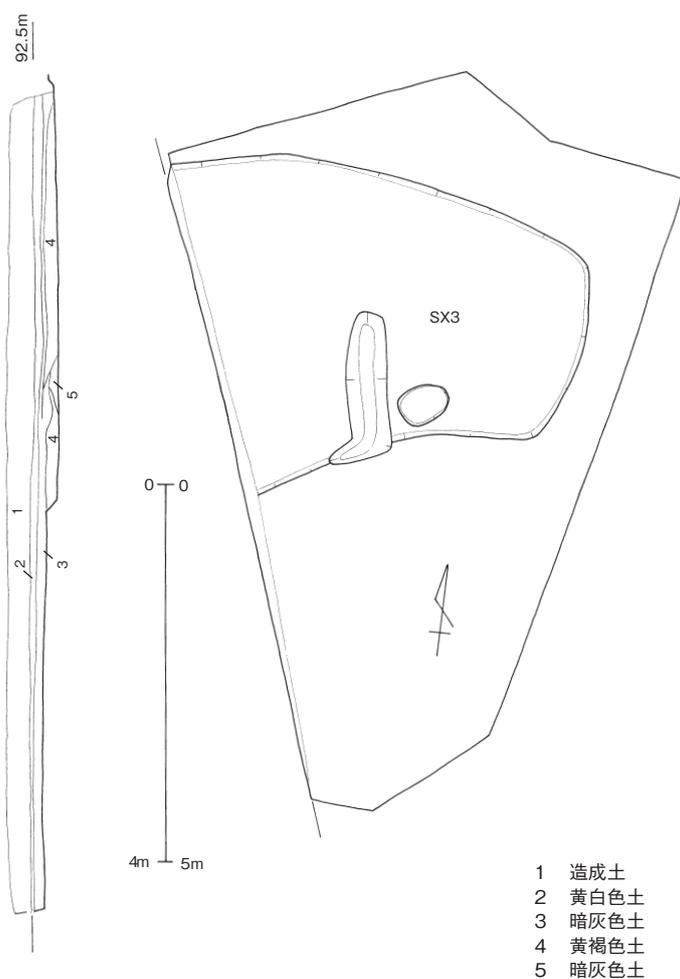
基本土層は元々宅地であったため、造成土 (一部耕作土、1層) の下に、床土 (2層)、包含層 (3層) が若干あり、その下が地山面である。

(1) 近世

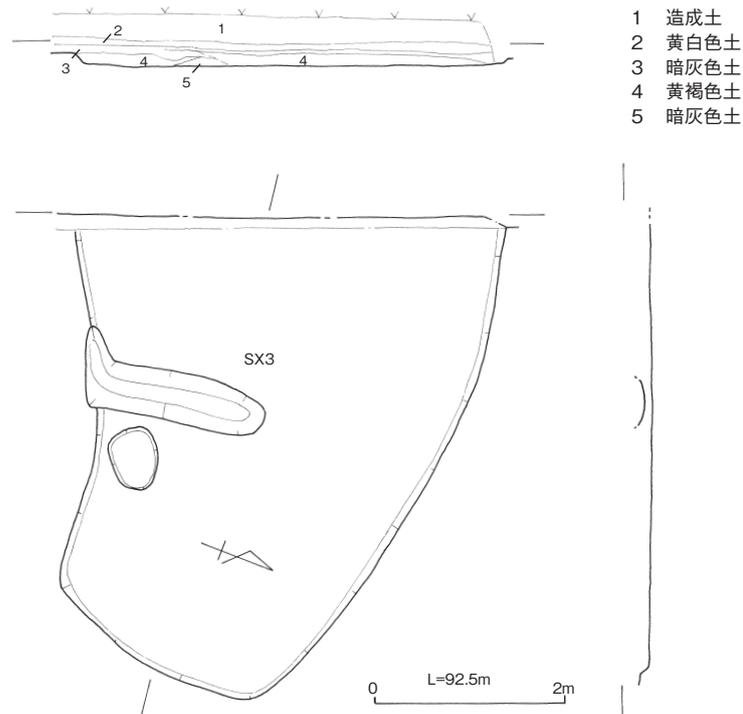
時期の不明な溝、及び土壇と不明遺構3がある。おそらく不明遺構3を切る溝と土壇は現代のものと推測される。

不明遺構3 (SX3、第25図)

一部調査区外に続くが現状で全長5m、幅4.5m、深さ0.12mと比較的浅い台形状の大形土壇である。底は平らで、埋土は4・5層の互層である。出土遺物は土師器、陶磁器、瓦片などがある。出土遺物は図示できるものは無いが、時期は近世頃と思われる。



第24図 B地区平面図 (S = 1 : 100)、土層図 (S = 1 : 80)



第25図 SX3平・断面図 (S = 1 : 80)

3. C地区 (第26図)

C地区はA地区の南側の続きで、建物群が存在する部分の続きであるが、結果的に建物跡は検出されなかった。

この地区も宅地であったため、基本土層は造成土(1層)の下に耕作土(2層)や包含層(3層)の一部があり、その下が地山面である。造成土は地山面まで達している個所もある。また調査区の北側に現代の暗渠排水が東西方向に見られ、それを切る形で宅地時の便槽がある。なおA地区に見られた南北方向の暗渠排水の続きは見られない。C地区の調査面積は約28㎡である。

(1) 中世～近世

土壇30 (SK30、第27図)

暗渠で一部壊されているが方形の土壇である。内部には幅1cm、厚さ2cm程の木を四角に組んで枠にし一見井戸状にしている。当初は井戸と考えて掘り下げたが、この枠材以外に板材などは無く、深さも差ほど無く比較的浅い事から井戸では無いものと考えられる。この土壇の掘り方は長さ0.8×1m、深さ0.35mで、底には玉石を敷いている。木の枠はこの玉砂利の上に粘土で北側高さ15cm(南側は10cm)程にして箱状にした上に置いているようである。現状ではこの木枠が北から南に向かって傾斜しており、この高さの差が元々のものか定かではないが、土層観察からはその可能性が高い。さらにこの枠の4隅の内3箇所には丸太材をナナメ方向に打ち込んで、枠材を留める際の補強に使用しているものと推測される。ただ残りの1箇所(南東隅)のみは底に土器(瓦質土器)の底部を埋め込んでいて木材は見られない。この枠内には幅5cm程の薄い板材などが玉石上面から、やや大きめの石が上層部分から出土しており、何らかの一部の可能性もある。また上屋構造の柱穴などは見られない。またこの枠内が幅60cm、深さ10～15cm程となり、仮に水をためても井戸にはなりにくく、他の用途を考えれば例えば洗い場などに使用できたのではないかと考えられるが、これについても再考する必要がある。

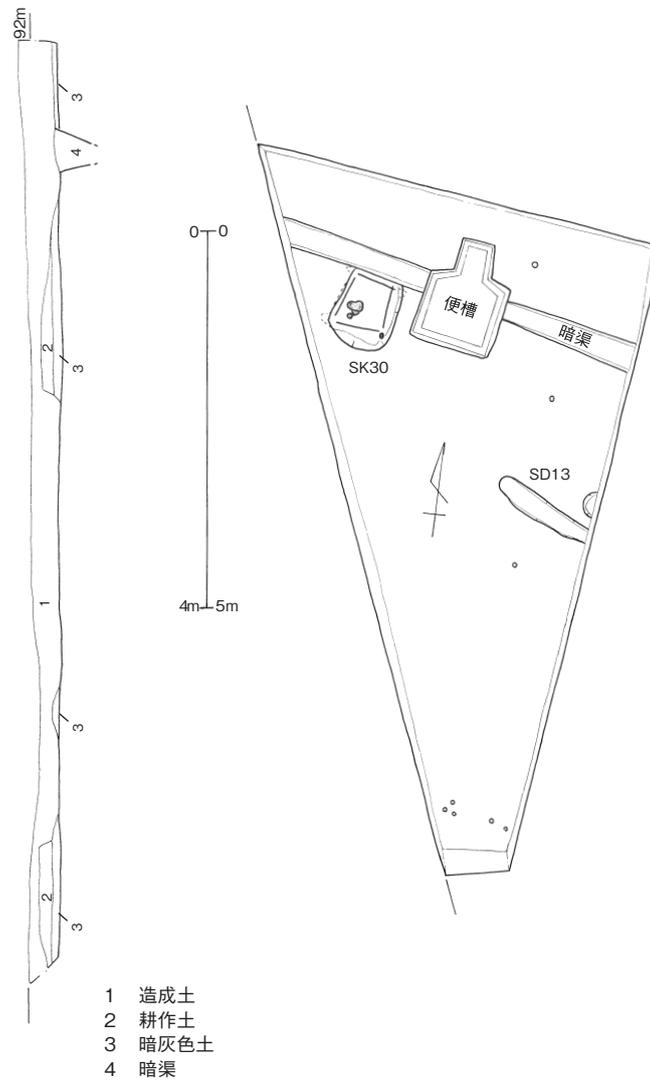
出土遺物は勝間田焼、土師器、瓦質土器などがある。この内2点を図示している。

1は南東隅の底に内側を上にして置かれていたもので、瓦質土器の底部付近である。表面はかなり摩滅している。2は瓦質の羽釜片である。これら出土遺物から中世の所産である。

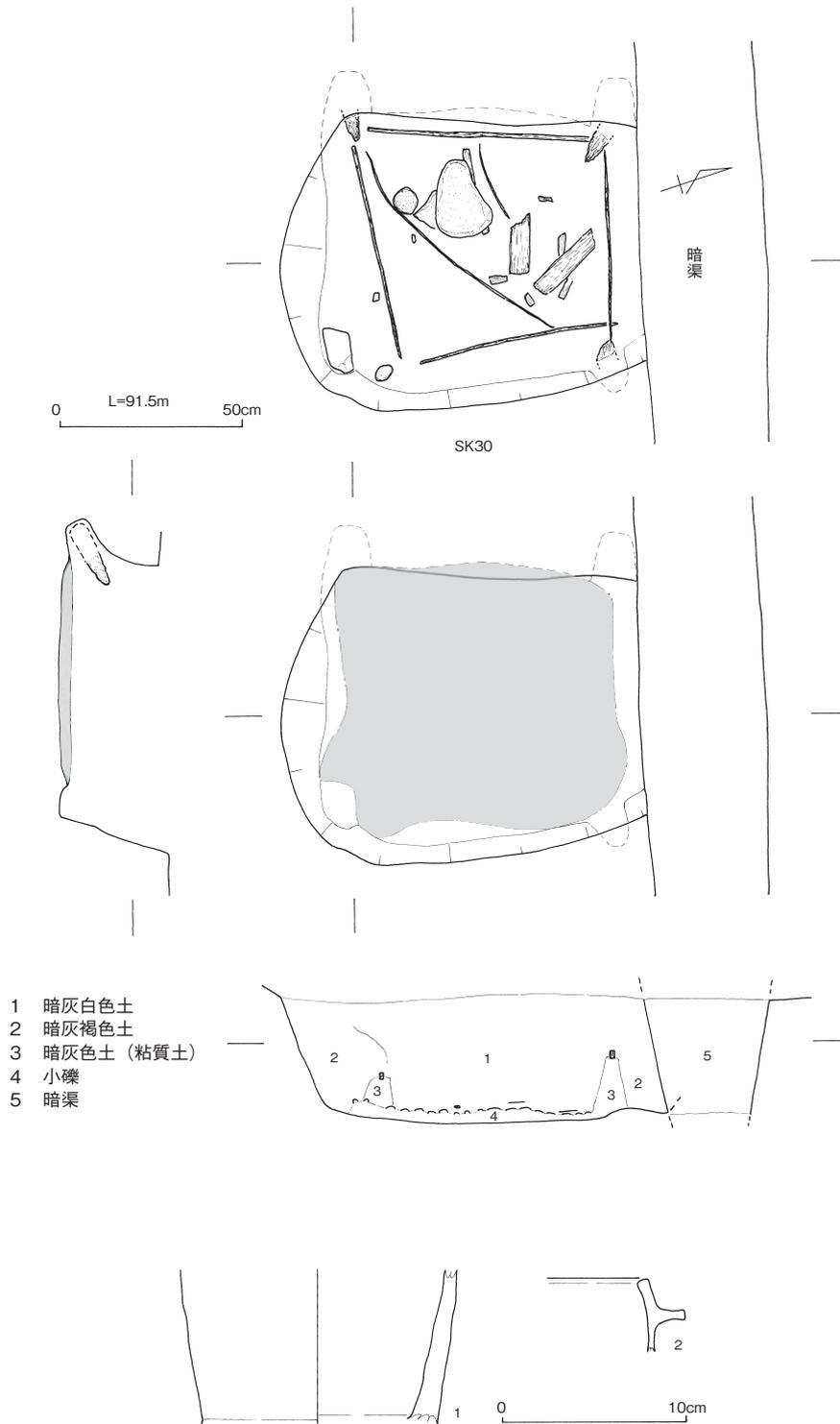
溝 13 (SD13、第 26 図)

調査区の中央にある溝で、現状で全長 1.3 m、幅 0.3 m、深さ 0.05 m を測る。東西方向の溝でかなり削平を受けている。出土遺物は勝間田焼、瓦があり、これらから近世頃の所産である。

その他見られる小さな穴は杭の跡と推測されるが、時期は不明である。



第 26 図 C 地区平面図 (S = 1 : 100)、土層図 (S = 1 : 80)



第 27 図 SK 30 平・断面図 (S = 1 : 20) 及び出土遺物 (S = 1 : 4)

4. D地区 (第28図)

A地区の道を挟んだ東側で溝、土壘などを検出したが、建物跡の柱穴は見られない。

基本土層は耕作土(1層)、その下が包含層(2層)である。調査区の中央を南北に通る溝は現代の暗渠排水(7層)で、内部に竹を使用している。D地区の調査面積は約31㎡である。

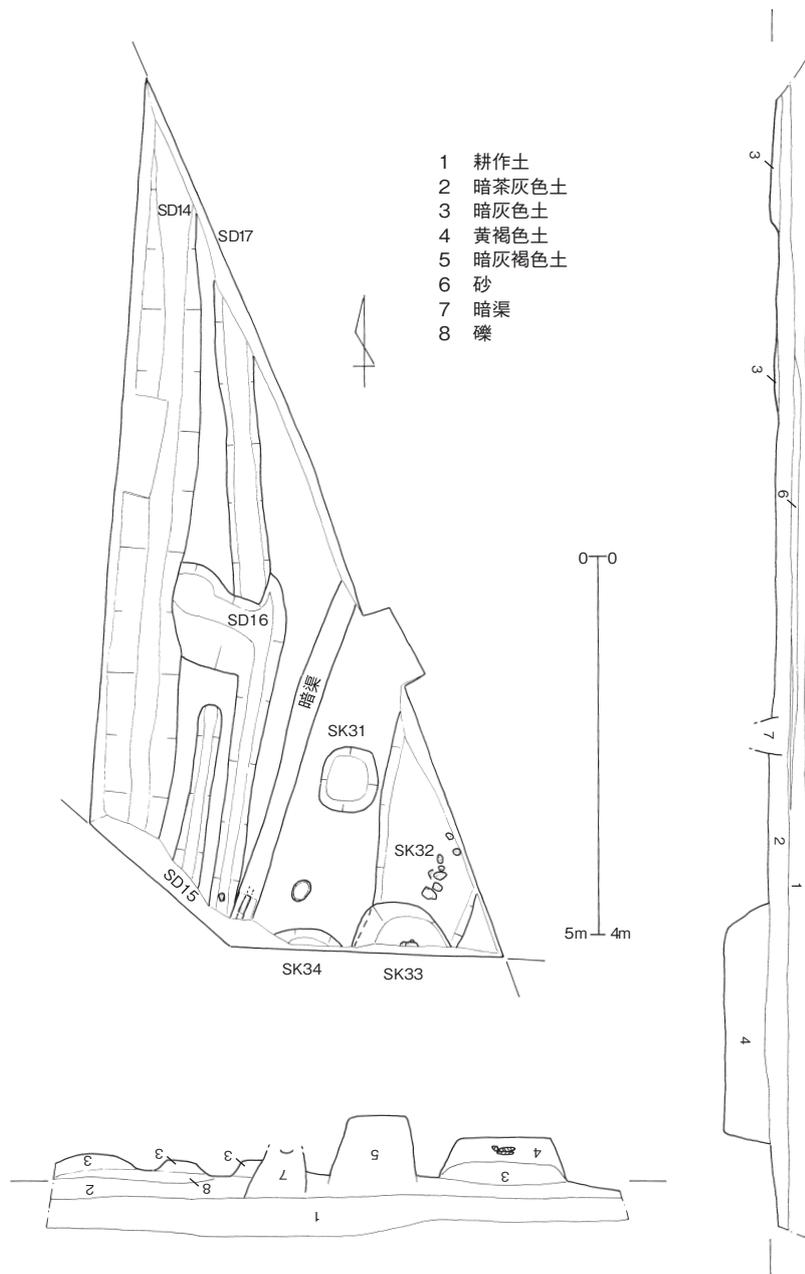
(1) 中世～近世

土壘31(SK31、第29・30図)

隅丸方形の土壘で掘り方は長さ0.85×0.75m、深さ0.22mを測り、断面はU字形、埋土は1層である。

出土遺物は勝間田焼、土師器、陶磁器がある。これらの内1点を図示している。

1は勝間田焼碗の底部で切り離しは回転糸切りである。出土遺物から中世の所産である。



第28図 D地区平面図 (S = 1 : 100)、土層図 (S = 1 : 80)

土壙 32 (SK32、第 29 図)

土壙 31 の東にある溝状の土壙で土壙 33 に切れ、調査外に続く。現状で長さ 3 m、幅 1.35 m、深さ 0.48 m を測り、断面はほぼ垂直に近い形状で掘り込まれ底は平らである。内部に石が数点見られる。埋土は 1 層で地山の土であるが、地山土がブロックではいるのではなく、埋土すべてが地山土である。そのため自然に堆積したと言うよりは、故意に埋めているようである。現状では土壙の性格は不明である。出土遺物は須恵器、勝間田焼片などがあり、図示できないが、時期は中世である。

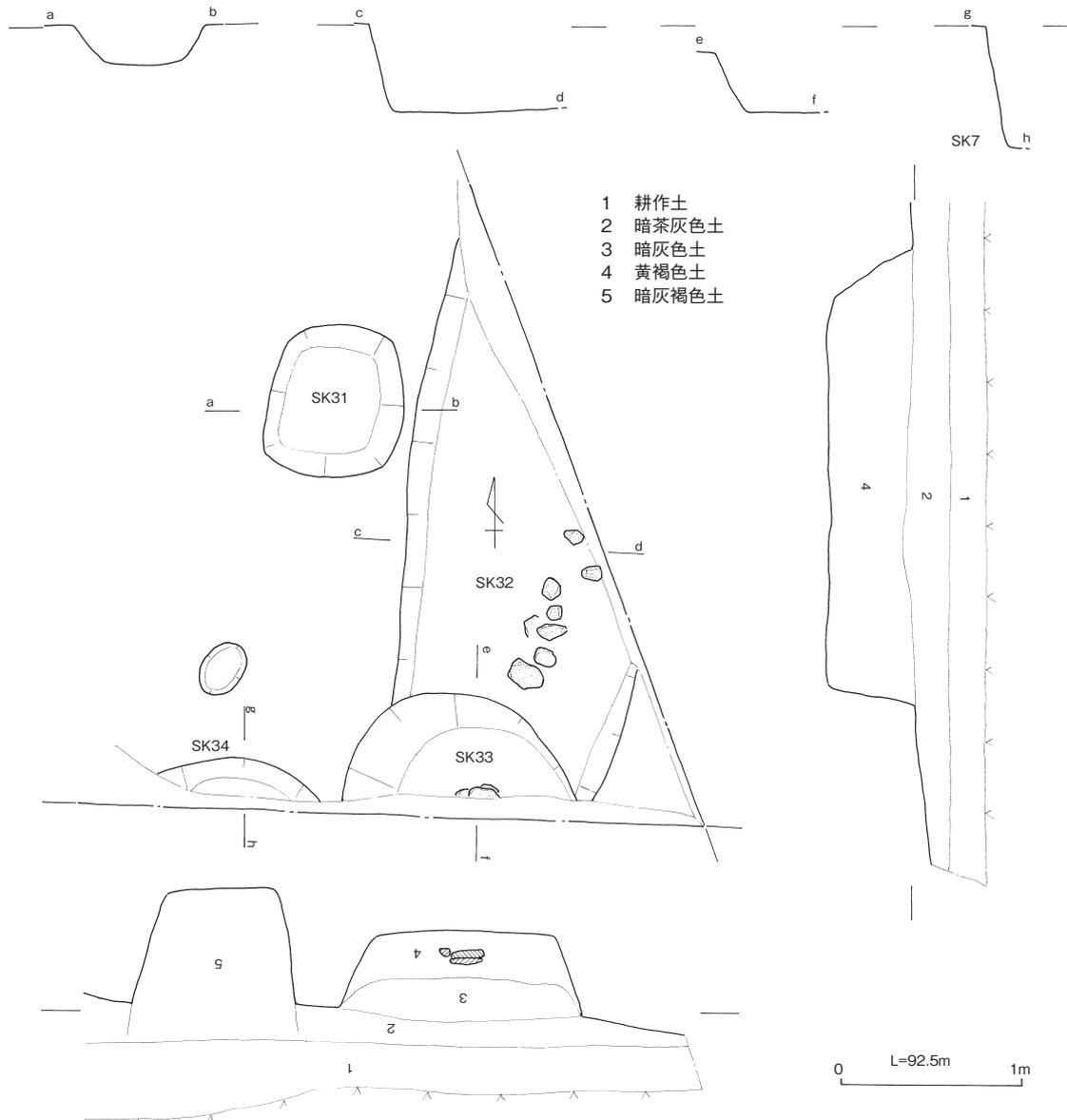
土壙 33 (SK33、第 29・30 図)

土壙 32 を切っていて、調査区外に続く円形土壙である。現状で径 1.25 m、深さ 0.25 m を測る。埋土は 1 層で底は平らである。出土遺物は須恵器、陶磁器、瓦片があり、その内 1 点を図示している。

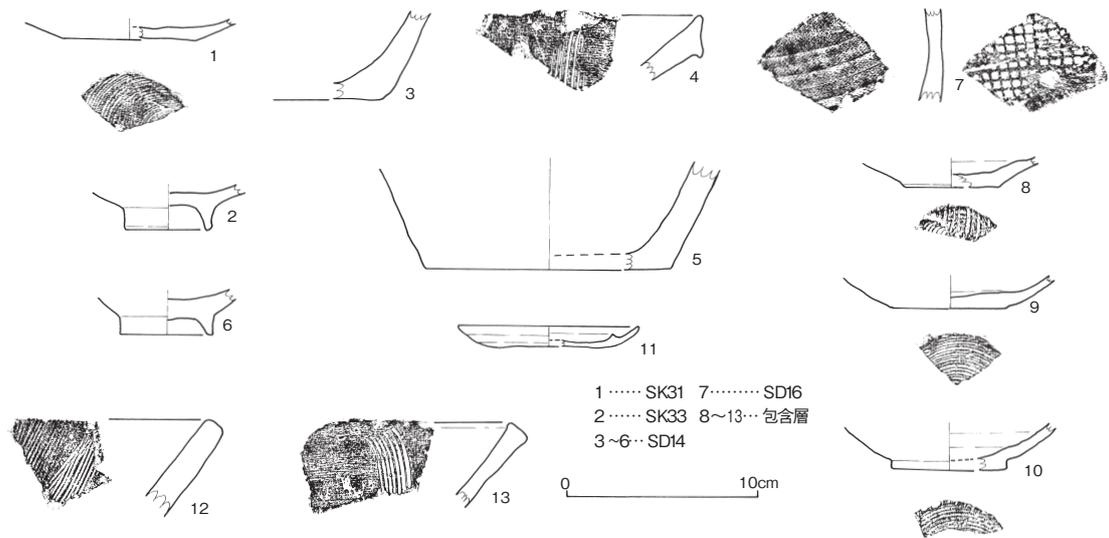
2 は施釉陶器の底部である。これら出土遺物から時期は近世頃である。

土壙 34 (SK34、第 29 図)

土壙 33 の西に一部のみ検出した。検出した当初は土壙 31 と一連の柱穴と考えて北側の調査区を一部



第 29 図 SK 31 ~ 34 平・断面図 (S = 1 : 40)



第30図 D地区出土遺物 (S = 1 : 4)

拡張したが続きの土層は無く、また土層を見る限りでは土層 31 よりは新しいものと考えられる。現状で径 0.9 m、深さ 0.65 m を測り、出土遺物は陶器と瓦がある。出土遺物は図示できないが時期は近世頃と考えられる。

溝 14 ~ 17 (SD14 ~ 17、第 28・30 図)

いずれも調査区の西側を南北に流れる溝で、調査区外に続く。溝 14 は現状で幅 1 m 以上、長さ 10 m を測る。断面は U 字形で埋土は 1 層である。出土遺物は勝間田焼、備前焼、陶器、鉄滓などがある。その内 4 点を図示している。

3 は勝間田焼などの底部、4 ~ 5 は備前焼で 4 は播鉢の口縁部で内部に摺目が見られ、5 は壺などの底部である。6 は施釉陶器の底部である。これら出土遺物から溝 14 の時期は中世頃である。

溝 15 は 14 と 16 の間にある南北の溝で長さ 2.5 m、幅 0.35 m を測り、北側は途中で消失する。埋土は 1 層で溝 14 と同一である。出土遺物は土師器、勝間田焼、鉄滓がある。出土遺物は図示できないが、時期は中世頃である。

溝 16 も南北方向の溝だが、途中で溝 14 の方に屈曲し一連のものとなっている。長さ 4.5 m、幅 0.4 ~ 1.1 m、埋土は同様に 1 層で、溝 15 と同一である。出土遺物は勝間田焼、陶器などがある。その内 1 点を図示している。

7 は勝間田焼瓦片で外面に格子目タタキ、内面はナデである。これら出土遺物から時期は中世頃である。

溝 17 も南北方向の溝で 16 の途中からのびている。16 と一連のものであった可能性がある。長さ 4.2 m、幅 0.4 m を測る。埋土は 1 層で溝 15 などと同一である。出土遺物は見られないが時期は中世頃と思われる。

その他の遺構 (第 28・30 図)

その他として柱穴が 1 つあるが、これ以外に柱穴などは見られない。

遺構に伴わない遺物を図示している。8 ~ 10 は勝間田焼碗の底部でいずれも切り離しは回転糸切りである。11 ~ 13 は備前焼で 11 は小皿、12・13 は播鉢の口縁部で内面に摺目が見られる。

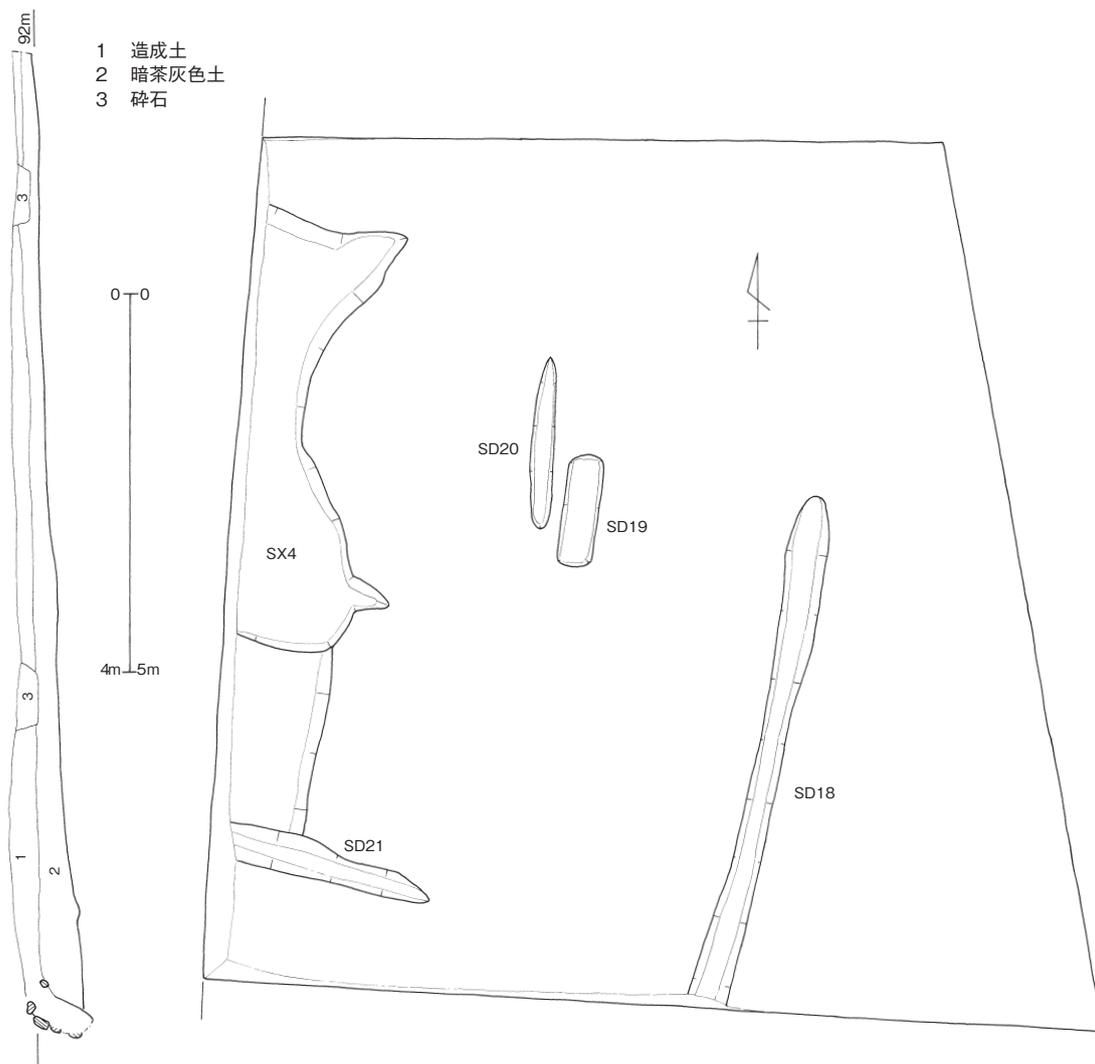
5. E地区 (第31図)

D地区の南側で、宅地部分である。建物の撤去後調査に入った。北側には浄化槽部分や道路があるためその部分をさけて調査をおこなった。そのため、D地区との間がやや広めに空白となっている。基本土層は造成土（1層）の下は西側で包含層（2層）が見られるが、東側では包含層がほとんど無く遺構自体の残りが悪い。そのため、かなり削平されているものと推測される。E地区の調査面積は約120㎡である。

(1) 中世

溝 18～20 (SD18～20、第31・33図)

調査区の中央で南北方向の3条の溝を検出した。いずれも浅い溝であり、かなり削平を受けているものと推測される。溝18は長さ6.8m、幅0.5m、深さ4cm、19は長さ1.5m、幅0.5m、深さ5cm、20は長さ2.3m、幅0.3m、深さ5cmを測る。埋土はいずれも1層で出土遺物は、18から土師器、勝間田焼、19から勝間田焼、20から土師器片が出土している。これら出土遺物の内溝18からの出土遺物を1点図示している。



第31図 E地区平面図 (S = 1 : 40)、土層図 (S = 1 : 80)

2は勝間田焼碗の口縁部である。これら出土遺物からいずれも中世の所産である。

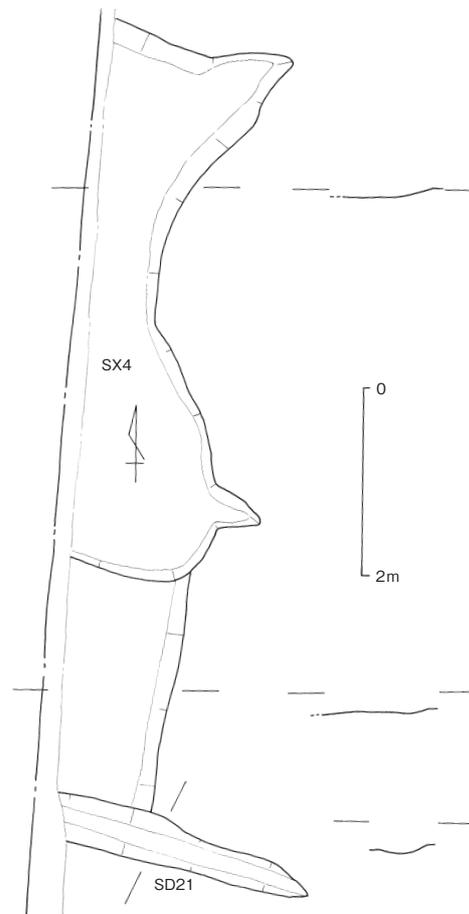
溝 21 (SD21、第 32 図)

不明遺構 4 の南、東西方向の溝である。現状で長さ 2.9 m、幅 0.5 m、深さ 0.06 m を測る。埋土は中世の包含層と同一であるが出土遺物は見られない。出土遺物は見られないが中世の所産と推測される。

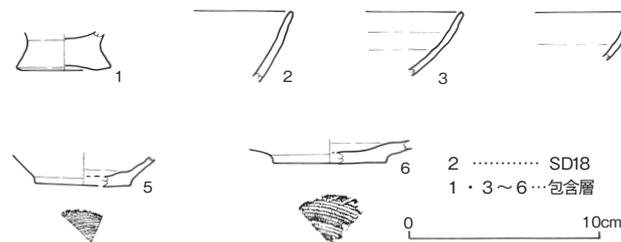
不明遺構 4 (SX4、第 32・33 図)

調査区西側に見られる落ち込みで、形状はやや不正形である。全長約 8 m、最大幅 2 m を測る南端には溝 21 が東西方向に見られる。遺構の性格は、明瞭でないが元々の浅い谷部であった可能性が大きい。埋土には中世の遺物が多数見られ、これら遺物のほとんどが包含層内遺物として取り上げている。その内 5 点を図示している。

1 は土師器の高台部分、3～6 は勝間田焼で、3・4 は口縁部、5・6 は底部である。これら出土遺物から本遺構は中世の所産である。



第 32 図 SX4・SD21 平・断面図 (S = 1 : 80)



第 33 図 E 地区出土遺物 (S = 1 : 4)

6. F 地区 (第 34・35 図)

E 地区の南側は宅地部分ですでに削平されていると判断されるため、途中に見られる水路より南の耕作地を調査の範囲とした。道を挟んで北側が F 地区、南側が G 地区である。基本土層は耕作土（1・2層）の下に床土（3層）があり、その下に瓦を含む近世頃の包含層（4層）がある。北側ではこの層が、大きく掘り込まれた形となっている。その下は南側では土器細片や石器を含む包含層（5層）が続き、これらは洪水による堆積層と推測される。土器片が出土しているが、この部分で明瞭な遺構面を検出できていない。南側で一部深く掘った結果この土層は砂層となりさらに下層に続くようである。逆に北側はこの砂層が見られず、近世の包含層（4層）の下は黒灰色を呈する粘土質層（6層、旧表土層？）があり、その下は遺物の含まない粘土質層が続く。F 地区の調査面積は約 402 m²である。

(1) 近世

柵 5 (SA5、第 36 図)

調査区中央で 5 個の柱穴を検出した。柱間は 2～4 m とばらつきがある。東西方向の柵ないしは杭列と推測され、調査区外にも伸びる可能性がある。出土遺物は見られないが、埋土などから、近世の所産である。

柵 6 (SA6、第 36 図)

柵 5 の北で等間隔に並ぶ 3 個の柱穴を検出した。柱間は 2 m である。東西方向の柵ないしは杭列で東側の調査区外にのびる可能性はある。中央の柱穴 (P) 1 から瓦片が出土している。そのため近世の所産である。

土壙 35 (SK35、第 37・39・40 図)

調査区の南側で検出した円形土壙で、掘り方は径 1.5 × 1.6 m で、そこから 0.3 m 程すり鉢状に掘り込み、次に垂直に掘り下げ、最後はえぐるように掘って袋状となる。深さは最大で 1.1 m を測り、埋土はほぼ 1 層で粘土質の土層である。内部から瓦などが多数出土している。おそらく、これら瓦は廃棄されたものと推測される。瓦以外に窯壁片のようなものがあり、瓦窯関連の廃棄土壙と推測される。ただこの遺構が廃棄用に掘られたのか、何かを転用したのかは明瞭でないが、後者の可能性が大きく、元々は粘土採掘用に試し掘りした土壙に瓦などを廃棄した可能性があるが、埋土自体が粘土質である点がやや理解に苦しむ。なお出土した瓦はコンテナ 8 箱分程あり、その多くは平・丸瓦で、軒丸瓦も 1 点あるが軒平瓦は見られない。瓦は第 39・40 図に図示している。

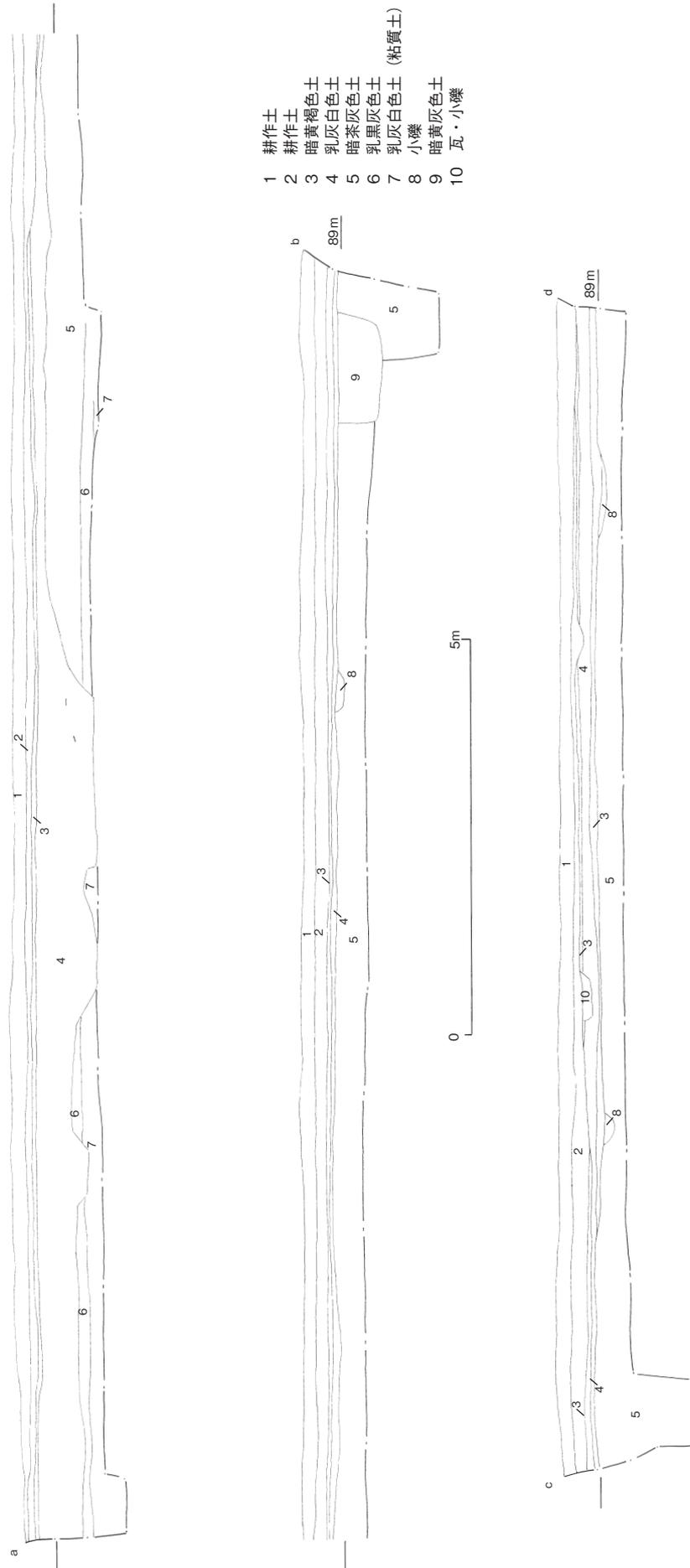
1 は一部欠損するがほぼ完形の軒丸瓦である。瓦当文様は左巻き三巴で珠文数は 13、瓦当径は 14.5 cm で釘穴がある。2～5 は丸瓦である。5 は焼きぶくれで大きく歪んでいる。6 は平瓦で一部欠損する。7～9 は棟込瓦で 7 は菊丸で瓦当文様は菊花である。8・9 は輪違いである。10・11 は鬼瓦の一部である。

土壙 36 (SK36、第 37 図)

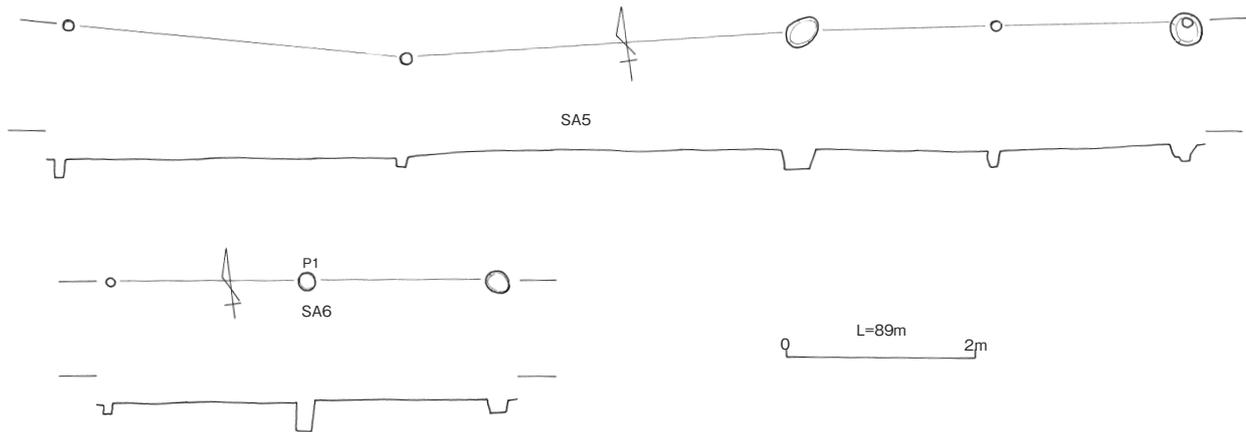
調査区の南東隅にあり、一部分で調査区外に続く。現状では径 1 m 以上の円形土壙と推測されるが東壁の土層に断面があり、それによると径 1.4 m、深さ 0.5 m 程の土壙である。埋土はほぼ 1 層で出土遺物には、弥生土器、陶器片があり、図示できないが近世頃のものである。

土壙 37 (SK37、第 37 図)

調査区の北側、柵 5・6 を挟んで土壙群が見られる。特にこの北側は土層の所でも述べたが、下層の



第 35 图 F 地区土层图 (S = 1 : 80)



第36図 SA5・6平・断面図 (S = 1 : 80)

粘土質の部分を中心にかなり広範囲に掘り下げており、おそらくこれらは土を採掘した跡と思われる。そのためこれら土壇の多くは粘土をとるためにある程度面的にさげたあと、粘土を採った採掘痕で、それぞれが採掘した1単位と推測される。

土壇 37 は円形土壇で掘り方は径 1.3 × 1.55 m、深さ 0.4 m を測る。埋土はほぼ 1 層で内部から瓦片が出土する。そのため近世の所産である。

土壇 38 (SK38、第 37 図)

土壇 37 の西側にある隅丸長方形土壇で、掘り方は長さ 1.1 m、幅 0.95 m、深さ 0.2 m を測り、埋土には瓦や土器片が含まれる。近世の所産である。

土壇 39 (SK39、第 37 図)

土壇 38 の東にある三角形の土壇で、掘り方は長さ 0.65 m、深さ 0.1 m を測り、埋土から瓦が出土する。近世の所産である。

土壇 40 (SK40、第 37 図)

土壇 38 の北にある溝状の土壇で、掘り方は長さ 1.85 m、幅 0.85 m、深さ 0.1 m を測る。埋土から土器、炭片が出土した。近世の所産と推測される。

土壇 41 (SK41、第 37 図)

土壇 37 の東にある円形土壇の一部で調査区外に続く。掘り方は現状で長さ 2.2 m、幅 0.45 m、深さ 0.15 m を測る。埋土から瓦片が出土する。近世の所産である。

土壇 42 (SK42、第 37 図)

土壇 41 の北にあり調査区外に続く溝状の土壇で、掘り方は長さ 2.5 m、幅 1.25 m、深さ 0.1 m を測る。出土遺物は見られない。近世の所産である。

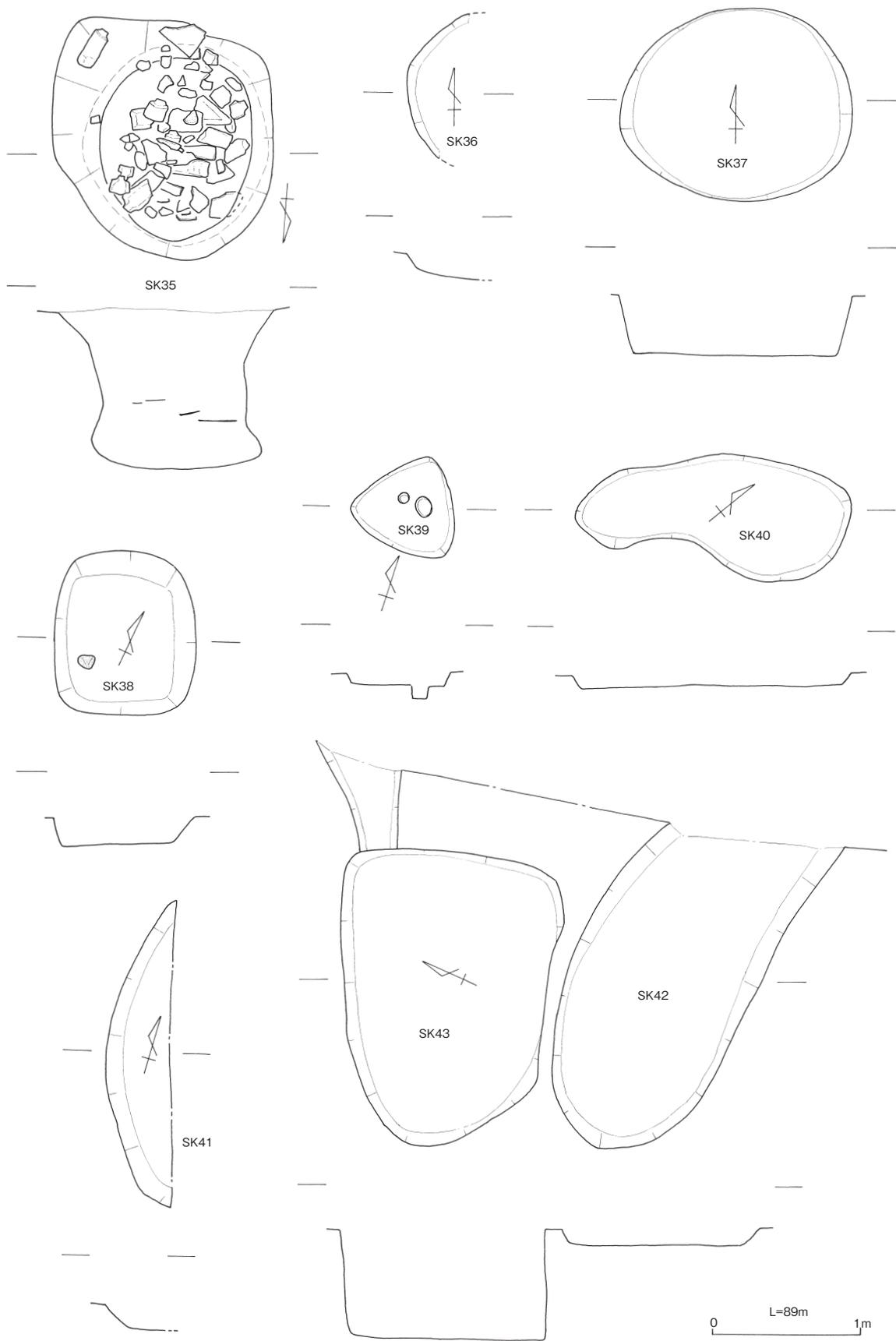
土壇 43 (SK43、第 37 図)

土壇 42 の北にある、方形に近い土壇である。掘り方は長さ 2 m、幅 1.5 m、深さ 0.75 m を測り、深さは土壇群の中で一番深い。北東側には溝状のものが付随する。埋土は粘土質で瓦片が出土する。近世の所産である。

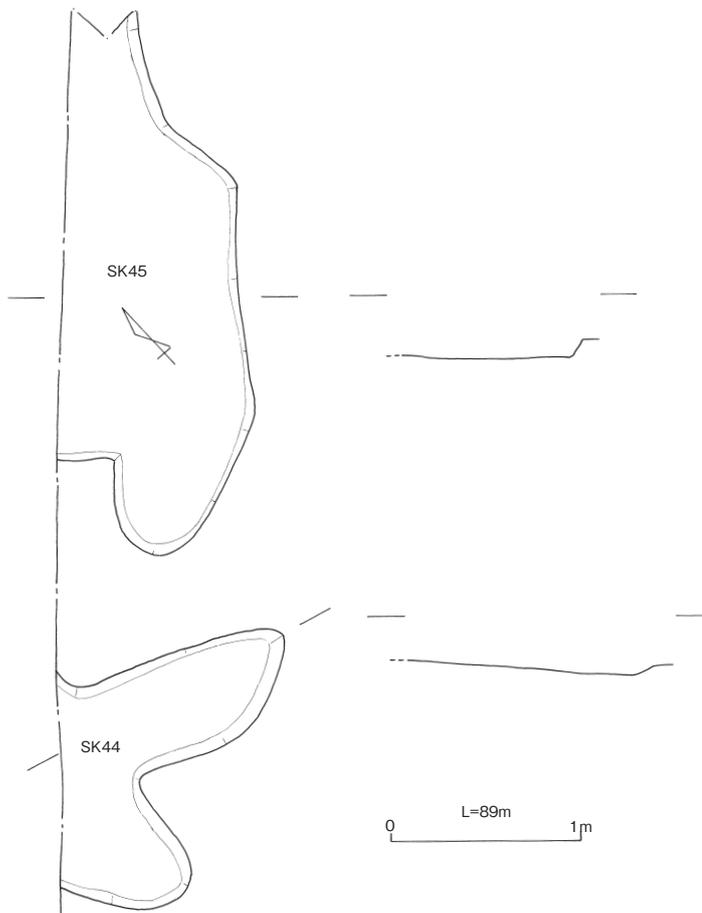
土壇 44 (SK44、第 38 図)

調査区北端にあり一部調査区外である。不正形な土壇で、掘り方は最大長 1.2 m、幅 1.1、深さ 0.1 m を測る。出土遺物は見られないが、近世の所産である。

土壇 45 (SK45、第 38 図)



第 37 图 SK 35 ~ 43 平·断面图 (S = 1 : 40)



第38図 SK44・45平・断面図 (S = 1 : 40)

土壙44の北にある不正形の土壙である。掘り方は長さ2.9m、幅0.9m、深さ0.1mを測り、埋土から瓦片が出土する。近世の所産である。

溝22～24 (SD22～24、第34図)

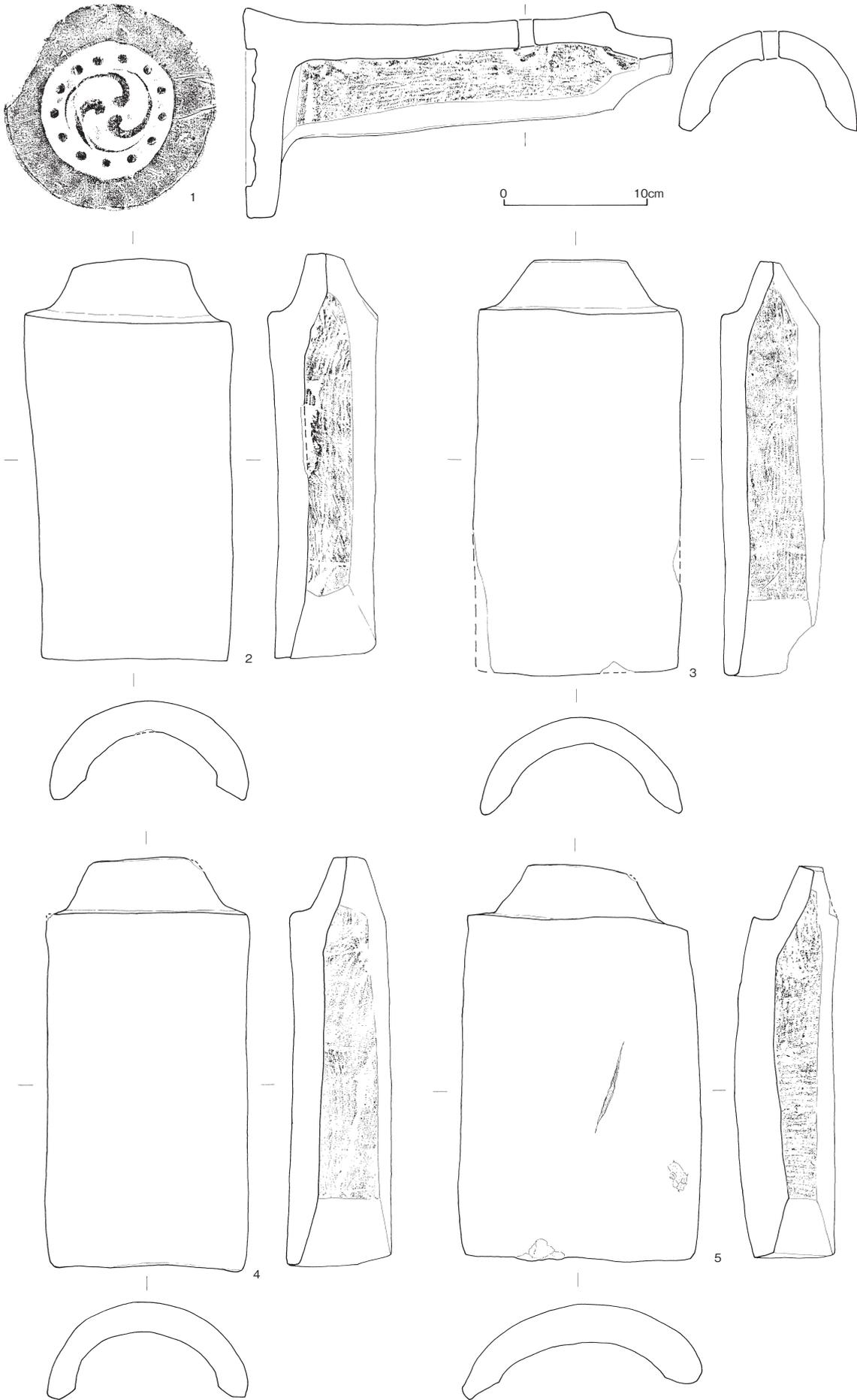
溝22・23は南北方向、24は東西方向の溝である。いずれも幅0.3～0.5m、深さ0.04～0.1mで、22は長さ6m、23は長さ2m、24は長さ1.3mを測る。22の埋土から土器片が少量出土している。いずれの溝も底がほぼ同一レベルで、溝22は第35図の4層の下から掘り込まれた8層であり、この4層が近世の包含層のためこれら溝は近世頃の所産である。

その他遺構に伴わない遺物を1点図示している。第41図2がそれで備前焼の小皿である。

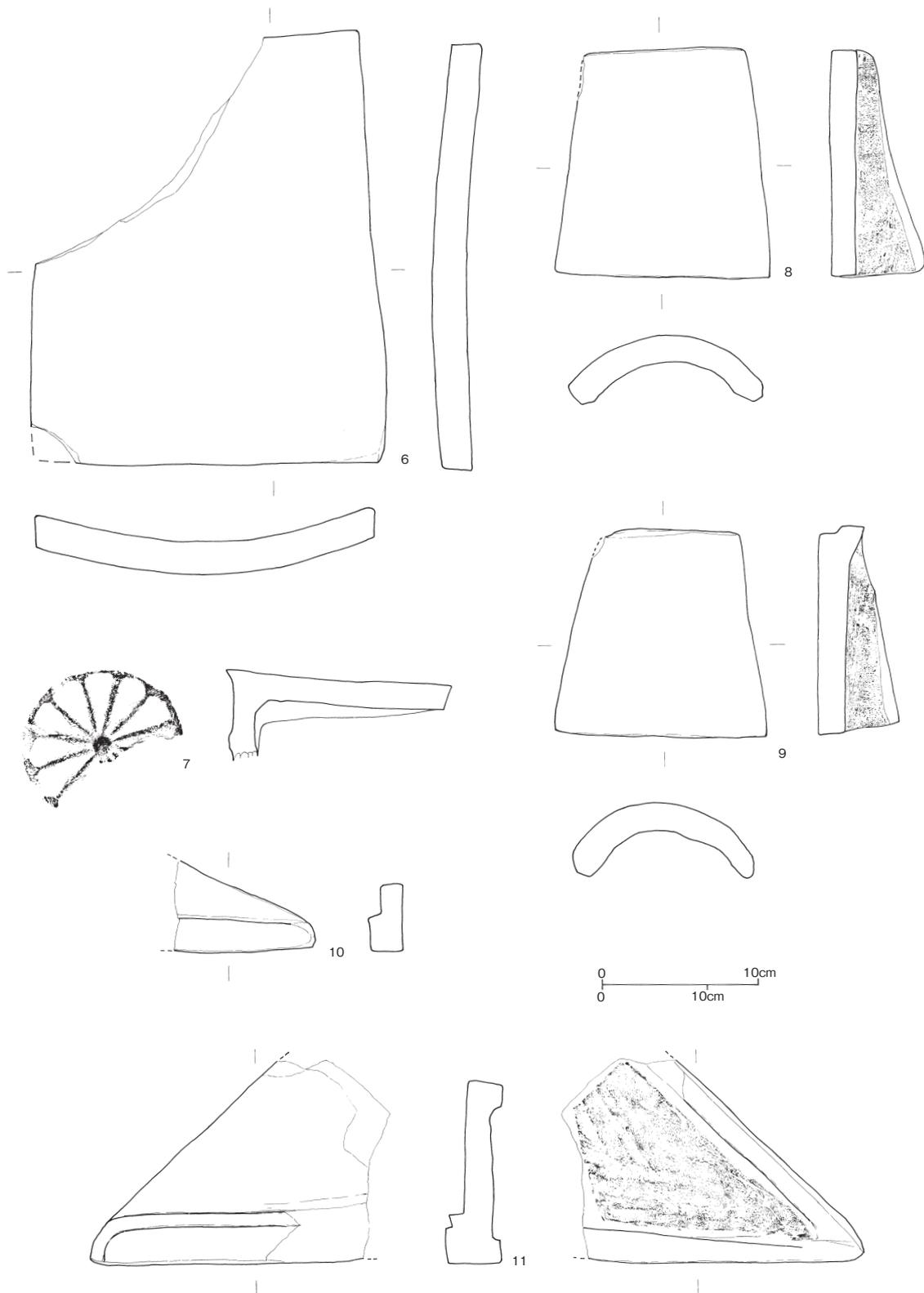
(2) その他 (第41図)

調査区南半分の下層部分には土器細片を含む包含層 (第35図5層) があり、おそらく洪水層である。石器なども見られ、土器片はかなりの量あるが、いずれも摩滅、細片のため器形がわかるものはほとんど無い。遺構の検出につとめたが、明瞭なものはみられない。出土した遺物の内2点を図示している。

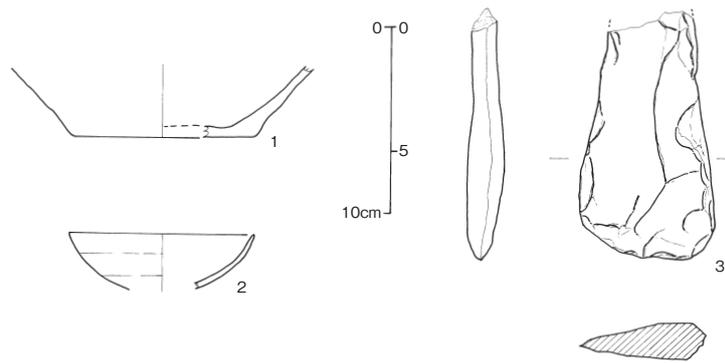
1は底部であるが摩滅のため調整は不明である。これら以外に高杯の脚部の破片があるため、これらは弥生土器と考えられる。3は打製石器でサヌカイト製の石斧である。これら以外に緑色片岩の石が数点出土し、いずれも製品・未製品ではない。



第 39 図 SK 35 出土遺物 (1) (S = 1 : 4)



第40図 SK 35 出土遺物 (2) (6~9…S = 1 : 4、10・11…S = 1 : 6)



第41図 F地区出土遺物(1・2…S=1:4、3…S=1:3)

5. G地区(第42・43図)

F地区の南に続く調査区で、北側は宅地、南側は碎石による駐車場でその間が耕作地である。確認調査のトレンチ(第5図T6)をこの耕作地に入れて、土壌を検出している。基本土層は造成土(1・3層)の下は、耕作土(2・4層)があり、その下はF地区でも検出した洪水による土器の包含層(7層)で、この下は遺物の見られない8層と続く。また、調査区の南側ではこの7層の上に中世の包含層(6層)が存在する。G地区の調査面積は約299㎡である。

(1) 中世～近世

柵7・8(SA7・8、第44図)

柵7・8は東西方向の杭列である。西壁断面に杭がささった状態で検出されている。柵7は杭穴7個、8は7個であるが、いずれも調査区外に続いている可能性がある。出土遺物は見られないが、土層より近世以降と推測される。

柵9(SA9、第44図)

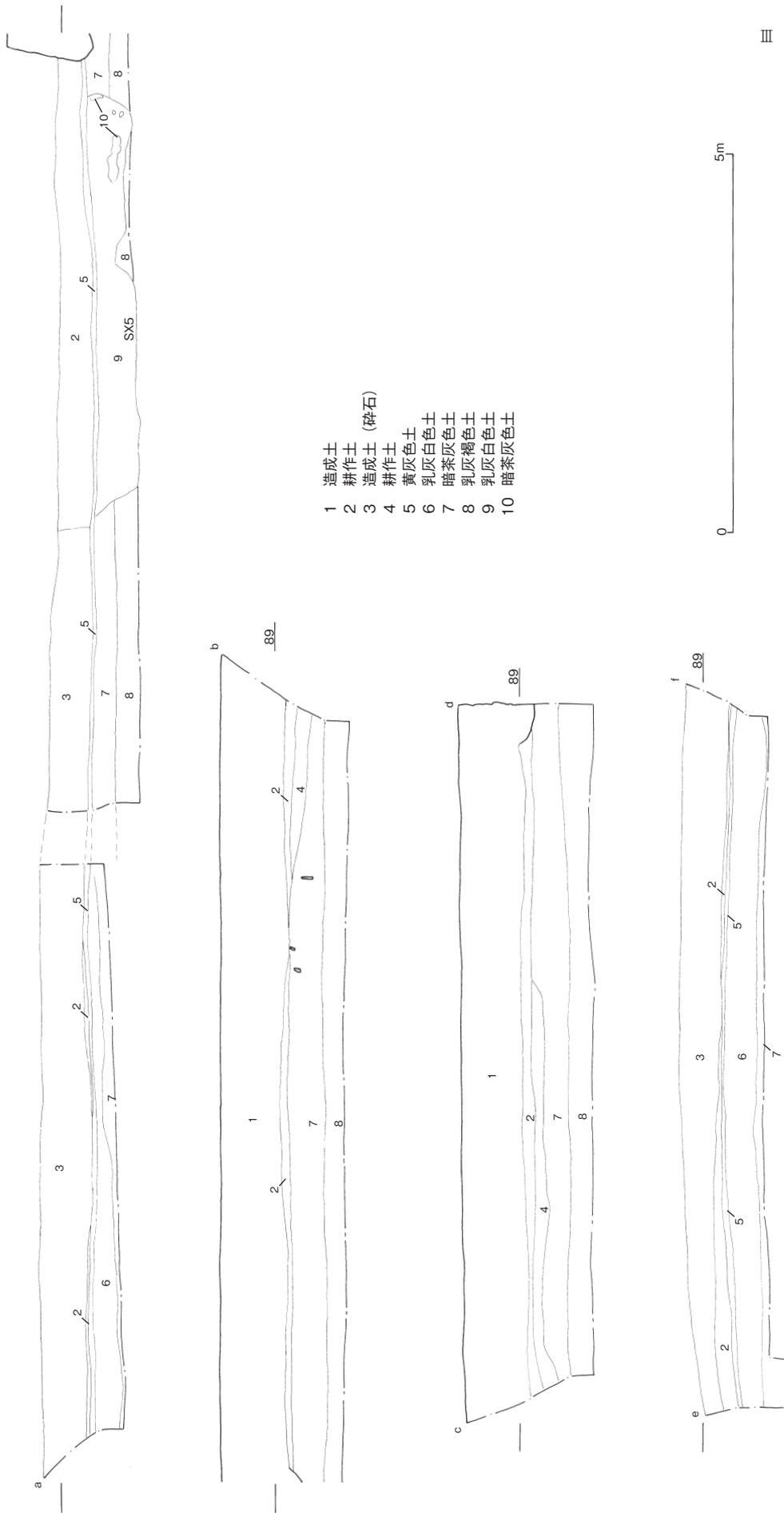
調査区の南西側で南北方向に6個の柱穴を検出した。柱間は1.2～2.3mでP1・2の間が他より狭い。調査区外の西側に対になる柱穴が存在し建物などになる可能性もある。内部に石が見られるものも3個(P1～3)あり、いずれも小さな石である。出土遺物が少ないため時期は明瞭でないが、埋土が粘土で不明遺構5と良く似ているため、近世の所産と考えられる。

溝25(SD25、第42図)

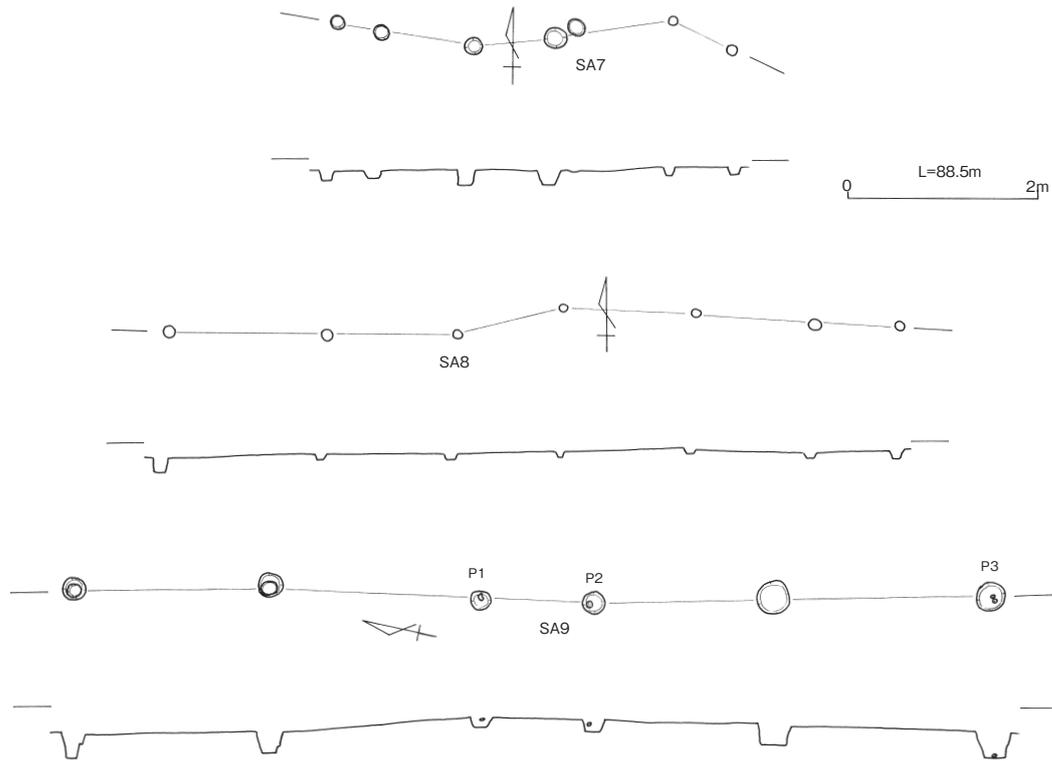
調査区の南で中世の包含層を切る形で検出した。埋土は1層で陶磁器が出土している。出土遺物は図示できないが、近世頃の所産である。

不明遺構5(SX5、第45・46図)

調査区の中央にかなり大きめの遺構がある。現状では長方形に近いと思われるが、良く見るとその中に複数のさらに小さな掘り込みがあり、一部では掘り残り部分もある。さらに西側は調査区外に続くため正確な規模は明瞭でないが、現状で最大長7.5m、幅6mを測る。西側の土層からこの掘り込みは、第43図の7層上面から掘り込まれており、断面北側は少しえぐれる形になっている箇所もあり、現状では大きく2箇所の掘り込みが観察される。埋土は粘土質の土で、ブロック状に下層の土が含まれる。



第43図 G地区土層図 (S = 1 : 80)



第44図 SA7～9平・断面図 (S = 1 : 80)

次に内部の細かい掘り込みについてみると、左下にA～Iの記号をつけた図がある。これは細かい掘り込みに仮に番号をつけたもので、必ずしも掘られた順番を表したものではない。これに基づくA区は底がほぼ平らである事からある程度面的に掘り下げその後、B・C区を部分的に深く掘っている。D区を掘り、部分的にE区を深く掘り下げる。このE区はちなみに粘土質の土が下層に続いている箇所である。F～I区を掘り、この内I区は他より深く掘っている。このように掘削面積は異なるが、ある程度単位ごとに掘り、一部分をさらに掘り下げる方法をとっているようである。ちなみにFやD区などの周囲に掘り残しがある事は単位ごとに掘り下げていった傍証である。

この遺構の性格であるが、少なくとも土を採取しているものと考えられるが、この周囲の土が粘土質と言え一部ではそうであるが、すべてではない。そのため、その部分を集中的にねらった遺構といえる。ただ、この周囲には粘土があまり見られなかったため、同様な遺構は周囲に見られない。また、埋土が粘土質である事は、故意に埋められたもので、これは耕作地の粘土の採掘後、瓦片を含む粘土質の土で埋めて耕作地にもどしたためと考えられる。

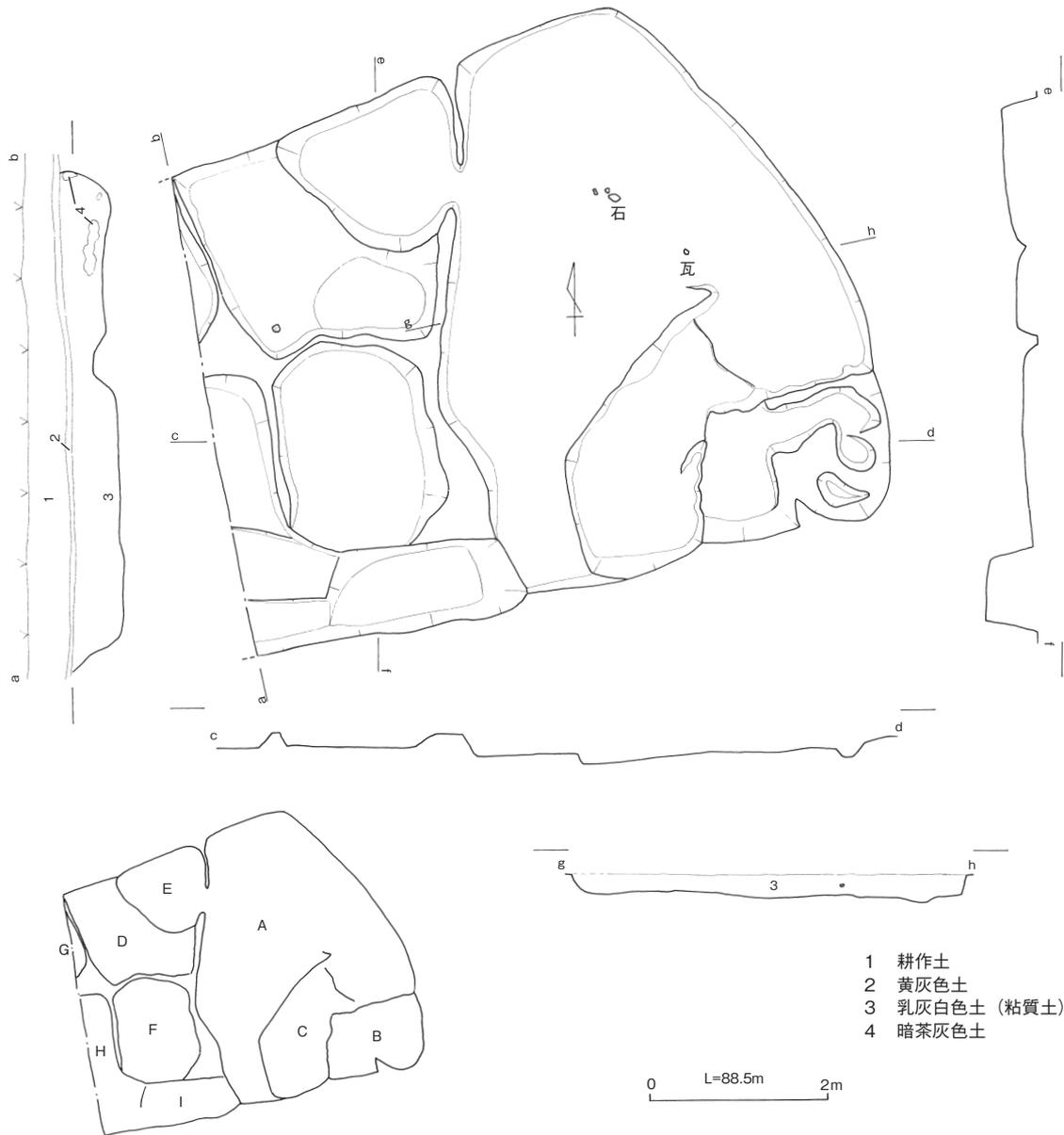
出土遺物として須恵器、勝間田焼、陶磁器、瓦などがある。その内3点を図示している。1は平瓦でA区から出土した。2・3は勝間田焼碗の底部である。これら出土遺物から近世の所産である。

その他遺構

その他調査区の南側で中世頃の落ち込みがあり、この付近のその他柱穴の多くは中世から近世にかけてのものであるが、現状では建物などにはならない。

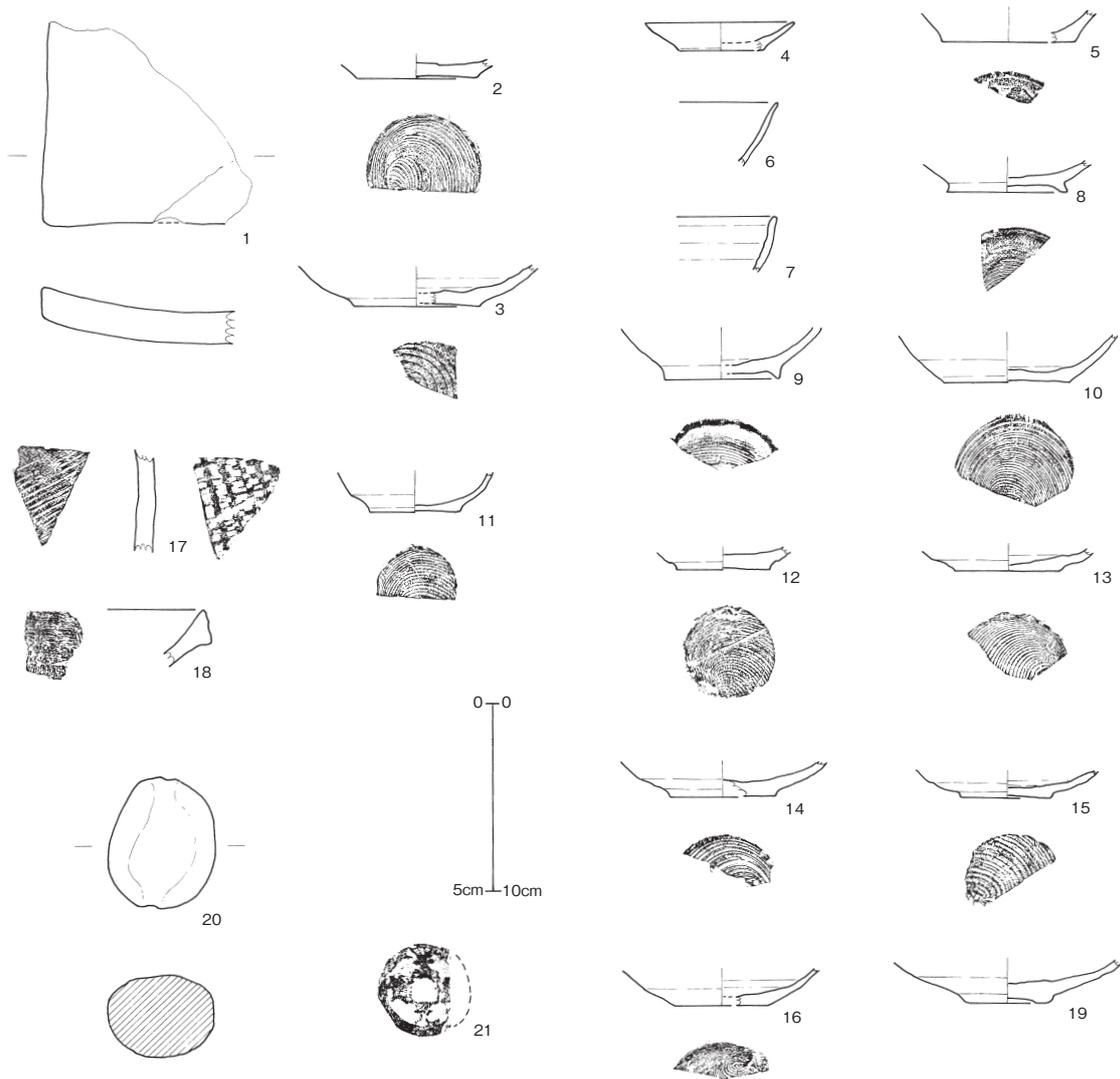
遺構に伴わない遺物として第46図に図示している。

4・5は土師器で4は小皿、5は杯である。6～17は勝間田焼で6～16は碗で8・9は低部に高台



第45図 S X 5 平・断面図 (S = 1 : 80、左下図… S = 1 : 160)

がめぐる。17は甕片で外面に格子目タタキ、内面にハケが見られる。18は備前焼の播鉢の口縁部、19は施釉陶器、20は長さ3.5cmの石を使用した石錘で両端にえぐりがあり火を受けている。21は銅銭で二文字目が欠損するが、天と元が読めるため「天聖元寶」(初铸1023年)と思われる。



第46图 G地区出土遺物 (1~19...S=1:4、20·21...S=1:2)

第2表 出土遺物一覧表

挿図番号 出土位置	器種	法量 (cm)			形態・調整	胎土・色調	備考
		口径	底径	器高			
第6図1 トレンチ3	須恵器 杯身		11		高台付き ヨコナデ、底部ヘラ削り	1mm以下の砂粒 淡青灰色	包含層
同2 トレンチ3	須恵器 甕				外面格子目タタキ後カキ目状ナデ 内面当て具痕	0.5mm以下の砂粒 淡青灰色	包含層
同3 トレンチ4	土師器 杯		7		表面摩滅 底部回転ヘラ切り	1mm以下の砂粒 暗赤褐色土	包含層
同4 トレンチ4	土師器 杯		6		底部回転ヘラ切り	1mm以下の砂粒 淡赤褐色	SA4-P2
同5 トレンチ4	土師器 小皿	7.6	5	1.5	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	1mm以下の砂粒 淡赤褐色	柱穴
同6 トレンチ4	土師器 小皿	7.6	5	1.5	ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	1mm以下の砂粒 淡灰褐色	柱穴
同7 トレンチ4	土師器 鉢				表面摩滅、口縁部	2mm以下の砂粒 乳赤褐色	包含層
同8 トレンチ4	瓦質土器 羽釜				ナデ	1mm以下の砂粒 淡黒灰色	包含層
同9 トレンチ4	瓦質土器 鍋	28			受け口状口縁 外面ナデ、内面ヨコハケ	0.5mm以下の砂粒 淡黒灰色	SA1-P3
同10 トレンチ4	備前焼 播鉢				口縁部、挿目6条	2mm以下の砂粒 乳青灰色	包含層
同11 トレンチ4	備前焼 播鉢				底部、挿目あり	0.5mm以下の砂粒 暗赤茶色土	包含層
同12 トレンチ5	勝間田焼 椀				口縁部、ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒 乳青灰色	包含層
同13 トレンチ6	勝間田焼 椀	14.6			口縁部(4分の1)、重ね焼跡 ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒 乳青灰色	包含層
同14 トレンチ6	施釉陶器 椀		4.6		底部に高台、高台無釉	精良 釉緑灰色	包含層
同15 トレンチ3	鉄製品 釘				一部欠損		包含層
同16 トレンチ3	鉄製品 釘				一部欠損		包含層
第13図1 SK1	弥生土器 壺	17.6			口縁部(5分の1)、3条沈線 ヨコナデ	2mm以下の砂粒 淡赤褐色	
同2 SK1	弥生土器 壺	15.2			口縁部(6分の1)、3条沈線 ヨコナデ	2mm以下の砂粒 淡赤褐色	
同3 SK1	弥生土器		5			2mm以下の砂粒 淡赤褐色	
第23図1 SB1-P1	土師器 杯				表面摩滅	1mm以下の砂粒 乳灰白色	
同2 SB2-P1	勝間田焼 椀		5.6		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.5mm以下の砂粒 暗灰白色	
同3 SB6-P1	瓦質土器 羽釜	26			外面ナデ、内面ナデ 外面煤が付着	0.5mm以下の砂粒 淡黒灰色	
同4 SK7	土師器 杯		6		ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	1mm以下の砂粒 乳赤褐色	
同5 SK7	瓦質土器 羽釜	22			口縁(8分の1)端部に沈線1条 ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒 淡黒灰色	
同6 SK7	勝間田焼 椀		5		ヨコナデ 底部回転糸切り	1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同7 SK7	勝間田焼 甕				外面格子目タタキ 内面ナデ	0.5mm以下の砂粒 乳赤褐色	
同8 SK14	備前焼 播鉢	28			口縁(5分の1)片口部分 内面挿り目8~9条	2mm以下の砂粒 暗赤茶色	
同9 SK15	須恵器 甕				外面平行タタキ後カキ目状ナデ 内面当て具痕	0.5mm以下の砂粒 乳青灰色	
同10 SK15	須恵器 甕 or 壺		9.6		底部、ナデ	1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同11 SK16	須恵器 杯身				底部、高台付き ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒 暗灰白色	
同12 SK16	陶器 小皿	8.7	6	1.5	底部回転糸切り ヨコナデ	0.1mm以下の砂粒 乳灰褐色	
同13 SK16	勝間田焼 椀	12.8	4.4	4.8	口縁(8分の1) ヨコナデ、底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳灰白色	
同14 SK16	備前焼 播鉢				口縁部、内面挿り目9条 ヨコナデ	3mm以下の砂粒 暗赤茶色	
同15 SK23	須恵器 杯身				底部、高台付き ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒 暗青灰色	
同16 SK28	勝間田焼 椀				口縁部 ヨコナデ	0.1mm以下の砂粒 暗青灰色	
同17 SK28	勝間田焼 椀				ヨコナデ 底部回転糸切り	0.5mm以下の砂粒 乳青灰色	

同18 SD 7	勝間田焼 椀				口縁部、重ね焼 ヨコナデ	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同19 SD 7	勝間田焼 椀		5.5		ヨコナデ 底部回転糸切り	1mm以下の砂粒 乳灰白色	
同20 SD12	勝間田焼 椀		6		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.5mm以下の砂粒 暗灰白色	
同21 SX2	須恵器 甕				外面平行タタキ後ナデ 内面当て具痕	0.5mm以下の砂粒 乳青灰色	
同22 SX2	須恵器 甕				外面格子目タタキ後ナデ 内面当て具痕	1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同23 SX2	須恵器 壺				口縁部、ヨコナデ	1mm以下の砂粒 乳灰白色	
同24 SX2	須恵器 壺		9		底部、ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒 乳青灰色	
同25 SX2	瓦質土器 鉢				口縁部(片口部分) 外面ナデ、内面ハケ	2mm以下の砂粒 乳灰白色	
同26 SX2	勝間田焼 椀		6		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同27 P 2	土師器 小皿	8	4.5	2.1	ヨコナデ 底部回転ヘラきり	1mm以下の砂粒 淡赤褐色	完形
同28 P 3	土師器 小皿	7.6	3	1	口縁(3分の1)、ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	1mm以下の砂粒 淡赤褐色	
同29 P 4	勝間田焼 甕				口縁部 胴部外面格子目タタキ	0.1mm以下の砂粒 乳灰白色	
同30 包含層	須恵器 杯身		6		底部、高台付き ヨコナデ	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同31 包含層	弥生土器 壺 or 甕		5.6		底部	1mm以下の砂粒 乳赤褐色	土師器?
同32 包含層	瓦質土器 羽釜				口縁部 ヨコナデ	1mm以下の砂粒 乳黒灰色	
同33 包含層	瓦質土器 羽釜				口縁部 ヨコナデ	1mm以下の砂粒 乳黒灰色	
同34 包含層	勝間田焼 甕				外面格子目タタキ 内面ナデ	0.1mm以下の砂粒 暗青灰色	
同35 P 1	石製品 石鍋	19.6			口縁部、外面煤が付着 鏝を作り出す、内面研磨	滑石製 乳黒灰色	
同36 SK15	鉄製品 釘				一部欠損		
同37 Sk15	鉄製品 釘				一部欠損		
同38 SD 8	鉄製品 釘				一部欠損		
同39 SD 8	鉄製品 釘						
同40 SD 8	鉄製品 釘						
同41 SD 8	鉄製品 釘				一部欠損		
同42 SD 12	鉄製品 釘				一部欠損		
同43 SD 12	鉄製品 釘				一部欠損		
同44 包含層	石製品 砥石				上下2面に使用痕		砂岩製
第27図 1 SK 30	瓦質土器				底部付近、表面摩滅	1mm以下の砂粒 淡黒灰色	転用
同 2 SK 30	瓦質土器 羽釜				口縁部 ヨコナデ	1mm以下の砂粒 淡黒灰色	
第30図 1 SK 31	勝間田焼 椀		7		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.5mm以下の砂粒 乳青灰色	
同 2 SK 33	施釉陶器 椀		4.5		底部に高台	精良 釉濃緑色	
同 3 SD 14	勝間田焼 壺				底部、ナデ	1mm以下の砂粒 淡青灰色	
同 4 SD 14	備前焼 播鉢				口縁部、播目7条 ヨコナデ	2mm以下の砂粒 暗赤茶色	
同 5 SD 14	備前焼 壺		12.8		底部、ナデ	1mm以下の砂粒 暗青灰色	
同 6 SD 14	施釉陶器 椀		5		底部に高台	精良 釉明白色	
同 7 SD 16	勝間田焼 甕				外面格子目タタキ 内面ナデ	1mm以下の砂粒 暗青灰色	
同 8 包含層	勝間田焼 椀		5		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	

同9 包含層	勝間田焼 椀		6		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同10 包含層	勝間田焼 椀		6		底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳灰白色	
同11 包含層	備前焼 灯明皿	9.6	5.5	1.2	ヨコナデ 底部糸切り後ヘラケズリ	0.1mm以下の砂粒 暗赤茶色	
同12 包含層	備前焼 播鉢				口縁部、播目8条 ヨコナデ	0.5mm以下の砂粒 乳青灰色	
同13 包含層	備前焼 播鉢				口縁部、播目7条 ヨコナデ	1mm以下の砂粒 暗青灰色	
第33図1 包含層	土師器		5		高台部分	1mm以下の砂粒 暗赤褐色	
同2 SD18	勝間田焼 椀				口縁部、重ね焼痕 ヨコナデ	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同3 包含層	勝間田焼 椀				口縁部 ヨコナデ	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同4 包含層	勝間田焼 椀				口縁部 ヨコナデ	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同5 包含層	勝間田焼 椀				ヨコナデ 底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同6 包含層	勝間田焼 椀				ヨコナデ 底部回転糸切り	0.5mm以下の砂粒 乳青灰色	
第39図1 SK35	瓦 軒丸瓦	瓦当 14.5		長さ 29.8	左巻き三巴、珠文数13 釘穴	2mm以下の砂粒 乳黒灰色	完形
同2 SK35	瓦 丸瓦			28.3		2mm以下の砂粒 暗灰白色	
同3 SK35	瓦 丸瓦			29.3		2mm以下の砂粒 乳黒灰色～暗灰白色	
同4 SK35	瓦 丸瓦			29.3		3mm以下の砂粒 乳黒灰色～暗灰白色	
同5 SK35	瓦 丸瓦			28	歪む	3mm以下の砂粒 乳黒灰色	
第40図6 SK35	瓦 平瓦			28		2mm以下の砂粒 暗灰白色	
同7 SK35	瓦 軒込瓦					2mm以下の砂粒 乳黒灰色	菊丸
同8 SK35	瓦 軒込瓦					3mm以下の砂粒 暗灰白色	輪違い
同9 SK35	瓦 軒込瓦					3mm以下の砂粒 乳黒灰色～暗灰白色	輪違い
同10 SK35	瓦 鬼瓦					2mm以下の砂粒 乳黒灰色～暗灰白色	破片
同11 SK35	瓦 鬼瓦					3mm以下の砂粒 乳黒灰色	破片
第41図1 包含層	弥生土器 壺or甕		9.4		底部	2mm以下の砂粒 暗赤褐色	
同2 包含層	備前焼 小皿	9.8				0.1mm以下の砂粒 暗赤茶色	
同3 包含層	石製品 斧					サヌカイト製	
第46図1 SX5	瓦 平瓦					1mm以下の砂粒 淡黒灰色	
同2 SX5	勝間田焼 椀		6.5		ヨコナデ 底部回転糸切り	1mm以下の砂粒 暗灰白色	
同3 SX5	勝間田焼 椀		6.6		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.5mm以下の砂粒 乳青灰色	
同4 包含層	土師器 小皿	8	4.6	1.5	表面摩滅	0.5mm以下の砂粒 暗茶褐色	
同5 包含層	土師器 杯		7		ヨコナデ 底部回転ヘラ切り	0.5mm以下の砂粒 暗茶褐色	
同6 包含層	勝間田焼 椀				口縁部、重ね焼痕 ヨコナデ	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同7 包含層	勝間田焼 椀				口縁部、重ね焼痕 ヨコナデ	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同8 包含層	勝間田焼 椀		6.4		高台付き底部、ヨコナデ 底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同9 包含層	勝間田焼 椀		6		高台付き底部、ヨコナデ 底部回転糸切り	1mm以下の砂粒 暗青灰色	
同10 包含層	勝間田焼 椀		6.5		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同11 包含層	勝間田焼 椀		4.6		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同12 包含層	勝間田焼 椀		5		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳灰白色	

同13 包含層	勝間田焼 碗		5.6		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳灰白色	
同14 包含層	勝間田焼 碗		5.6		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同15 包含層	勝間田焼 碗		4.8		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同16 包含層	勝間田焼 碗		5		ヨコナデ 底部回転糸切り	0.1mm以下の砂粒 乳青灰色	
同17 包含層	勝間田焼 甕				外面格子目タタキ 内面ハケ	1mm以下の砂粒 暗青灰色	
同18 包含層	備前焼 播鉢				口縁部、播目あり ヨコナデ	1mm以下の砂粒 暗青灰色	
同19 包含層	施釉陶器 碗		4.6		高台無釉	精良 釉暗緑灰色	
同20 包含層	石製品 石錘			3.5	火を受けている 上下に抉り		
同21 包含層	銅製品 銅銭				一部欠損		天聖元寶

IV 自然科学的分析

林田池ノ内遺跡出土の瓦および粘土採掘坑採取粘土の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

1. 分析目的

林田池ノ内遺跡の調査では、津山城に供給されたと考えられる瓦生産に関係する粘土採掘坑が確認され、また瓦も出土した。この分析では同遺跡出土の瓦と粘土の理化学的な胎土分析を実施し、生産地データの蓄積をおこなうとともに、消費地である津山城出土の瓦とも比較することで、当時の「瓦」生産・流通について検討した。また、以前報告した津山城の排水施設と尾張藩上屋敷遺跡（東京都新宿区谷本村町）出土の「〇作」刻印瓦と胎土を比較することで、この瓦の生産地についても検討した。なお、この「〇作」瓦は以前の分析で津山城と尾張藩上屋敷遺跡で胎土的が異なっており、それぞれの地域で製作されたと推定されている^{註1}。

2. 分析試料

分析に供した試料は、表1に示した林田池ノ内遺跡出土の平瓦27点、津山城本丸出土平瓦20点、林田池ノ内遺跡瓦粘土採掘坑の粘土2種類の8点である。この粘土は一つの粘土塊から任意に4カ所サンプリングしたものを使用した。

3. 分析結果

理化学的な分析方法は、蛍光X線分析法で実施した。この方法は、試料に含まれる成分(元素)量を測定するもので、その成分量の違いから生産地を推定する方法である。また、分析装置の特徴は、分析試料の作製が簡単で、測定も短時間のため、多量の試料を分析するのに有効である。しかし、測定試料は均質性が求められることから、分析試料を2gほど粉末にする必要があり、一部破壊分析である。

測定装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(セイコーインスツルメンツ製SEA2010L)を使用し、Si・Ti・Al・Fe・Mn・Mg・Ca・Na・K・P・Rb・Sr・Zrの13元素を測定した。表1の出土試料分析値一覧表からTi(チタン)、Ca(カルシウム)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)の各元素に顕著な違いがみられる。そこで、これらの元素のXY散布図を作成し、胎土の比較を行った。

第1・2図は、池ノ内遺跡内から出土した瓦と粘土採掘坑の粘土および包含層粘土の比較を実施した。その結果、第1図のTi量で瓦と粘土が異なるようであるが、それ以外の元素では胎土に差はなかった。

第3図では、池ノ内遺跡(瓦・粘土)と津山城出土瓦の比較を行った。すると、池ノ内と津山城の瓦の間で、Ti量が異なっていた。また、津山城出土の瓦にも複数の胎土があり、No.20は林田池ノ内の瓦と、No.13は単独でそれぞれ分布した。そして、津山城のほとんどの瓦が池ノ内遺跡の地山粘土と胎土が類似していた。

第4図では、池ノ内、津山城、「〇作」瓦の胎土を比較した。その結果、津山城出土「〇作」瓦は津山城・池ノ内とも胎土が異なっていた。しかし、津山城No.13の瓦は「〇作」瓦と胎土が類似していた。

4. まとめ

林田池ノ内遺跡、津山城、「〇作」瓦の各資料を比較したところ、以下のことが明らかになった。

(1) 池ノ内遺跡の瓦と粘土の比較では、非常に類似した胎土であったが、完全に一致しなかった。これは粘土採掘が広範囲であるため一致しなかった可能性がある。粘土のサンプリングを増やして再検討する必要がある。

(2) 津山城のほとんどの瓦と池ノ内の地山粘土とが類似し、津山城出土の瓦胎土が3つの胎土に分類できた。それは、①池ノ内出土の瓦と同じもの、②池ノ内の地山粘土と同じもの、③津山城出土「〇作」瓦と同じものである。

(3) 〇作瓦との胎土比較では、池ノ内の瓦・粘土とも胎土が異なっていた。

以上のように、津山城から出土する瓦には、少なくとも3種類の胎土の瓦があることが、この分析で推定された。また、文献などから林田池ノ内遺跡以外に瓦生産地があることがわかっており^{註2}、今後生産地のデータを蓄積し再検討する必要がある。

この分析の機会をあたえていただいた、津山市教育委員会の職員の方々には種々のご教示をいただきました。末筆ではありますが、記して感謝いたします。

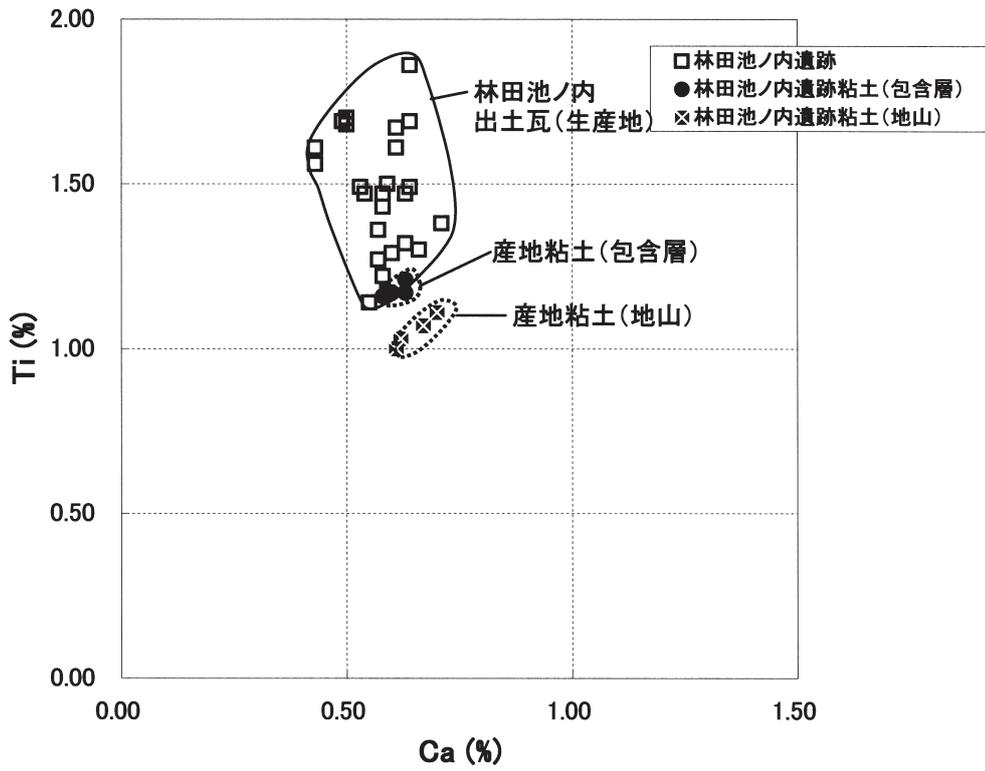
註

1 行田裕美・白石 純「史跡津山城出土の「作」刻印瓦をめぐって」『東京考古』第21号 東京考古談話会2003

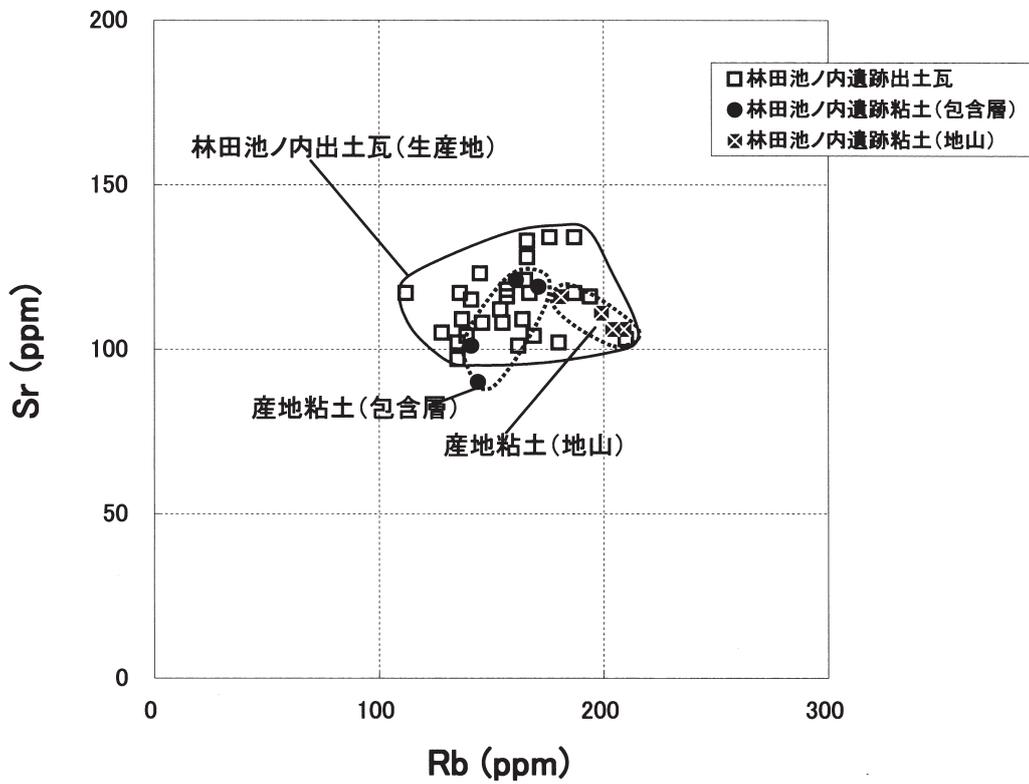
2 行田裕美氏よりご教示頂いた。津山市日上で粘土を採掘していた記載がある。

表1 林田池ノ内遺跡出土瓦・粘土の分析一覧表 (%) ただし、Rb・Sr・Zr は ppm.

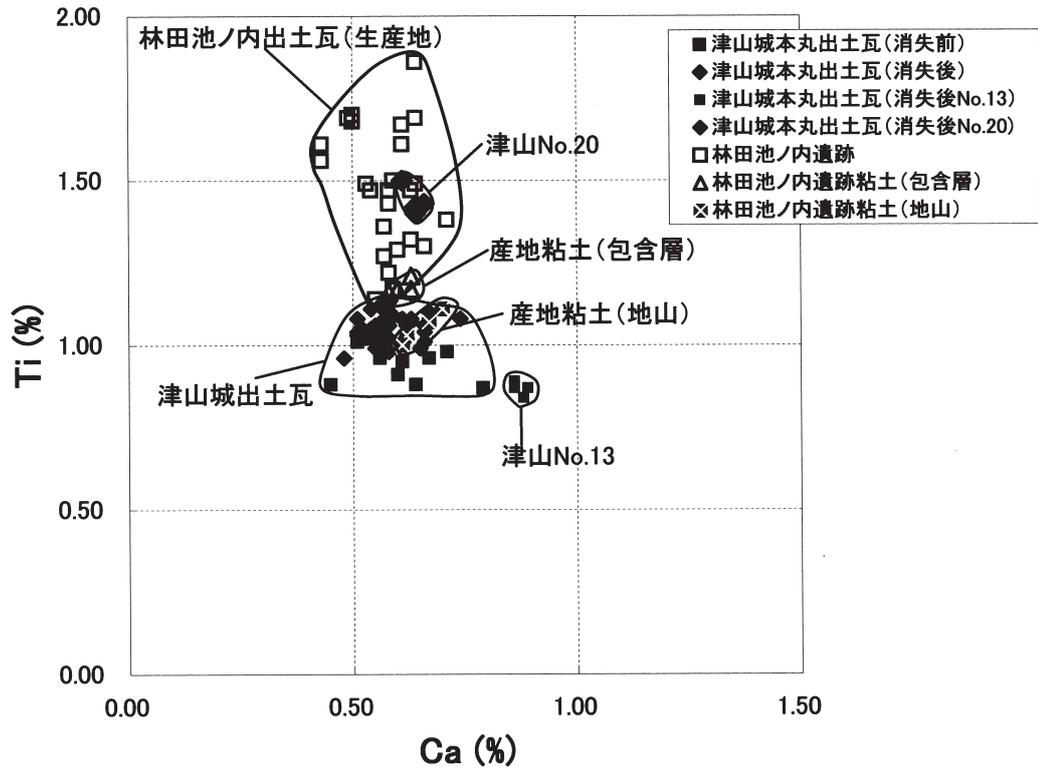
試料番号	遺構名	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	SK35	瓦	68.20	1.36	16.94	6.55	0.12	1.90	0.57	2.59	1.59	0.04	167	117	324
2	〃	瓦	65.41	1.22	17.56	8.93	0.12	1.86	0.58	2.33	1.70	0.08	180	102	353
3	〃	瓦	68.30	1.47	16.62	6.26	0.07	1.98	0.54	3.07	1.46	0.07	135	102	351
4	〃	瓦	69.26	1.61	16.66	6.38	0.09	1.73	0.61	1.96	1.47	0.08	141	115	342
5	〃	瓦	66.98	1.49	16.99	7.21	0.11	1.92	0.64	2.66	1.64	0.06	187	117	356
6	〃	瓦	70.93	1.27	15.60	5.40	0.10	1.84	0.57	2.61	1.48	0.05	135	97	347
7	〃	瓦	68.73	1.47	16.77	6.65	0.10	1.91	0.58	1.89	1.69	0.07	157	116	375
8	〃	瓦	67.14	1.14	17.28	7.54	0.10	1.89	0.55	2.39	1.69	0.09	164	109	356
9	〃	瓦	70.52	1.30	15.34	5.60	0.11	1.87	0.66	2.66	1.71	0.10	145	123	355
10	〃	瓦	68.16	1.17	17.01	7.37	0.12	1.78	0.59	1.69	1.84	0.09	210	103	356
11	〃	瓦	65.42	1.86	17.74	7.52	0.15	2.12	0.64	2.71	1.40	0.20	166	133	333
12	〃	瓦	64.38	2.06	19.96	7.27	0.10	1.98	0.48	2.20	1.31	0.09	112	117	374
13	〃	瓦	64.57	1.69	18.09	7.22	0.13	2.28	0.64	3.78	1.40	0.07	165	121	347
14	〃	瓦	68.14	1.67	17.04	6.23	0.10	1.99	0.61	2.50	1.48	0.09	139	104	357
15	〃	瓦	65.28	1.50	18.38	7.16	0.11	2.11	0.59	2.92	1.58	0.12	155	108	355
16	〃	瓦	65.95	1.68	18.51	6.61	0.06	2.13	0.50	2.75	1.57	0.10	169	104	341
17	〃	瓦	68.53	1.36	16.65	6.40	0.10	1.91	0.57	2.63	1.56	0.12	162	101	341
18	〃	瓦	69.43	1.29	16.24	7.01	0.13	1.82	0.60	1.65	1.57	0.09	136	117	384
19	〃	瓦	65.72	1.69	18.71	7.67	0.09	1.95	0.49	1.86	1.62	0.07	146	108	346
20	〃	瓦	65.15	1.61	18.91	7.46	0.08	2.04	0.43	2.58	1.51	0.06	154	112	358
21	〃	瓦	69.74	1.43	16.32	5.97	0.11	1.85	0.58	2.35	1.42	0.10	128	105	349
22	〃	瓦	66.54	1.56	18.76	7.28	0.10	1.91	0.43	1.66	1.46	0.10	137	109	360
23	〃	瓦	69.67	1.38	15.23	5.98	0.10	1.93	0.71	3.07	1.67	0.12	194	116	367
24	〃	瓦	68.47	1.32	15.92	5.43	0.09	2.28	0.63	3.97	1.59	0.13	157	118	328
25	〃	瓦	69.50	1.47	16.17	5.90	0.09	2.00	0.63	2.34	1.59	0.15	187	134	379
26	〃	瓦	66.49	1.49	17.70	7.12	0.11	1.88	0.53	2.57	1.68	0.18	166	128	340
27	〃	瓦	65.83	1.70	18.95	6.58	0.06	1.97	0.50	2.42	1.71	0.10	176	134	367
28-1	包含層	粘土	68.80	1.17	16.73	6.37	0.11	1.85	0.63	2.27	1.76	0.11	171	119	335
28-2	包含層	粘土	67.29	1.17	16.79	8.01	0.12	1.91	0.60	2.16	1.68	0.12	161	121	374
28-3	包含層	粘土	67.43	1.16	16.60	7.12	0.10	1.88	0.58	3.19	1.65	0.13	144	90	334
28-4	包含層	粘土	69.06	1.21	16.74	5.97	0.10	1.94	0.63	2.36	1.72	0.10	141	101	343
29-1	地山	粘土	67.51	1.03	17.93	6.59	0.12	1.85	0.62	2.03	2.03	0.13	181	116	344
29-2	地山	粘土	66.64	1.11	18.18	6.11	0.10	2.01	0.70	2.92	1.97	0.11	209	106	305
29-3	地山	粘土	67.43	1.00	18.23	5.48	0.11	1.83	0.61	2.47	2.05	0.16	204	106	346
29-4	地山	粘土	67.48	1.07	18.43	5.69	0.08	1.95	0.67	2.29	2.08	0.10	199	111	336



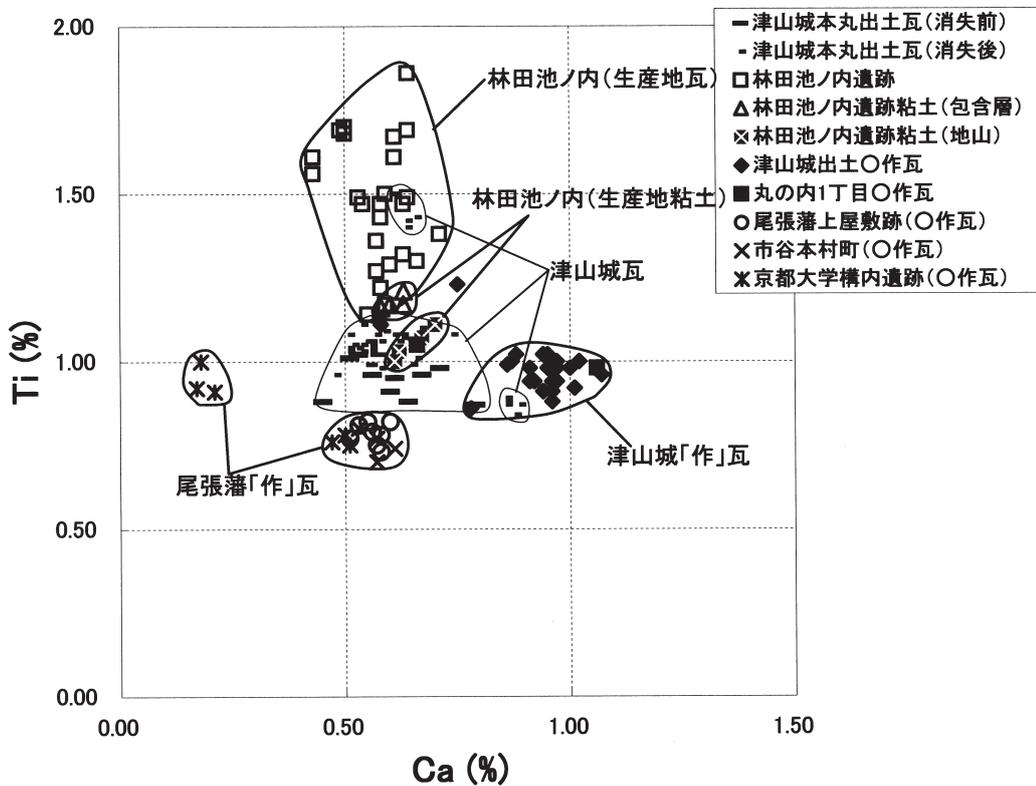
第1図 林田池ノ内遺跡出土の瓦と粘土の比較 (Ca - Ti 散布図)



第2図 瓦生産地出土瓦および粘土との比較 (Rb - Sr 散布図)



第3図 津山城本丸出土瓦と瓦生産地出土瓦および粘土との比較 (Ca - Ti 散布図)



第4図 津山城跡・尾張藩上屋敷跡「作」刻印瓦と生産地瓦・粘土との比較 (Ca - Ti 散布図)

V まとめ

林田池ノ内遺跡は弥生時代から近世の遺物が出土するが遺構が確認できたのは弥生時代と中世から近世である。古墳時代や古代の須恵器が出土するが、いずれも破片で遺構は見られない。特に、断片的ではあるが古代の須恵器杯身が出土する事から、周辺に遺構が存在する可能性は大きい。今後の調査に期待したい。以下時代ごとにまとめる事とする。

1. 弥生時代の遺構・遺物について

弥生時代の遺構としては、A地区の土壇2基、溝1条があり、その他遺物としてはF・G地区などで土器・石器などが出土するが、明瞭な遺構を伴わない。A地区周辺には住居などが存在する可能性は大きいが、この丘陵部は中世以降に削平されている可能性が考えられる。またF地区の土器は細片となっており、器形を知りえるものはほとんど無く、おそらく洪水により周辺部から運ばれて堆積したものである。

出土遺物の内図示できたのは数点である。その内土壇1出土の壺は長頸壺で、この特徴から後期前半頃の所産である。F地区などで出土する土器も高杯片があり後期頃の所産と推測される。

2. 中世の遺構・遺物について

(出土遺物について)

中世の出土遺物として土師器、勝間田焼、備前焼、瓦質土器、石鍋、鉄釘、古銭などがある。その中で時期を検討してみたい。

(土師器) 杯・小皿・鉢などがあるが、小皿以外は全形がわかるものはない。杯・小皿の底部の切り離しはすべて回転ヘラ切りである。小皿の口径は7.6～8cm、器高は1～2.1cmである。これら土師器からの時期細分は、現状では困難である。

(勝間田焼) 椀、甕などの器種が見られるが、小皿は図示できるものが無く、確認した中ではほとんど見られない。椀についても、底部と口縁部のみが多く、全形がわかる資料が少ない。編年研究では窯資料によるもの^{註1}、消費地での一括資料によるもの^{註2}などがあり、最近の研究では窯資料から3期10小期にわけた編年がある^{註3}。これに従えば本例は底部に高台がめぐむものがあり、これは古い時期の特徴であるが、底部と胴部との境がないものもあり、これは逆に新しい特徴である。甕の胴部も格子目タタキがほとんどで、これに統一されるのはⅡ期以降である。いずれにせよ、細かな時期区分は本例ではできないが、勝間田焼の生産が、11世紀中頃から13世紀とされているので、勝間田焼が使用されたのはこの時期ないしは13世紀以降である。

(備前焼) 播鉢、小皿などがある。備前焼の研究ではⅠからⅤ期にわたる編年^{註4}が知られており、最近では播鉢から中世を6期、近世を5期の11期にわたる編年^{註5}がある。本出土例もほとんどが播鉢のためこの後者によると、D区の出土例に3a期に遡るものが見られるが、他は3b期で一番新しいのはA区SK14の4a期である。これらの時期は、14世紀後半から15世紀前半頃である。

(瓦質土器) 鍋と羽釜などがある。鍋は口縁部が受け口を呈するもので、類例は津山市美作国府跡^{註6}、同正善庵遺跡^{註7}、奥津町久田原遺跡^{註8}などにあり、この形態のものは、摂津山城系鍋で山陰地方に見られ事から北回りに入ってきたとされる^{註9}。また、岡山県の鍋・釜の研究では瓦・鍋2-a類に分類

され概ね 14 世紀代の所産とされる^{註10}。また、羽釜は鏝がめぐるもので、先の分類では瓦・釜 1 - a 類に分類され、この出現も 14 世紀とされる。そのため本遺跡出土の瓦質鍋及び羽釜はほぼ 14 世紀代の所産と推測される。

(石鍋) A 地区で 1 点出土している。口縁部の破片であるが外面には煤が付着し、内面は磨かれておりかなりの使用痕跡がある。中世を代表する遺物であるが、津山市内では大田茶屋遺跡^{註11}に出土例があり 2 例目である。岡山県での出土例は岡山市百間川原尾島遺跡で集成されており、それによれば 9 遺跡 17 点以上である^{註12}。その後、岡山市鹿田遺跡の報告で考察され、その際の出土数は 11 遺跡 20 数点である^{註13}。それ以降県内の類例では、総社市殿砂遺跡^{註14}、岡山市吉野口遺跡^{註15}などにあり、中世の遺跡を掘れば出土すると言われるまでのポピュラーな遺物であるが、出土遺跡を見れば県南部に集中し、点数を見れば、10 数点出土する遺跡もあるが数点の場合が多く、やはり特殊な遺物といえよう。周辺県外では広島県福山市草戸千軒町遺跡^{註16}で約 200 個体程出土しており、出土量ははずば抜けている。

石鍋の研究では先の草戸千軒町遺跡の出土例からすでに編年案が示されており、それによると III - c 類^{註17}にほぼ分類されるようで、時期でいえば 14 世紀前半頃となる。

石鍋の産地は長崎県西彼杵半島一帯、福岡県大牟田市、山口県宇部市などで発見されており、西彼杵半島が最大の産地である。本例も肉眼観察からこの西彼杵半島産と思われる^{註18}。石鍋の分布は関東地方から沖縄県までの広い範囲が知られており、瀬戸内海が主な流通経路とされている。本例も瀬戸内海から吉井川経由などで内陸部まで流通したものと推測される。

以上から本遺跡の時期は、勝間田焼の時期が明瞭とはいえず、他の土器と比べると時期が古いようにも思えるが、他の土器などの特徴から 14 世紀から 15 世紀頃の間で、その中で建物群の時期は 14 世紀代を中心とした時期が推測される。

(遺構について)

中世の遺構は A 地区周辺に集中する (第 47 図)。A 地区では、建物跡、柵、土壇、溝などがあり集落域の中心と言える。その他は C・D・E 地区の土壇などがあり、これら地区には建物跡は見られない。そのため、建物の広がりには東側では D 地区までの間に限られ、可能性として西側に広がっていた事も考えられるが、地形的には西側に傾斜して低くなっているため、建物群が存在した可能性は低い。となると、今回検出した建物群はある程度のまとまりであると言える。建物跡は 7 棟あり、その内全容がわかるのは 2 棟だけで 2 × 2 間 (床面積 18 m²) と 2 × 3 間 (床面積 25 m²) である。前者は建物跡 4 だけで、他の多くも後者と同規格同規模と推測される。また建物の多くが重複しているため、これらの同時並存はありえない。出土遺物から細かな時期区分ができないため、建物の配置等から構成を考えてみたい。建物を分類すると南北棟 (建物跡 3・4) と東西棟 (同 1～2、5～7) とがあり、仮に建物配置を考えると、

建物跡 1 or 2 と 5 (2 棟、東西棟)

建物跡 1 or 2 と 6 or 7 (2 棟、東西棟)

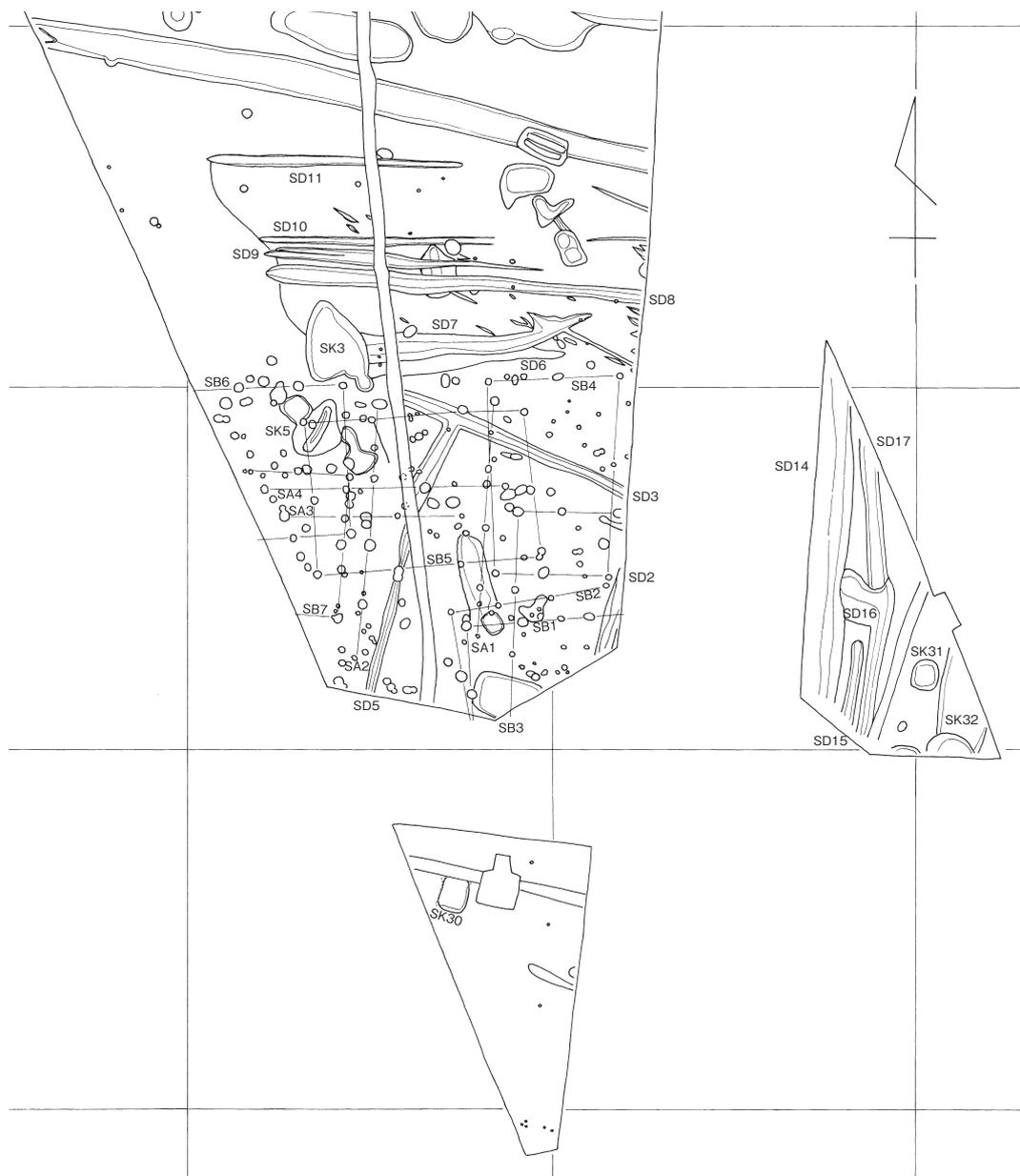
建物跡 1 と 4 と 6 or 7 (3 棟、東西棟、南北棟)

建物跡 3 or 4 と 6 or 7 (2 棟、東西棟、南北棟)

の場合などが考えられる。この場合いずれも 2～3 棟の構成で、東西棟のみか南北・東西棟の構成である。建物の面積はほとんどが 25 m²以下と推測されることから、大小建物の構成というわけではないようである。

周辺の類例では津山市岡道東遺跡^{註19}があり、7棟の建物が検出され（同時並存は3～4棟か）、床面積は8㎡が1棟、18㎡が1棟、28～31㎡が3棟、38～50㎡が2棟に分類できる。明らかに大小の建物があり、その構成を見れば中央を囲むようにコの字形に配置されているようである。また、津山市二宮遺跡の岡の札地区^{註20}では溝に囲まれた建物14棟が検出され、大小の建物が存在し館跡とされる。本例も西側が調査されていないため、推測の域をでないが、前者同様な配置を意識していた可能性は考えられるが、その場合いずれも同規模の建物だけの構成であった事になる。また、溝7や14などが区画の溝の可能性もあるが、現時点では結論はでない。いずれにせよ、建物の規模がほぼ同一であった可能性は高く、そこに集落自身の時代的あるいは性格的な違いが看取される。

次に遺跡の性格について、若干考えてみたい。本遺跡周辺の切り絵図を元に小字を示したのが第48図である。本遺跡名は中世遺構の中心部分（A地区）の小字から「池ノ内」であるが、この地点は切



第47図 林田池ノ内遺跡中世主要遺構

り絵図では「樋之本」である。これは、切り絵図が概略を示しているためと考えられ、細かく見れば「樋之本」の中に「池ノ内」が混在する。

さて周辺の小字名で、「樋之本」以外に「光善寺」「寺ノ下」「上市場」などがある。この中で「光善寺」「寺ノ下」がある事から寺院が存在した可能性が大きい。この「光善寺」は2箇所あり北側は丘陵、南は低地である。光善寺については現存せず、文献にもほとんどでてこない。例えば作陽誌^{註21}には「真言宗の寺跡なりと云ふ廃亡の年歴不知」とある。地元の話では、A地区北の丘陵部の「光善寺」にあった、その東側の「大山」の平らな地点にあったと言う言い伝えが残っているが、現在その痕跡は明瞭でない。可能性として前者が考えられる。また、本遺跡の東200mに現在真言宗の高福寺というお寺がある(第48図■)。このお寺は元々隣の川崎村にあり、これがこの地に移ったのが、貞享二年^{註22}(1685年)頃とされ、近くに光善寺がある場所にあえて別の寺を移すことは考えにくく、この時にすでに光善寺自体は存在していなかったと考えられる。そして光善寺がかつて存在していた付近に同じ真言宗の高福寺を移したと考えれば、光善寺が近世以前に、今回の建物群が確認された背後の丘陵上に存在していた可能性が大きい。ただ、その寺についても現地地形を見る限りでは、それほど大規模なものではなさそうで、丘陵を利用したもののようなものである。そのような観点から推測すれば、今回の建物群がほぼ同規模で構成されていることは、大小建物群で構成される先述の例とは異なり、もしかすると門前町的な建物の一部であった可能性も考えられる。

次に当時の道路についても若干考えてみたい。現在の出雲街道は近世になり整備されたもので第48図の下側に東西方向に通っている。それより以前はちょうど本遺跡の辺りを通っていたものと考えられている。古代の官道については本遺跡周辺の峠である「山根超え」を通り、国府へ至るルートがすでに示されている^{註23}。ほぼ、このルートで間違いないと思われるが、もう少し細かくみていきたい。切り絵図を見ると、光善寺の下に「上市場」がありこの付近を調査したが、建物等中世に遡るものは発見されていないし、近世の建物も明瞭でなく、G地区南端に南北方向の柵(建物?)を確認したにすぎない。そのためこの地名は近世以降のものを指していると推測される。この上市場を通る東西方向のルートと、峠越えの南北方向のルートも近世の町割に沿ったものである事から、近世以前のものとは考えにくい。となると、東側の「寺ノ下」と「五郎丸」・「光善寺」の境から、「樋之本」と「光善寺」境を通り「光善寺」の丘陵西側から「池ノ内」の中をぬけるルート(破線)があり、現在も人が通れる程度で存在する^{註24}。やや直線的ではないルートではあるが、小字境を通り峠へ向かう最短ルートで、地形的に見てこのルートが当時の道であった可能性が大きい。

また、近世以前に「戸川宿」「林田宿」が存在し、市が開かれていたことが知られている^{註25}。この両名のついた地名が現在もあるため「林田宿」の場所については、お城に近い出雲街道沿いの現在の林田町やその西側の片原町付近とする説^{註26}と、本遺跡東の古大隅神社から高福寺周辺とする説^{註27}とがある。前者の場合吉井川の氾濫源であり、中世の集落が存在した可能性は薄いものと推測され、後者であると吉井川の氾濫源の可能性は少なく、「林田宿」が先のルート上にある事になり、本遺跡周辺が市や門前町として栄えていて、今回出土した石鍋などの遺物が、このルートを経由して流通してきた可能性も大きい。

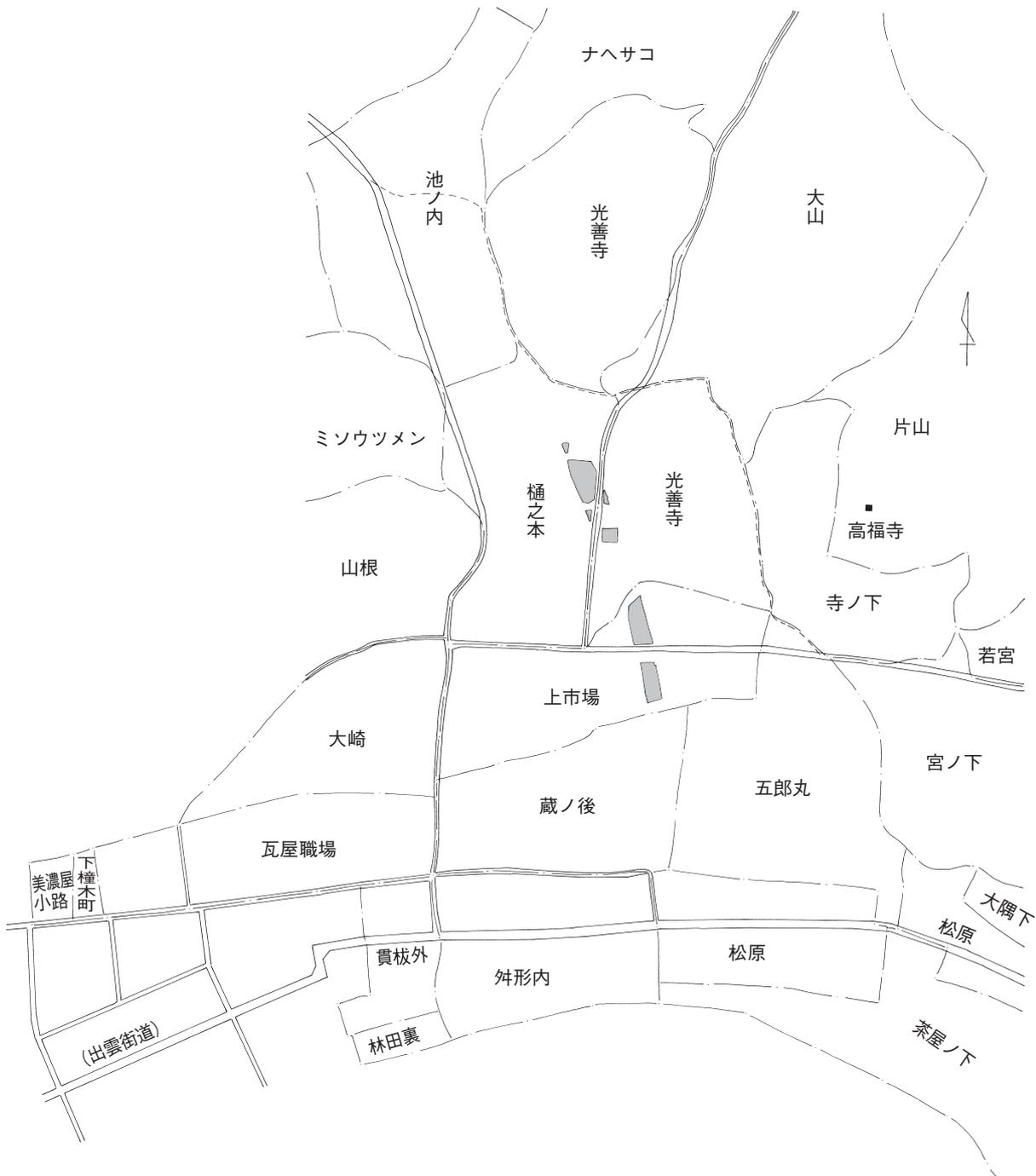
3. 近世の遺構・遺物について

近世の遺構としては粘土を採掘した跡がF・G地区、瓦を廃棄した土壌がF地区で出土している。近

世の遺構はF・G地区に集中し、出土遺物は瓦と窯壁片などがある。

(瓦について)

瓦は軒丸瓦が1点のみで他は丸瓦、平瓦が大半で他に棟込瓦、鬼瓦である。軒丸瓦はほぼ完形であるが一部歪んでいるため廃棄されたものと推測される。瓦当文様は左巻き三巴で珠文数は13、瓦当径は14.5 cmである。津山城跡出土の瓦にも同規模で左巻き珠文数13はあるが、現在の出土例には同様のものは見られない。また棟込瓦の輪違いを津山城跡出土と比べると本例の方が大ぶりであること、城の建物の内櫓にはあまりこれらを使用しない事から、これら瓦は寺院関連の可能性も考えられる。この軒丸瓦の特徴から近世でも古い時期と推測される。



第48図 周辺の小字名と推定道路(破線)

また、この今回出土した瓦と津山城跡出土の瓦などは自然科学的な分析をおこなっている。その結果分析資料が少なく明瞭ではないが、少なくとも津山城跡の瓦には、本遺跡出土瓦と胎土的に同じもの、本遺跡周辺出土の粘土と同じものなど3種類に分けられるようである（第IV章参照）。

（瓦生産）

近世になり津山城跡や寺院などの瓦がこの本遺跡周辺で焼かれている。窯があった場所もある程度わかっており、文政3年（1820年）の津山画図^{註28}には「瓦ヤ」と記され煙の出ている様子が描かれている。この場所の小字は第48図の「瓦屋職場」で、付近のその路地は「瓦屋小路」という。なお、津山画図より古い森藩時代の絵図には違う場所が描かれている。この場所はこの「瓦屋職場」より西で大隈神社の参道西側である。そのため、ある段階に瓦窯が移っているものと推測され、その時期は城下町が完成した寛文年間（1661～1673年）とされる^{註29}。いずれにせよ、瓦窯は本遺跡の西側に存在していたのである。この瓦を作る際には良質の粘土が必要で、この粘土をとるためには藩に願書を提出しなければならない。その事は『土居家文書』^{註30}の文化7年（1810年）の記事に「林田村御用瓦土取場…」と記された文書などがあり、この林田村のほか日上村でも土取りがおこなわれている。実際にどの場所で採掘されたか明瞭でないが、今回の調査区のF・G地区の土壌や不明遺構は、この瓦つくり関連のものである事は、埋土に瓦や窯壁片が含まれている事からもほぼ確実である。特にF地区北側は良質の粘土がとれる場所である事がわかり、調査区外でもかなりの土取りがおこなわれている事が予測される。また、G地区は比較的粘土質の土層は見られないため大規模な採掘跡は見られないが、第48図の小字「蔵ノ後」一帯は現地表面でも一段低くなっており、かなりの土が採掘されたものと思われ^{註31}、その際には元の地形には戻していないようである。

また今回検出した遺構の内、G地区の不明遺構5はある程度の採掘単位がわかる例であり、粘土の量が少ないため、それ程大規模にはなっていない。またF地区ではある程度粘土の量が多かったため、広い範囲を面的に掘り下げ、その後小規模の単位で部分的に掘り下げている。この単位はF・G地区とも円形ないしは長方形の掘り方で、おそらく一人が掘れる規模であろう。また、粘土掘削後は田畑にもどしている。この際に瓦や粘土質の土を利用して、特に深く大規模に掘り下げた所は丁寧に埋めているようである。

（註1）伊藤晃「中世窯業生産」『岡山県の考古学』吉川弘文館1987

（註2）平岡正宏「美作の古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究Ⅸ』日本中世土器研究会1993

（註3）團正雄「勝間田古窯跡群の動態—採集資料の紹介から—」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』古代吉備研究会2002

（註4）間壁忠彦・間壁霞子「備前焼研究ノート（1）（2）（3）（4）」『倉敷考古館研究集報1・2・5・18』1966・1966・1968・1984
間壁忠彦『備前焼』ニューサイエンス社1991

（註5）乗岡実「備前焼播鉢の編年遺について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会2000

（註6）安川豊史「美作国府跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第15集』津山市教育委員会1984

（註7）小郷利幸「正善庵遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第44集』東一宮土地区画整理組合・津山市教育委員会1992

（註8）江見正己他「久田原遺跡・久田原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告184』国土交通省苫田ダム工事事務所・岡山県教育委員会2004

（註9）鋤柄俊夫「岡山県における中世在土器の分布とその領域について」『研究紀要V o i l』財団法人大阪文化財センター1993

（註10）時實奈歩「岡山県における中世前半期の煮炊具の様相」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』古代吉備研究会2002

- (註11) 岡本寛久他「大田茶屋遺跡2他」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告129』岡山県教育委員会1998
- (註12) 平井泰男他「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会1984
- (註13) 保田義治「石鍋について」『鹿田遺跡I』（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊）岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1988
- (註14) 武田恭彦「新本新庄地区は場整備事業に伴う発掘調査その4」『総社市埋蔵文化財調査年報5』総社市教育委員会1995
- (註15) 草原孝典他『吉野口遺跡』岡山市教育委員会1997
- (註16) 岩本正二他『草戸千軒町遺跡発掘調査報告I・II・III・IV・V』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編1993・1994・1995・1995・1996
- (註17) 木戸雅寿「草戸千軒町遺跡出土の石鍋」『草戸千軒No.112』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1982
木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究IX』日本中世土器研究会1993
- (註18) 福田正継氏にご教示をいただいた。
- (註19) 小郷利幸「岡道東遺跡発掘調査報告」『年報津山弥生の里第3号』津山弥生の里文化財センター1996
- (註20) 高畑知功・二宮治夫「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会1978
- (註21) 正木輝雄・矢吹金一郎『新訂作陽史四』作陽古書刊行会1975
- (註22) 註17
尾島治「高福寺の歴史…物語」『大師殿・客殿・庫裡落慶記念誌』記念誌編集委員会1992
- (註23) 中村太一「山陽道美作支路の復元的研究」『歴史地理学大150号』歴史地理学会1990
- (註24) 宗森英之氏にご教示をいただいた。
- (註25) 「森家先代実録」『津山郷土館近世基礎資料一』津山市教育委員会1968
尚、「戸川宿」については、現戸川町周辺にトレンチをいれたが、近世以前に遡る遺構・遺物は見られず、下層は吉井川の氾濫源であった。そのため中世の「戸川宿」の場所は不明である。
行田裕美・平岡正宏「津山市街地再開発事業に伴う発掘調査」『年報津山弥生の里第6号』津山弥生の里文化財センター1999
- (註26) 竹久順一『美作国府館跡城下町の検証』1995
- (註27) 註19尾島文献
- (註28) 『津山城資料編II』津山市教育委員会2001
- (註29) 尾島治「瓦屋敷と土取場」『津山学ことはじめ』津山市2000
- (註30) 「土居家文書」『岡山県史第23巻 美作家わけ資料』岡山県史編纂委員会1989
御用瓦土取場の史料については乾貴子氏にご教示をいただいた。
- (註31) 墓地の部分が、高台のようになって残っている箇所があり、おそらくその周囲は土取により削られたものと推測される。宗森英之氏にご教示をいただいた。

图 版

林田池ノ内遺跡遠景
(南から)



トレンチ1



トレンチ1土層



トレンチ2



トレンチ3



トレンチ4



トレンチ5



トレンチ6



トレンチ6土層



トレンチ7



A 地区全景 (南側)



A 地区全景 (北側)



A 地区調査前



表土除去風景



表土除去後





A 地区全景



土壤 1



土壤 1 土層

建物跡・柵



建物跡・柵



建物跡 6 柱穴 1



土壙群



土壙 16



土壙 21



土壇 28・29



溝2



溝3～10



溝 12



土壙 23 ~ 26、不明遺構



不明遺構 2





B 地区調査前



B 地区全景



不明遺構 3

C 地区調査前



C 地区全景



土壇 30





土壇 30



D 地区調査前



D 地区全景

D 地区全景



土壙 32



土壙 33



E 地区調査前



E 地区全景



溝 18 ~ 20



F 地区調査前



F 地区全景（南側）



F 地区全景（北側）



F 地区土層 (北側)



土壙 35 土層



土壙 35



土壙 35 (瓦除去後)



土壙 37



土壙 43



柵6



G地区表土除去



G地区全景（北側）



G 地区全景 (南側)



G 地区土層



不明遺構 5





不明遺構 5



不明遺構 5 土層



柵 7



作業風景（トレンチ6）



作業風景（A地区）



作業風景（G地区）



出土遺物 (1)



報告書抄録

ふりがな	はいだいけのうちいせき							
書名	林田池ノ内遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	津山市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第75集							
編著者名	小郷利幸・白石 純							
編集機関	津山市教育委員会 津山弥生の里文化財センター							
所在地	〒708-0824 岡山県津山市沼600-1 電話 0868-24-8413 FAX0868-24-8414							
発行年月日	2005年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はいだいけのうち 林田池ノ内遺跡	つやましはいだ 津山市林田 816・9他	33203		35° 3′ 50″	134° 1′ 27″	2003.12. 2 ～ 2004. 6. 1	1,329 m ²	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
林田池ノ内遺跡	集落	弥生時代		土壙・溝		弥生土器 石器		
		中世		建物跡・柵・土壙・溝		土師器・勝間田 焼・備前焼・ 瓦質土器・石鍋・ 鉄器		
		近世		土壙（粘土採掘）		瓦		
要約	林田池ノ内遺跡は、弥生時代と中世から近世の遺跡で、その中心は中世から近世である。中世では建物跡や土壙などがあり主に集落遺跡である。近世では粘土の採掘跡と見られる土壙などが出土し、これらは津山城跡や寺院などの瓦を焼くためのものと考えられる。							

印 刷 仕 様

紙 質	表紙	アートポスト	220 kg
	本文	ニューエイジ	90 kg
D T P O S		Windows X P	Professional
	DTP	Adobe Indesign	CS
	図版作成	Adobe Illustrator	CS
	写真調整	Adobe Photoshop	CS
	Scanning	35 mm・6×7film	EPSON GT-X 700
		図面類	GRAPHTEC IMAGE SCANNER TS7000
使用 Font	モリサワ	OpenType	基本7書体（じゅんPro、リュウミンProL-KL、見出ゴ MB31Pro、見出ミンMA31Pro、太ゴB 101Pro、太ミンA101Pro、中ゴシ ックBBBPro）
画 像 原 稿		階調画像線数	は175線

林田池ノ内遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第75集

2005年3月31日発行

発行 津山市教育委員会
津山弥生の里文化財センター
〒708-0824
岡山県津山市沼600-1
TEL0868-24-8413 FAX0868-24-8414
印刷 津山朝日新聞社